

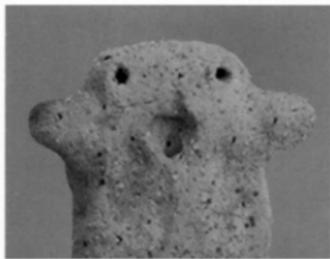
讃良川改修工事に伴う発掘調査
更良岡山遺跡発掘調査概要報告書



2000.3
四條畷市教育委員会

（表紙の土偶について）
四條畷市教育委員会で手の部分のみコンピュータで復元した。

讃良川改修工事に伴う発掘調査
更良岡山遺跡発掘調査概要報告書



2000.3
四條畷市教育委員会



平成12年3月撮影



平成12年3月撮影



大型彫刻石棒

A



彫刻石棒の前で長老が今年の狩について語る

B

この大型彫刻石棒は、上下が欠損しているが、単なるきのこ形をした男根ではなく、男女の交接を表現したのもである。襟巻き状の突帯が女性を表現している。

この石棒は讃良川のほとりの大きなケヤキのそばにたてられていた。自然がもたらす恵みを神に祈り、感謝したことだろう。それは村の安全と発展を示している。

この彫刻石棒は誰も見たことがない異文化であった。遠く北陸から運んできた更良岡山人のエネルギーに驚嘆する。



北陸から運ばれてきた色とりどりの小石（正硅岩・メノウ・鉄石英・碧玉）

A



大型彫刻石棒と共に伴した中津式土器

B



昭和44年出土 注口土器・深鉢土器

A



昭和44年出土 赤彩土器

B



昭和44年出土 祭具

A



昭和44年出土 ヒスイ製磨製石斧・蛇紋岩製磨製石斧

B

例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が平成元年・5年・8年～10年度に譲良川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、大阪府枚方土木事務所より委託を受けて実施した四條畷市岡山4～5丁目に所在する更良岡山遺跡の概要報告書である。
2. 発掘調査の各年度事業は以下の通りである。

平成元年度として、平成2年3月19日に着手し6月22日まで行った。
平成5年度として、平成5年6月1日～7月8日と10月16日～11月17日
平成8年度として、平成9年1月14日～3月17日
平成9年度として、平成9年9月30日～平成10年2月28日
平成10年度として、平成10年11月12日～平成11年3月10日まで
それぞれ発掘調査を行い、その年度末まで遺物整理作業を行った。
3. 発掘調査は、四條畷市教育委員会文化振興部生涯学習推進室主任
野島 稔・技術職村上 始を担当者とし、調査補助員として西川和秀・
脇坂 潔・大塚早百合・岡田恵子・熊西洋子・中西貞子・谷本由紀があ
たった。
4. 現地調査の実施にあたっては、大阪府河川課、大阪府枚方土木事務所、
大阪府枚方土木事務所寝屋川出張所、大阪府教育委員会文化財保護課、
岡山自治会、畷古文化研究保存会に御配慮を得た。記して謝意を表する。
5. 発掘調査の進行・本書の作成にあたって、次の方々の御教示を得た。
記して謝意を表したい。(順不同・敬称略)
関西外国语大学 濑川芳則・片岡 修・金沢美術工芸大学 小島俊彰、
龍谷大学 岡崎晋明・雲雀丘学園中高等学校 大下 明・曙川小学校
奥田 尚・大阪府教育委員会 堀江門也・中井貞夫・渡邊昌宏・
佐久間貴士・宮野淳一・上林史郎・酒井泰子・財団法人大阪府文化財調
査研究センター 小林義孝・秋山浩三・寝屋川市教育委員会 塩山則之・
濱田延光・濱田幸司・交野市教育委員会 貞鍋成史・大東市教育委員会
黒田淳一・中達健一・財団法人枚方市文化財研究調査会 櫻井敬夫・
宇治田和生・三宅俊隆・西田敏秀・奈良国立文化財研究所 光谷拓実、
奈良県立橿原考古学研究所 今津節生・元興寺文化財研究所 伊藤健司、
小矢部市教育委員会 伊藤隆三・大野淳也・竹野町教育委員会 松井敬代、
堺市教育委員会 森村健一・三重県埋蔵文化財センター 稔積裕昌。
6. 付章として櫻井敬夫氏には、更良岡山遺跡発見の契機と、昭和44年の
発掘調査の成果について玉稿を賜った。記して厚く感謝の意を表する次
第である。
7. 出土遺物の整理・実測などについては、野島 稔、村上 始、
佐野喜美・田伏美智代・斎藤依智子・駒田佳子・山下陽子・宮崎康子、
一山芳枝・市来 恵・萬谷満子・小川智恵子・北井志穂があたった。
8. 本書の執筆は野島 稔が行った。

卷頭図版・図版目次

- 卷頭図版 1 更良岡山遺跡周辺空中写真
- 卷頭図版 2 讃良川改修工事空中写真
- 卷頭図版 3 A 大型彫刻石棒 B イラスト 彫刻石棒の前で長老が今年の狩について語る
- 卷頭図版 4 A 北陸から運ばれてきた色とりどりの小石（正硅岩・メノウ・鉄石英・碧玉）
B 大型彫刻石棒と共伴した中津式土器
- 卷頭図版 5 A 昭和44年出土 注口土器・深鉢土器
B 昭和44年出土 赤彩土器
- 卷頭図版 6 A 昭和44年出土 祭具
B 昭和44年出土 ヒスイ製磨製石斧・蛇紋岩製磨製石斧
- 図版 1 更良岡山遺跡 平成元年度調査区全景・近世鋤溝全景
- 図版 2 調査区スナップ・土壤・溝検出状況
- 図版 3 微化分析試料採取スナップ・出土遺物 土器
- 図版 4 出土遺物 土器・石器
- 図版 5 更良岡山遺跡 平成5年度第1次調査区全景・近世鋤溝検出状況
- 図版 6 調査区スナップ・出土遺物 土器
- 図版 7 更良岡山遺跡 平成5年度第2次調査区全景・調査区スナップ
- 図版 8 調査区スナップ・縄文土器出土状況
- 図版 9 出土遺物
- 図版10 更良岡山遺跡 平成8年度調査区全景
- 図版11 土器出土状況・石槍出土状況
- 図版12 調査区スナップ
- 図版13 出土遺物
- 図版14 更良岡山遺跡 平成9年度調査区全景
- 図版15 調査区内瓦出土状況
- 図版16 掘立柱建物跡・落ち込み状遺構検出状況
- 図版17 落ち込み状遺構内磨製石斧・石皿出土状況
- 図版18 落ち込み状遺構内大型彫刻石棒・中津式土器出土状況

- 図版19 落ち込み状遺構断面・調査区全景
- 図版20 出土遺物 大型彫刻石棒・石斧・石棒
- 図版21 出土遺物 石斧・磨り石・石皿・敲石
- 図版22 出土遺物 石鎌・軒丸瓦
- 図版23 更良岡山遺跡 平成10年度調査区全景
- 図版24 井戸内土器出土状況・井戸完掘状況
- 図版25 井戸内メノウ製勾玉・土器出土状況
- 図版26 土壙墓群(サークル)検出状況
- 図版27 落ち込み状遺構内石棒出土状況
- 図版28 調査区全景
- 図版29 出土遺物 土器・石棒
- 図版30 出土遺物 石鎌・石器
- 図版31 出土遺物 勾玉・有孔円板・白玉・紡錘車・フイゴ羽口・鉄滓
- 図版32 出土遺物 土器
- 図版33 更良岡山遺跡 昭和44年出土 旧石器 チョッピングトール・各種石器
- 図版34 更良岡山遺跡 昭和44年出土 土偶・冠形石製品・冠形土製品
- 図版35 更良岡山遺跡 昭和44年出土 他地域の土器・石皿と敲石
- 図版36 更良岡山遺跡 昭和44年出土 祭具のレントゲン写真
- 図版37 更良岡山遺跡 昭和44年出土 鉄滓
- 讃良寺跡と正法寺跡から出土した軒丸瓦・軒平瓦

挿図目次

第1図	更良岡山遺跡周辺地形遺跡分布図	2
第2図	更良岡山遺跡調査地位置図	7・8
第3図	讃良川遺跡：貯蔵穴1 断面図	10
第4図	讃良川遺跡：北陸系浅鉢・船元I式深鉢	10
第5図	更良岡山遺跡 平成元年度（1989-1）遺構配置図及び断面実測図	15・16
第6図	出土遺物	19
第7図	No.1地点 試料採取位置	21
第8図	No.2地点 試料採取位置	22
第9図	更良岡山遺跡 平成5年度（1993-1）遺構配置図及び断面実測図	37
第10図	出土遺物	39
第11図	更良岡山遺跡 平成5年度（1993-2）遺構配置図及び断面実測図	41・42
第12図	出土遺物	44
第13図	更良岡山遺跡 平成8年度（1996-1）遺構配置図及び断面実測図	47・48
第14図	出土遺物	51
第15図	更良岡山遺跡 平成9年度（1997-1）遺構配置図及び断面実測図	55・56
第16図	整地層内讃良寺創建瓦出土状況	57
第17図	大型彫刻石棒	59
第18図	出土遺物	61
第19図	讃良寺跡・正法寺跡出土瓦	63
第20図	更良岡山遺跡 平成10年度（1998-1）遺構配置図	65・66
第21図	古墳時代井戸各層内遺物出土状況及び断面実測図	68
第22図	縄文晩期土壙墓群平面実測図及び断面実測図・縄文晩期落ち込み状遺構	71・72
第23図	出土遺物	76
第24図	更良岡山遺跡出土と同系式の大型彫刻石棒分布図	81
第25図	イラスト「更良岡山村へむけて出発だ～」	83
第26図	昭和44年出土祭具	86

本文目次

例 言

第1章	遺跡の位置と歴史的環境	1	
第2章	調査にいたる経過	5	
第3章	讃良川流域の遺跡	9	
第4章	調査概要報告書	12	
平成元年度（1989-1）		12	
層序	12	土壙	13
溝	14	出土遺物	18
微化分析報告書	21		
平成5年度（1993-1）		36	
層序	36	土壙	36
旧河川	38	出土遺物	39
平成5年度（1993-2）		40	
層序	40	第1～第3造構面	43
出土遺物			43
平成8年度（1996-1）		46	
層序	46	土壙	46
落ち込み状遺構	49	旧河川	50
出土遺物			51
平成9年度（1997-1）		52	
層序	53	溝	54
整地層	54	溝	54
掘立柱建物跡	54	落ち込み状遺構	58
出土遺物			60
平成10年度（1998-1）		64	
層序	64	旧讃良川の堰	67
讃良川に注ぐ溝	67	素掘り井戸	67
土壙墓群	69	溝	73
落ち込み状遺構	74	大溝	74
落ち込み状遺構	74	出土遺物	75
第5章	まとめ	79	
付 章	更良岡山遺跡	90	

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置し、更良岡山遺跡は大阪府四條畷市岡山に所在する。当遺跡は生駒山系の西側斜面から派生する洪積層の海拔25～30mの忍ヶ丘陵にある。東西に谷地形をなし、飯盛山系から西に、讚良川・清滝川・権現川が流れている。更良岡山遺跡は、この讚良川流域にある。

生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は八幡丘陵から南は南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵、段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川・寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清滝川という中小河川によって開かれている。この枚方台地は、原始・古代における幾多の遺跡の存在が知られている。

旧石器時代

四條畷市周辺の旧石器時代の遺跡として、更良岡山遺跡の範疇である讚良川床遺跡では、ハンドアックス・ナイフ形石器・細石器・削器・彫器などが出土している。また、JR忍ヶ丘駅の南側にある南山下遺跡で長さ11cmの完全な有舌尖頭器が出土し、四條畷市忍岡古墳付近・寝屋川市打上でナイフ形石器が採集されている。これらは枚方台地における旧石器研究上きわめて重要な位置をしめている。

縄文時代

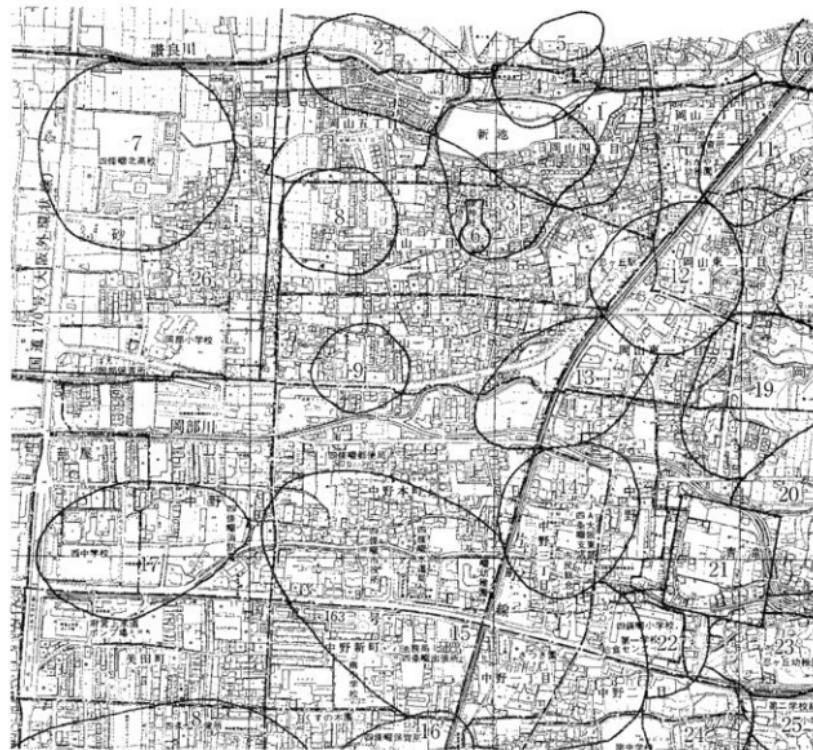
縄文時代においては、近年遺跡が多く発見されてきた。四條畷市田原遺跡や、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡で米粒文・山形文を施した縄文時代早期の押型文土器などが出土している。これらは近畿地方における最古形式の土器である。

縄文時代中期は、四條畷市南山下遺跡・砂遺跡、寝屋川市讚良川遺跡がある。讚良川遺跡では大量の船元式土器が出土した。

後期・晩期においては、四條畷市更良岡山遺跡で土偶・彫刻石棒・ヒスイ製石斧・土製勾玉などの祭祀具をはじめ高杯形土器・深鉢・注口土器などの土器類と多量の石器類が出土した。他に四條畷小学校内遺跡や清滝古墳群で土器類や石鎌が出土している。

弥生時代

四條畷市雁屋遺跡で弥生時代前期の大壺（高さ78cm）が出土している。この大壺は北九州の板付II式といわれているものである。その壺に伴い石庖丁が2点出土した。その



- | | | | |
|-----------|---------------|------------|---------------|
| 1. 更良岡山遺跡 | 2. 諒良川遺跡 | 3. 更良岡山古墳群 | 4. 諒良川床跡・諒良寺跡 |
| 5. 三味頭遺跡 | 6. 忽岡古墳 | 7. 砂遺跡 | 8. 北山遺跡 |
| 9. 奈良田遺跡 | 10. 国守遺跡 | 11. 坪井遺跡 | 12. 忽ヶ丘駅前遺跡 |
| 13. 南山下遺跡 | 14. 奈良井遺跡 | 15. 中野遺跡 | 16. 南野米崎遺跡 |
| 17. 鎌田遺跡 | 18. 雁屋遺跡 | 19. 岡山南遺跡 | 20. 清滝古墳群 |
| 21. 正法寺跡 | 22. 四條畷小学校内遺跡 | 23. 大上古墳群 | 24. 木間池北方遺跡 |
| 25. 城遺跡 | 26. 諒良郡余里遺跡 | | |

第1図 更良岡山遺跡周辺地形遺跡分布図

うちの1点は奈良県耳成山の流紋岩製である。この石庵丁の出土は北河内で最初に稻作が開始されたことを示している。なおこの調査区の50m東で縄文時代晩期末の深鉢が出士している。その他、前期の遺跡は四條畷市田原遺跡、寝屋川市高宮八丁遺跡、大東市中垣内遺跡がある。

中期においては、畿内第Ⅱ様式の時期に出現する高地性集落の寝屋川市太秦遺跡がある。畿内第Ⅲ～V様式では拠点的集落であった四條畷市雁屋遺跡がある。雁屋遺跡で多数の方形周溝墓が確認されコウヤマキ・ヒノキ・カヤ製などの木棺が出土した。なかで

もコウヤマキ製の棺は完全な姿で出土した。ヒノキの木棺から完全な人骨も出土した。

この中期の方形周溝墓の溝から墓前祭祀に使われた朱塗りの壺や把手付塊などが出土地。本製品では、双頭渦文が彫刻された蓋付四脚容器などがある。材質はヤマグワで赤彩されていたが、現在は朱の痕跡を確認することはできない。その他、ノグルミ製鳥形木製品は墓で使われた最古のものであった。また大阪府教育委員会の雁屋遺跡発掘調査でも鳥形木製品が出土している。

石製品は大量に出土しているが、特筆すべきものは銅鐸の舌が2本出土していることである。そのうちの1本は徳島の吉野川産の塩基性凝灰岩質点紋片岩である。銅鐸については、「明治44年に、砂岡山から入れ子になった銅鐸2口が出土した」と伝えられる砂山銅鐸があるが、現在関西大学が所蔵されている。その他、分銅形土製品が2点出土している。

雁屋遺跡で後期のV様式に属する土器も多量に出土している。そのなかで出雲の四隅突出型墳丘墓の西谷3号墓で出土した同形の土器が3点出土している。その内訳は把手付き鉢（住居跡）・脚付き鉢（円形周溝墓）・低脚杯（包含層）である。

西谷3号墳墓から多量の土器が出土しているが、これらの土器は葬送儀礼で使われたものであり、各地との交流を示す古備の特殊土器や北陸系の土器も含まれていた。現時点では、丹後・北陸地方の把手付き鉢・脚付き鉢は西谷3号墳墓と雁屋遺跡のみ出土している。低脚杯は山陰の土器である。

雁屋遺跡は中期において拠点的集落であり、後期になるとその位置を保っていないかったと考えていたが、先述の土器は出雲や丹後・北陸地方との交流を示し衰退したとは全く考えられない。雁屋遺跡は中期から後期まで拠点的集落として存在した重要な遺跡である。

古墳時代

古墳時代前期においては忍岡古墳がある。全長約90mの前方後円墳である。この古墳の竪穴式石室は保存され見学できる。この古墳築造に関わった集落は確認されていないが今後の調査で発見できる可能性がある。

古墳時代中期になると四條畷市中野あたりを中心にして馬の飼育が始まった。馬は朝鮮半島から運ばれ、渡来系の人々によって飼育された。奈良井遺跡は馬の祭祀場である。この遺跡から犠牲馬の首をはじめ儀式で使われた人形・馬形の土製品やミニチュア土器が多数出土した。

古墳時代の四條畷市は飯盛山系が南北に走り、山麓の西方2～3kmほどで河内湖となる。飯盛山系から、讚良川・清滝川・権現川が河内湖に注いでいる。この川が自然の柵となり小規模な牧場に適した環境であったのだろう。市内の古墳時代遺跡からは必ずと言っていいほど馬の歯・製塙土器が出土する。また四條畷小学校内遺跡・奈良井遺跡・中野遺跡などで初期須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が数多く出土し、渡来系の人々の存在を示している。他に馬に関する遺跡として、寝屋川市楠遺跡・高宮八丁遺跡・長保寺遺跡などがある。

中期になると墓/堂古墳など次々と築造されるが古墳に伴う形象埴輪は少なく、埴輪のはほとんどが集落から出土したものである。古墳からのものでは、忍ヶ丘駅前2号墳で琴を弾く人などがある。集落から出土したものとしては、忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・犬形埴輪（オスの子犬）・水鳥形埴輪、南山下遺跡で馬形埴輪、岡山南遺跡で家形埴輪が出土している。なお家形埴輪に伴って左足用の日本最古の木製下駄が出土している。

飯盛山系山麓は、馬飼の人々が墓域とした清滝古墳群・大上古墳群がある。この古墳群から横穴式石室が発見され、金銅装中空耳環が出土した。その他の古墳でも多数の遺物が出土している。他に、大東市堂山古墳群・寝屋川市太秦古墳群・終末期の石ノ宝殿古墳がある。

奈良時代

古墳時代に飯盛山系山麓に築かれた古墳群が、奈良時代の正法寺建立によって整地され破壊された。古墳は密集しているが、ほとんどの主体部が削平されている。

四條畷市の正法寺・讚良寺、寝屋川市高宮廃寺の三寺院は山系山麓の南北1km内に接近して建立された。

その他、木間池北方遺跡の河川から円面鏡や土器と共に土馬が7体出土した。南野遺跡では「大」の字を墨書きした土器が出土した。

城遺跡では通産省との合同地震調査が行われ、生駒断層の跡が発見された。この断層の研究の結果、断層の上の層から奈良時代の須恵器杯が出土し、地震は奈良時代以前におこったと判断できた。その後炭素年代法の分析で 1890 ± 50 年の年代が判明し、地震は弥生時代ごろであったことがわかった。このように地震予知の研究で、地質学と考古学が共同で研究する地震考古学が注目されている。

なお古代から中世にかけても数多くの遺跡が知られている。

第2章 調査にいたる経過

更良岡山遺跡は、四條畷市岡山4～5丁目に所在する。

この遺跡の発見は、昭和24年に四條畷高等学校教諭であった片山長三氏と同校生徒による発掘調査が最初である。新池北岸と一級河川讃良川との間にある畠地のA地点・B地点で表土層から古瓦・須恵器片・土師器片などとともに、縄文土器も数多く発見された。表土下50cmで約50～100cmの縄文時代の包含層である白色砂層の中から波状口縁の高杯形土器、元住吉山式の深鉢形土器・船橋系土器等で、いずれも縄文後期～晩期のものが出土している。石器類も、石鎌・石錐・石斧・敲石など生活に必要な道具類も比較的多く出土している。この発掘調査による遺物は「岡山遺跡」・「更荒寺遺跡」として大阪市立博物館に所蔵されている。

昭和44年の櫻井敬夫氏を担当者とする歴古文化研究保存会の発掘調査は、片山氏が調査した左岸の東部分にあたるC地点の平屋建倉庫内に調査地を設定している。この地点は奈良時代創建の讃良寺遺構と重なり、礎石や平瓦を敷き均した遺構を検出している。この遺構周辺から複弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦（文字瓦「六」）・丸瓦・平瓦と共に奈良三彩が出土している。また、縄文土器も多量に出土している。縄文土器の出土する堆積土は褐色砂層と砂疊層である。その層から、深鉢・注口土器・石器・碟器のほかに旧石器時代の遺物も出土している。

なおこの調査後に、歴古文化研究保存会によって「更良岡山遺跡」と命名され新池北岸に石碑を建設された。この発掘調査地点が更良岡山遺跡での縄文時代後期～晩期の集落跡の中心部と考えている。今回報告する讃良川改修工事に伴う平成9～10年度の調査地は、C地点及びA・B地点とは同一畠地であり、昭和44年当時の発掘調査トレンチを確認した。土壌状遺構を検出し、なおかつ重要な出土遺物があり本報告に欠くことはできない。遺跡の性格をより明確にするために昭和44年の調査について櫻井敬夫氏に玉稿をいただいた。

昭和45年には帝塚山大学の堅田直氏がD地点を発掘調査された。その結果包含層から縄文土器が出土している。

昭和46年、四條畷市教育委員会の調査はE地点で、包含層の黒色土層から縄文晩期の深鉢・浅鉢などの土器が出土した。また、石器類の石鎌・石匙・石錐・石斧・敲石・砥石などの生活道具も出土している。

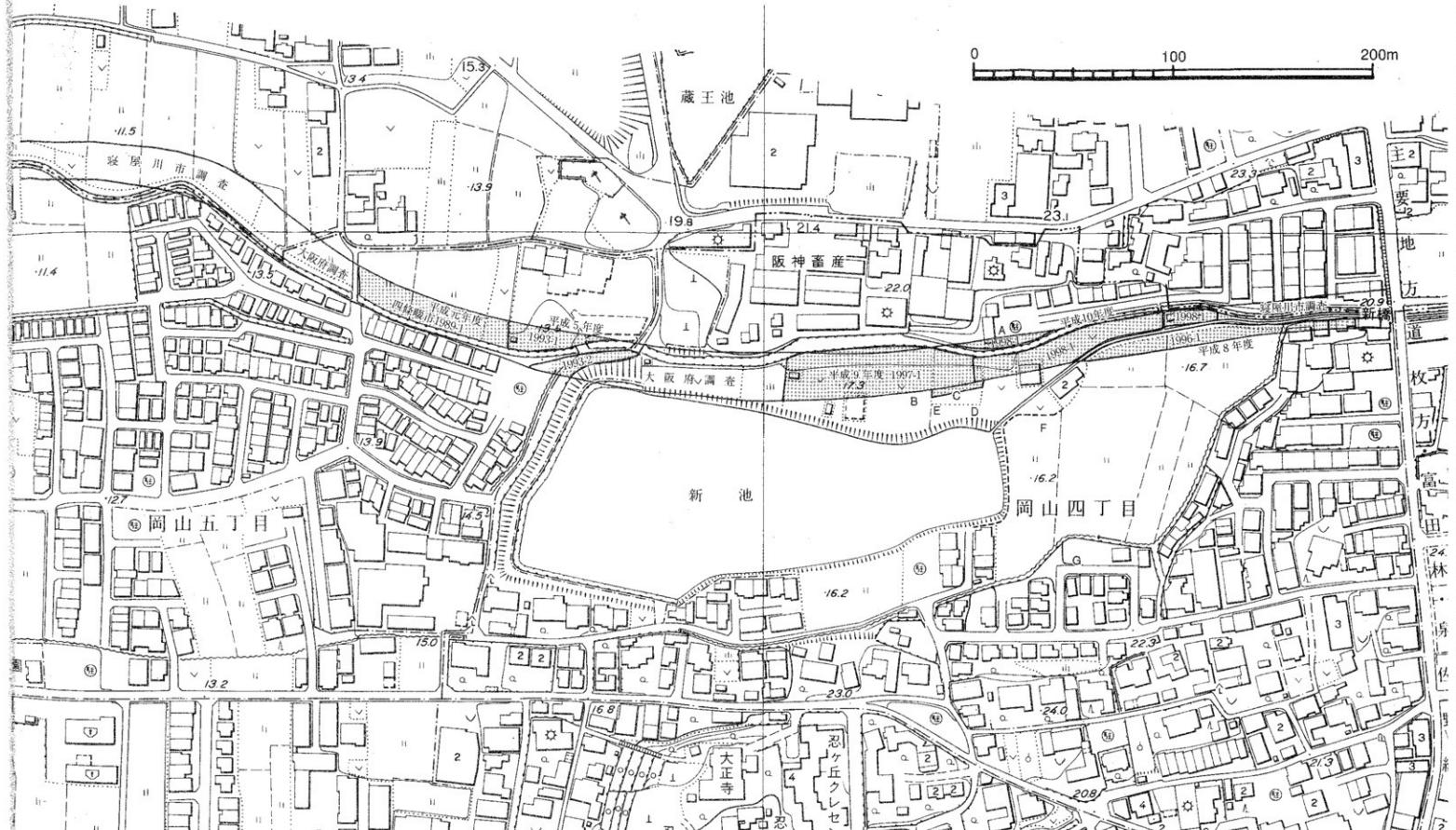
昭和50年、四條畷市教育委員会が新池東岸に公的住宅建設計画に係る遺跡範囲確認調査F地点を実施した。その結果、表土下1.6mの第6層褐色砂質土から縄文土器・敲石・石棒・石皿・砥石が出土した。また、隣接のトレンチから合計22本の杭列を検出した。その杭列の間隔は30~40cmで地山に打ち込まれており、共伴遺物から鎌倉~室町時代にかけての旧讃良川の水路護岸に伴う杭列である事が判った。

昭和55年、四條畷市教育委員会によって新池東南にある忍岡丘陵上に民間宅地造成に係わる発掘調査G地点を実施した。その結果、更良岡山遺跡内で初めて古墳時代後期の円墳2基、土壙状遺構を検出した事から、更良岡山古墳群と命名した。円墳の規模は1号墳で直径約18m、2号墳は一部の周溝を検出したが規模の復元にまでいたらなかった。また2号墳周溝外に東西1.5m・南北2.4m・深さ0.85mのU字状の土壙状遺構内から馬の歯が出土しており、この土壙内に馬の頭骨部の埋葬を行ったと考えている。このような出土例として、四條畷市清滝古墳群第2号墳周溝内において約0.2mの土壙を掘り込んで馬の頭骨部を埋葬していた。また、奈良井遺跡においては一辺約40mの方形をめぐらす祭祀場から完全な蒙古系の馬の骨1頭分および馬頭骨だけを切取って土壙に埋葬した例を含めて7頭分の馬の埋葬を確認した。

昭和44年の発掘調査で5世紀の須恵器有蓋高杯3点・土師器甕3点、六世紀の須恵器無蓋高杯・有蓋高杯・杯身・杯蓋・横甕等の土器が出土していたが、これも更良岡山古墳群に伴う土器であろう。

前述した昭和24年から46年の4回にわたる調査は新池北側の讃良川左岸ある。

四條畷市と寝屋川市境である讃良川両岸の改修予定地が下流域から改修工事が完了されてきたなかで大阪府教育委員会・大阪府枚方土木事務所・四條畷市教育委員会が協議を行い、遺跡が寝屋川市の範囲に広がる可能性が出てきたため、大阪府枚方土木事務所・寝屋川市教育委員会・四條畷市教育委員会で試掘調査方法について協議を行い、四條畷市岡山に所在する更良岡山遺跡の隣接地にあたる岡山4丁目889番地に埋蔵文化財の有無及び基本層序を確認する為の試掘調査を、平成元年8月11日~8月16日までの予定で実施した。その結果、すべての試掘穴から鋤溝遺構・土壙状遺構・溝状遺構を検出し、各遺構内から・中世・古墳時代・縄文時代の土器片が出土した。試掘結果に基づき平成2年から本格調査を調査区によって四條畷市教育委員会・大阪府教育委員会が発掘調査を行った。



第2圖 平良圓山遺跡調查地位置圖

第3章 讀良川流域の遺跡

更良岡山遺跡は讀良川の流域に存在する。讀良川は南北に走る飯盛山系から発し、西に流れ河内湾に注いでいた。その距離は山麓から2kmほどである。河内湾の水際は現在の外環状線あたりであったといわれている。この讀良川の流域で旧石器時代と縄文時代中期から晩期末まで連続として人が生活し続けてきた。

更良岡山遺跡は本文のなかで詳しく報告するが、主に大阪府教育委員会によって発掘調査された讀良川流域の縄文遺跡である砂遺跡と寝屋川市が発掘調査された讀良川遺跡の概略を述べる。

讀良川流域の縄文時代

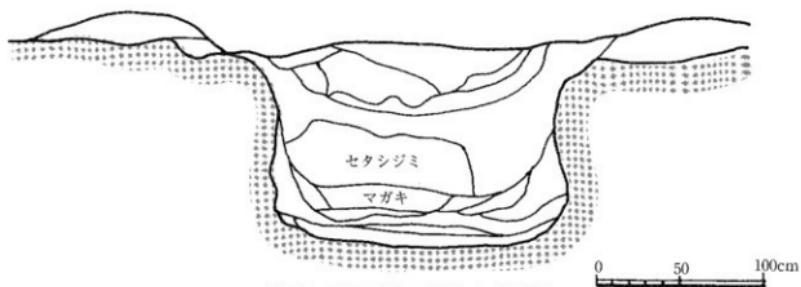
更良岡山遺跡における発掘調査の最初は、昭和24年当時四条畷高等学校教諭であった片山長三氏と同校の生徒によって発掘調査された。この調査で得られた資料は主に縄文時代後期から晩期にかけての土器と石器である。これらの資料は、現在大阪市立博物館に所蔵されている。

その後の昭和44年、櫻井敬夫氏と歴古文化研究保存会によって発掘調査された。この調査で、縄文時代後期から晩期にかけての土器・石器とともに土偶やミニチュアの祭具・ヒスイの石斧・大洞式の土器片などが出土した。

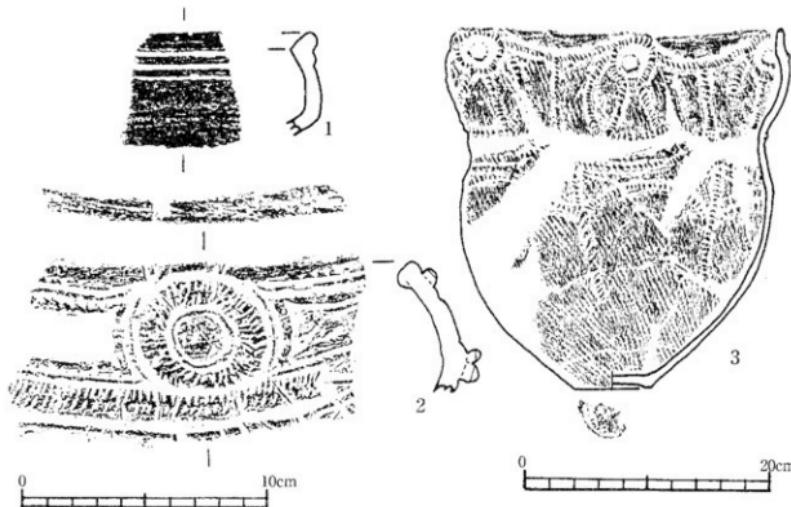
さらに更良岡山遺跡の下流において寝屋川市の調査による讀良川遺跡や大阪府教育委員会が調査された砂遺跡がある。砂遺跡は讀良川遺跡の西端にあたり、河口付近になるとおもわれる。

讀良川遺跡（寝屋川市）

讀良川流域における縄文時代中期遺跡の中心地は平成2年（1990）に寝屋川市教育委員会が発掘調査された讀良川遺跡である。この遺跡は讀良川の右岸側にあり、更良岡山遺跡の西側に隣接するものである。讀良川遺跡は、船元式土器が大量に出土し復元されている。その中心は船元Ⅱ・Ⅲ式であるが、Ⅰ式の後半のものも復元され良好な資料が得られている。これら大量の船元式土器にともなって、関東系・東海系・北陸系など他地域からの土器もかなり搬入されている。このなかで注目されるのは北陸系の新保・新崎式の浅鉢（第4図-1・2）である。更良岡山遺跡から出土した北陸の彫刻石棒との関係を考えるうえで手がかりになるのではないだろうか。



第3図 讀良川遺跡：貯蔵穴1 断面図
(第3・4図 寝屋川市史 第1巻より)



第4図 1・2 讀良川遺跡：北陸系浅鉢

3 貯蔵穴2出土 船元1式深鉢

讀良川遺跡において、土器以外のものでは、石鎌・スクレイパー・石錐・石錘・石皿・叩き石などの石製品、赤彩された耳栓、サメの歯・小動物の牙ペンダントやイノシシの牙の垂飾りなどの装飾品が出土した。

この遺跡の大きな成果は貯蔵穴が4基発見されたことである。貯蔵穴1の下層にはクリやドングリが残されており、貯蔵穴の機能を終えた後、セタシジミやカキが捨てられていた。それらはそれぞれ層をなして堆積していた（第3図参照）。貝類の他にイノシシ・タヌキ・ノウサギ・ニホンザルなどの獣骨、川でとれるナマズ・コイ・フナ、海の

ものとしてサメ・スズキ・フグ・黒ダイ・コチ・エイ・ボラなどの魚骨が出土し、漁労具の石錘・土器片錘・ヤスなども多数出土した。

貯蔵穴2は、直径が1.9m・深さ0.7mの円形をしている。この貯蔵穴の下層からは船元1式の新段階（第4図-3）のものが出土した。この土器は完全に復元されている。

またこの貯蔵穴の最下層では女性の頭蓋骨の一部が発見されている。

これらの貯蔵穴の調査によって、当時の讃良川周辺の自然環境を知ることが出来、食生活を復元することができた。

このように讃良川遺跡は住居空間の様相が顕著であるが、呪術的要素の強いものは出土しておらず、縄文時代中期の精神生活を探ることはできなかったのが残念である。しかし調査の範囲が広がれば墓や祭祀場などが発見される可能性は大きいと言える。

砂遺跡

大阪府教育委員会によって昭和58・59年にかけて発掘調査された。砂遺跡は讃良川遺跡の南西300mにある。縄文遺物は中期から晩期の土器や石器が出土した。土器は、中期の船元II・III式土器が多いが復元できるものはない。また晩期の土器棺など数基の土壙墓が検出され、人骨も発見された。

この遺跡は、中期の讃良川遺跡の西端にあたり、河内湾に注ぐ当時の讃良川の河口域にあたる。

更良岡山遺跡

更良岡山遺跡は中期の讃良川遺跡に続くものである。讃良川遺跡とは隣接するが、更良岡山遺跡の中心地である新池あたりでは中期の土器はほとんど出土しない。

更良岡山遺跡では後期から晩期の土器や石器類の他に、北陸産の彫刻石棒・土偶・ヒスイ石斧などの呪具が出土し、縄文時代後期から晩期における精神生活を知る手がかりを得た。

讃良川遺跡では当時の食生活を復元することができた。讃良川流域における環境は豊かな自然に恵まれた環境のよい住みやすい場所であった。

さらに讃良川縄文人は各地との交流を積極的におこない活動的な人々であった。

第4章 調査概要報告書

讃良川改修工事に伴う文化財発掘調査は、平成元年（1989-1）から平成10年度（1998-1）の間に四條畷市教育委員会が実施した。

発掘調査は基本的には下流域から発掘調査を実施しているが、一部平成8年度（1996-1）については府道枚方富田林泉佐野線と讃良川が交差する地点から下流域の発掘調査を実施した。第2図更良岡山遺跡調査地位置図に従い発掘調査年度ごとに報告する。

平成元年8月11日から8月16日まで四條畷市岡山4丁目889-4、889-3番地の水田地に3ヵ所試掘調査を実施した結果、すべての試掘穴から第3層灰褐色砂質土で鋤溝を検出した。またその下層の白色砂層及び灰黄色砂礫層から縄文土器片が数多く出土した。この層位は溝の堆積層と考えられる。遺跡の発見によって大阪府枚方土木事務所と四條畷市教育委員会が再三にわたって協議を実施した結果、讃良川改修工事にさきがけて河川部分及び管理道路部分の全面発掘調査を行うこととなった。

平成元年度（1989-1）（第5~8図・図版1~4）

発掘調査地は、四條畷市岡山4丁目889、889-2、889-3、889-4番地の水田が発掘調査の対象地であった。発掘調査によって掘削した土砂を仮置きすることが出来なかつた為発掘調査範囲内の西側部分から調査し、掘削土を東側調査区に仮置きを行いその後反転して全調査区の発掘調査を行った。西側調査区は、枚方土木事務所の平面計画図面を参照に部分座標を採用した。

層序

西側調査区の北側断面西端の基本層序は上から第1層（盛土）、第2層（耕土A）、第3層（耕土B）、第4層（床土）、第5層灰褐色砂質土、第6層浅黄色シルト層（7/3）、第7層オリーブ黄色シルト層、第8層灰黄色シルト層、第9層暗灰黄色シルト層、第10層オリーブ色シルト層（粘土混じり）となる。各層は東から西に少し傾斜している。

遺構のベース面は第6層直上において、試掘調査でも確認した鋤溝を検出した。第7層直上において土壌を検出した。この同一面にも溝の一部を検出している。

第1層 盛土。耕土として使用。

第2層～第3層 耕土A・耕土B。

- 第4層 床土。ほぼ東西水平に床土が置かれている。
- 第5層 厚さ約4~12cmで全域から認められる。東から西に少し傾斜を持っている。土師質小皿、染付けの陶磁器、陶器などが出土している。(第17層)
鋤溝は幅30cm・深さ8cmが1.5m間隔に南北方向に検出した。(図版1-B)
- 第6層 厚さ約10~20cmで東から西へ少し傾斜をしている。須恵器、土師器、炭化物が出土しており、古墳時代の遺物包含層である。この層位から土壙及び溝が検出され、土壙の年代は遺物からみると古墳時代後期である。(第19層)
- 第7層 厚さ14~30cmで、この同一層にブロック状に6~8cmにぶい黄色砂質土が堆積している。この層から溝4・溝9・溝10が検出している。(第45層)
- 第8層 厚さ4~30cmで調査区の中央部で4cmであるのに対し東・西では20~30cmと厚くなっている。(第51層)
- 第9層 厚さ20~26cmと比較的安定した堆積土層である。(第52層)
- 第10層 厚さ16cmで、東から西に傾斜している。この下層の青灰色シルト層(粘土混じり)で地山を認めた。(第53層)

土 壙

発掘調査区内に7基の土壙を確認している。遺物が出土した土壙1・土壙2・土壙3について説明する。

土壙1の規模は長径78cm、短径68cmのほぼ円形の土壙で、検出面の高さT・P+12.278m、深さ34cmであった。土壙1内から土師器片1点が出土している。

土壙2は、土壙3によって切られた状況で検出した。土壙2の規模は長径1.5m、短径1.4mの円形の土壙で、検出面の高さT・P+12.276m、深さ71cmであった。土壙2内の暗灰色砂質土に地山である明緑灰色シルト層をブロック状に含む。また、炭化物が多量に散在していた。土壙内から須恵器壺・土師器・甕が出土している。

土壙3は、土壙2の西側の一部を切りあって検出したもので長径1m、短径0.9mの円形の土壙である。検出面の高さT・P+12.286m、深さ75cmであった。土壙3内から土師器甕(図版3-B-1)口径15cm、器高12.5cmが暗灰色砂質土層内に口縁を下に向けて出土した。また、同一層内から土師器甕、土師器壺、須恵器壺などが出土している。

溝

溝1は、調査区X=-1340・Y=-2950地点の西側調査区中央部に溝1・溝2を検出した。検出段階で溝1・溝2とした遺構は掘り下げ完了時に同一溝であったため溝1として処理した。溝1は、南北方向に向かって掘られたもので、検出肩部の延長16m、幅3.4~3.7m、深さ1.1mで断面は皿状を呈している。溝肩は、西寄りでT・P+12.37m、東寄りはT・P+12.5mで溝底の比高差からみて、南から北へ向かって流れている溝である。溝内からの出土遺物としては、縄文土器・弥生土器の底部2点（図版3-B-5・6）・須恵器・土師器が出土している。

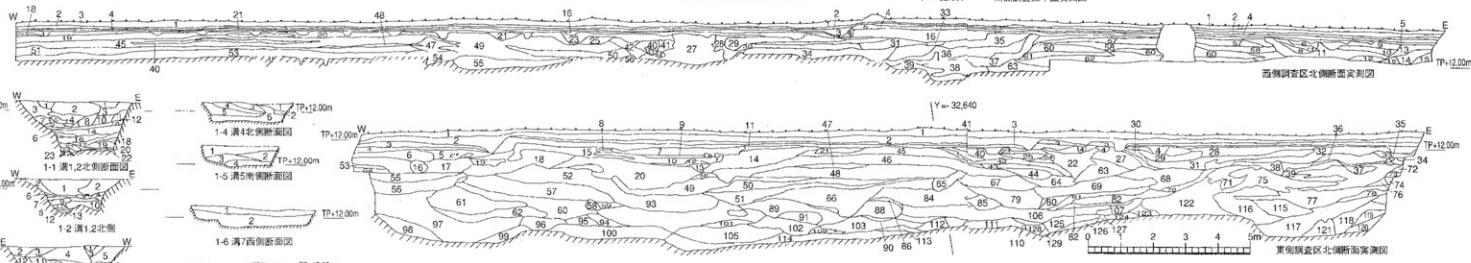
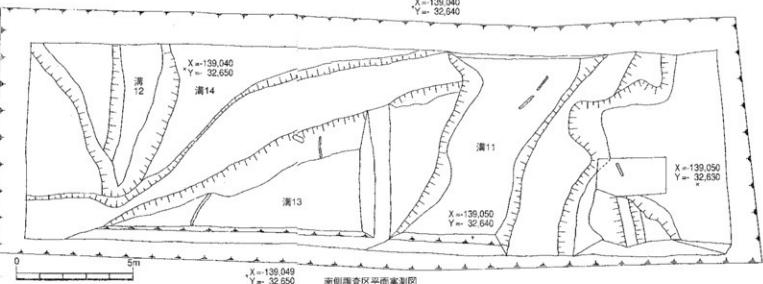
溝4は、X=-1340・Y=-2930地点の西側で幅2.1mを確認した。試掘調査において第1トレンチを設定した場所が溝4のほぼ中央部に位置している。この溝の東肩は、X=-1340・Y=-2940地点でL形に曲がりX=-1350・Y=-2940地点へ向かって行く。北側断面で確認した溝4の検出面の高さは、T・P+12.50mで規模は延長11m、幅4.2m、深さ1.1mで断面U字状を呈している。第21層の灰白色シルト層（8/2）は検出面で溝3と考えられていたもので、この溝も溝4の最終段階で埋まつた土層と考えられる。

溝1・溝2でも考えられていたように溝4の西側断面は、第54層の灰色シルト層（5/）腐蝕を含む層が堆積しているが、この地山肩部の青灰色粘質土及びにぶい橙色（7/3）砂礫層を侵蝕した状況で堆積している。溝底の比高差から、溝1同様に南から北東に流れそこから北に流れていることが判った。X=-1340・Y=-2938地点の溝4の屈折する地点の灰色砂層内から磨製石斧1点が出土している。第49層の褐灰色砂層（5/1）にぶい橙色砂層混入より多数の縄文土器が出土している。この溝の堆積土について、川崎地質株式会社に微化石分析を依頼した。試料採取地点は、溝4をNo.1地点、溝1と溝10との間をNo.2地点とした。この分析結果報告は、平成元年度の報告の最後に添付した。なお寝屋川市教育委員会が発掘調査した讚良川遺跡および弥生時代前期の高宮八丁遺跡の分析調査結果も関連資料として添付した。

溝5は、西側調査区の北東隅で検出した。幅2.6m、深さ50cmである。

溝6は、調査区の西端に東肩部だけ検出されたが規模は不明である。

また、南東隅で溝7を検出したがこの溝5と溝7の切り合い関係が不明であり、同一溝とも考えられるが溝5の東側肩部がL形に北側から東側に屈折することから一応溝5と溝7とを別に紹介しておきたい。



西側頭盔区北側頭而士属名

- | | | |
|------------------|-----------------|--------------------------------------|
| 1-1 濃1.5倍濃度土層 | 1-7 清2倍濃度土面 | 2倍土A |
| 1.5黑色沙質土 | 1.5黑色沙質土 | 3種土B |
| 3.5黑色沙質土上 | 1.5白色沙質土 | 5.1にい・春褐色沙質土
6.灰色沙質土(灰色砂質混入) |
| 4.5黃色沙質土上 | 2.5灰黃色沙質土上層 | 7.灰色土質土
8.褐色沙質土 |
| 5.5暗青色沙質土(褐土混入) | 3.5黑褐色沙質土(褐混土) | 9.明褐色沙質土(5.6) |
| 6.明褐色沙質土(褐混入) | 4.5黃色沙質土 | 10.にい・青褐色沙質土 |
| 7.青潔色沙質土 | 5.5暗青色沙質土(褐土混入) | 11.褐色沙質土 |
| 8.5青褐色沙質土下層 | 6.5土黃色沙質土 | 12.深褐色沙質土 |
| 10.黃褐色沙質土 | 7.5黃褐色沙質土 | 13.褐色沙質土(黃褐色沙質混入) |
| 11.暗青色沙質土(褐土混入) | 8.5黃褐色沙質土 | 14.灰白褐色土(褐土混入) |
| 12.7.5倍濃度土質土 | 10.5黃褐色沙質土 | 15.灰色土(土褐色) |
| 13.紅色粘質土上 | 11.灰色沙質土 | 16.褐色沙質土
17.灰褐色沙質土 |
| 14.暗綠色沙質土 | 12.暗青色粘質土上 | 18.黃褐色沙質土
19.青褐色沙質土 |
| 15.綠色粘質土 | 13.灰色沙質土 | 20.淺褐色沙質土 |
| 16.暗青色粘質土上 | 1-3.5濃10倍濃度土層 | 21.褐灰褐色沙質土
22.淺褐色沙質土等 |
| 17.暗青色粘質土(留宿中輕壓) | 1.5.5濃10倍濃度土層 | 23.灰青褐色沙質土
24.灰褐色沙質土 |
| 18.綠色粘質土上 | 1.5.5濃10倍濃度土層 | 25.灰褐色土等
26.灰褐色沙質土(5.6にい・青褐色沙質混入) |
| 19.綠色粘質土上 | 1.5.5濃10倍濃度土層 | 27.深褐色沙質土(1.3) |
| 20.青褐色粘質土上 | 1.5.5濃10倍濃度土層 | 28.深褐色粘土(1.3) |
| 21.灰色粘質土 | 1.5.5濃10倍濃度土層 | 29.灰褐色土(1.7)(沙層附近) |
| 22.灰褐色粘質土 | 1.5.5濃10倍濃度土層 | 30.綠褐色沙質土(6.1) |
| 23.灰褐色粘質土 | 1.5.5濃10倍濃度土層 | 31.褐色沙質土(5.1) |

- 34 オリーブ角シルト層(粘性あり)

- | | | | |
|---------------------|---------------------|----------------------|--------------------------------|
| 葉菜類北区側面土面層 | 34.紫草科紫草屬上 | 68.開紫草科(7.2)粗沙層 | 102.紫草科紫草屬 |
| 1.盛土 | 35.紫草科(2)乳劑 | 69.紫草科(7.2)細沙層 | 103.紫草科(2)乳劑
施木液混入 |
| 2.舞人 | 36.紫草科紫草屬下 | 70.開紫草科(6.8)粗砂層 | 104.明月色(2)粗沙層 |
| 3.灰土 | 37.開紫草科(7.2)粗沙層 | 71.淺綠色(7.3)砂土層 | 105.明月色(7.2)砂土層 |
| 4.橘紅色寶貴上 | 38.開紫草科粗砂層 | 72.明月色(7.3)粗沙層 | 106.明月色(7.2)細沙層 |
| 5.淡黃色(8.4)粗砂層 | 39.朱(3)粗沙層 | 73.1~3.1青黃色(3)粗沙層 | 107.明月色(4.1)砂利キ層 |
| 6.淡黃色(8.2)細沙層 | 40.白百合(8.1)乳層 | 74.1~2.5青黃色(3)層 | 108.杏色(4.1)粗沙層 |
| 7.珊瑚色粗沙層 | 41.白百合(8.1)乳層 | 75.白百合(7.8)土層 | 109.杏色(4.1)粗沙層 |
| 8.天藍色(7.2)粗沙層 | 42.米黃色(7.2)乳層 | 76.白百合(7.8)粗沙層 | 110.杏色(6.1)粗沙層 |
| 9.珊瑚色(6.1)乳層 | 43.黃色粗沙層 | 77.二色(7.6)粗沙層 | 111.黃色(8.8)粗沙層 |
| 10.淡黃色(6.2)砂利キ層 | 44.明褐蘭色(7.2)粗沙層 | 78.明褐蘭色(7.6)貴士 | 112.深紅色(4.1)土石層 |
| 11.淺黃色(7.4)乳層 | 45.白百合(8.1)乳層 | 79.明褐蘭色(7.1)粗沙層 | 113.深紅色粗沙層 |
| 12.鐵青色(5.1)砂利キ層 | 46.白百合(7.7)乳層 | 80.灰黑色(4.1)土石層 | 114.青黑色粗沙層 |
| 13.灰黑色(7.1)砂利キ層 | 47.1~3.5青綠色(7.2)粗沙層 | 81.淡綠色(7.3)砂利土 | 115.1~3青綠色(3)砂利土
黑色土(ロック混入) |
| 14.灰黑色(7.1)粗沙層 | 48.白百合(7.7)乳層 | 82.淡綠色(7.3)砂利土 | 116.1~3青綠色(3)砂利土
黑色土(ロック混入) |
| 15.珊瑚色(7.4)砂利キ層 | 49.白百合(8.1)乳層 | 83.淡綠色(7.3)砂利土 | 117.珊瑚色(7.4)砂利土
黑色土(ロック混入) |
| 16.灰黑色(8.1)粗沙層 | 50.黃黃色(6.4)粗沙層 | 84.1~3.1黃黃色(7.2)粗沙層 | 118.白色(8.1)粗沙層 |
| 17.灰黑色(6.2)粗沙層 | 51.灰色(6.1)土石層 | 85.灰色(4.1)粗沙層 | 119.青灰色(4.1)粗沙層 |
| 18.灰黑色(7.2)砂利キ層 | 52.灰色(6.1)乳狀土(2)粗沙層 | 86.明褐蘭色(7.2)土石層 | 120.明月色(7.1)粗沙層 |
| 19.珊瑚色(7.4)砂利キ層 | 53.紫(4)土石層 | 87.明褐蘭色(7.2)土石層 | 121.1~3.1黑色(3.1)土石層 |
| 20.灰黑色(5.2)粗沙層 | 54.黃黃色(7.2)土石層 | 88.5~6(5.1)砂利土(3)砂利土 | 122.灰黑色(6.1)粗沙層
(色相混入) |
| 21.灰黑色(6.1)粗沙層 | 55.黃黃色(6.1)土石層 | 89.5~6(5.1)砂利土(3)砂利土 | 123.1~3.1黑色(3.1)粗沙層 |
| 22.珊瑚色灰土(7.2)土石層 | 56.5~6(5.1)土石層 | 90.5~6(5.1)砂利土(3)砂利土 | 124.1~3.1黑色(3.1)土石層 |
| 23.灰黑色(7.2)1~3.5土石層 | 57.白百合(7.1)粗沙層 | 91.1~3.1青綠色(7.2)粗沙層 | 125.深紅色(6.1)粗沙層 |
| 24.珊瑚色灰土(7.2)土石層 | 58.5~6(5.1)土石層 | 92.1~3.1青綠色(7.2)粗沙層 | 126.深黃色(7.4)土石層 |
| 25.灰黑色(6.1)粗沙層 | 59.明褐蘭色(7.2)粗沙層 | 93.赤褐色(5.1)粗沙層 | 127.深黃色(7.4)粗沙層 |
| 26.深黃色(7.1)乳層 | 60.黃黃色(7.2)粗沙層 | 94.黃褐色(6.2)粗沙層 | 128.深黃色(4.1)粗沙層 |
| 27.珊瑚色(7.4)土石層 | 61.灰黑色(6.1)粗沙層 | 95.1~3.1黃黃色(6.3)粗沙層 | 129.蘭灰色(5.1)粗沙層 |
| 28.珊瑚色(7.4)1~3.5土石層 | 62.灰黑色(6.1)粗沙層 | 96.1~3.1黃黃色(6.3)粗沙層 | |
| 29.淺黃色(7.1)粗沙層 | 63.珊瑚色(7.2)粗沙層 | 97.1~3.1黃黃色(6.3)粗沙層 | |
| 30.淡黃色(7.1)細沙層 | 64.明褐蘭色粗沙層 | 98.灰黑色(6.1)土石層 | |
| 31.明褐蘭色粗沙層(7.2) | 65.明褐蘭色粗沙層 | 99.明褐蘭色粗沙層 | |
| 32.灰黑色粗沙層上 | 66.明褐蘭色粗沙層 | 100.草葉灰黑色粗沙層 | |
| 33.明褐蘭色粗沙層 | 67.白百合(8.2)粗沙層 | 101.薰衣草(6.1)土石層 | |

第5図 更良岡山遺跡 平成元年度(1989-1)遺構配置図及び断面実測図

溝7は、溝1によって西側が切られた状態で検出され、東側は先ほどの溝5によっても切られていた可能性がある。溝7の灰色砂層より砂岩の石皿が1点出土した（図版4-B-1）。長さ23.5cm、幅15cm、厚さ4.5cmである。使用痕は、表面に少し窪みがありその周辺も非常に磨り面が顕著であるが、裏面は一部分のみである。また、縄文土器の深鉢の口縁部（第6図-1・図版4-A-1）が出土した。推定口径49.4cmである。

溝8は溝4の南側に検出したもので北側肩部を確認したが南側肩部は讚良川の右岸の保護断面に含まれていたと思われている。溝内の灰褐色砂層から縄文土器とサヌカイト製の石匙（図版4-B-5）が出土した。長さ9.3cm、幅5.5cm、厚さ0.8cmである。

溝10は、東西方向に流路をもつ、検出面の肩部の高さはT・P+12.55m、幅5.5m、深さ1.35mの河川と思われる。切り合い関係は、溝1・溝4・溝5・溝9で切り合っていることから、これらの溝より溝10は古い段階であると考えられている。しかし、出土遺物の縄文土器片での形式編年差を見出すことはできなかった。溝10は溝1の溝底においても検出している。また、溝4でも南肩部は本来溝10の南肩部であった可能性がある。

東側発掘調査区内には、西側発掘調査区同様にY=-32,640ラインに近世の鋤溝を検出した。西側で土壙が7基検出されたが、東側では土壙は全く検出されなかった。遺構検出面においては、溝11・溝12・溝13・溝14をそれぞれ検出した。特に溝11及び溝12において形象埴輪及び円筒埴輪が出土した。また落ち込み状遺構についても須恵器・土師器・瓦が出土している。

溝11は、北側断面図に図示したとおり第67層灰白色（8/2）粗砂層及び第68層明赤褐色（7/2）粗砂層において検出したものである。検出面の高さは、T・P+12.4mで西側肩部は溝14の堆積によって削り取られているが、推定幅9m前後で、延長9.3m・深さ1.4mを確認した。堆積土層及び規模から見て河川と考えられる。堆積土層から円筒埴輪が出土した。

溝12は、X=-139,040・Y=-32,650地区内で、幅2.5m、延長6mまで検出した。溝内から形象埴輪（図版3-B-3・4）が出土し、そのうちの1点は人物埴輪の可能性がある。

この地域において出土する埴輪類は、溝内からの出土で一部ローリングを受けているものの近くに古墳があったことがわかる。

昭和44年の櫻井敬夫氏による更良岡山遺跡発掘調査および讚良川改修工事による発掘

調査において、円筒埴輪・朝顔形埴輪をはじめ須恵器有蓋高杯・無蓋高杯・壺身・壺蓋・甕・横甕、土師器甕などの土器類。副葬品の勾玉・管玉・有孔円板・紡錘車・駒の形をした石製品などが出土している。

昭和55年度の更良岡山古墳群発掘調査では円墳2基を検出し、古墳周濠内から円筒埴輪や衣蓋形埴輪・朝顔形埴輪が出土している。溝10・溝11・溝12から出土した埴輪は、5世紀後半から6世紀の埴輪であることからこの更良岡山古墳群の埴輪であることは間違いない。

古墳群の範囲はまだつかめていないが、相当広いものと思われる。平成元年度の調査区が更良岡山古墳群の西端であろう。

出土遺物

図版3-B-1は古墳時代の小型土師器甕。1cmあたり9本のハケメを持ち球形をしている。口径15.2cm・現存高12.2cm。

図版3-B-2は円筒埴輪片。断面がM字の低いタガを持つ。タガ幅は1.6cm。

図版3-B-3は形象埴輪片。たすきの紐をかけた巫女の背中の一部と思われる。

図版3-B-4は形象埴輪の円筒部の基底部片。推定底部径10.8cm。

図版3-B-5は弥生時代後期のタタキメのある甕の底部片。

図版3-B-6は弥生時代後期のタタキメのある甕の底部片。

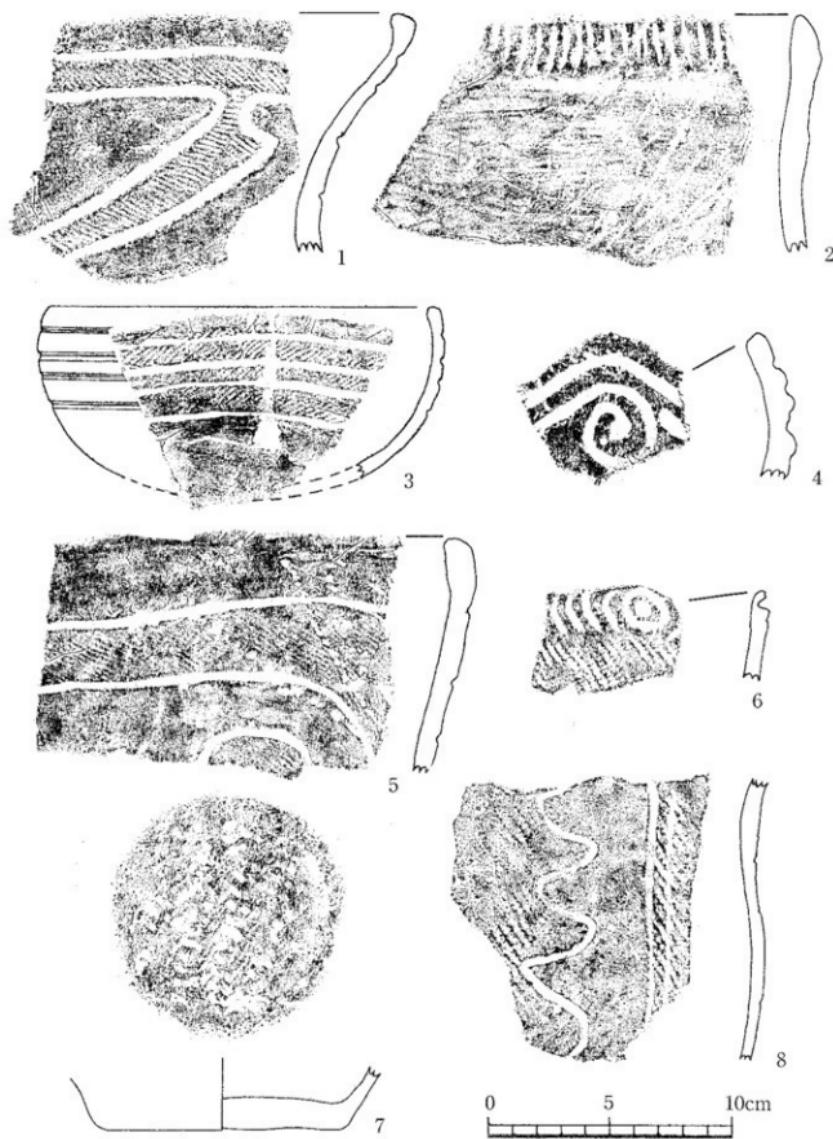
本報告のうち弥生時代の出土遺物はこの底部と図版13-8のサヌカイト製石槍である。

第6図-1・図版4-A-1は、縄文時代後期の中津式土器。口縁部から胴部くびれ部までの深鉢の破片。深い沈線で区画し、磨り消している。口縁端部は面をもち、内側が肥厚する。0.5~3mmの砂粒を含み胎土はやや粗い。茶褐色を呈する。

第6図-2・図版4-A-2は、縄文時代の深鉢口縁部片。口縁部直下に縱に短い沈線を施す文様体をもち胴部には文様をもたない。口縁端部はやや尖りぎみである。0.5~2mmの角閃石を含む。明茶褐色。

第6図-3・図版4-A-3は、縄文時代中期~後期の浅鉢。丸底で1/2残存する。高さ7.9cm・口径15.7cm。口縁下に沈線を4条施し縄文を充填している。明灰褐色。

第6図-4・図版4-A-4は、波状になる深鉢の口縁部片。主文様部に太い沈線で渦巻文を施す。0.5~3mmの砂粒を含み、茶褐色を呈する。



第6図 出土遺物

第6図-5・図版4-A-5は、かなり大型になると思われる深鉢口縁部片。磨消繩文を施す中津式土器。口縁端部は丸みをもつ。0.5~4mmの砂粒を含む。淡い茶褐色。

第6図-6・図版4-A-6は、やや波状になる深鉢の口縁部片。主文様部に同心円の沈線を施し、口縁端部はやや尖る。褐色を呈し、胎土は密である。

第6図-7・図版4-A-7は深鉢と思われる底部。底部外面に編物がスタンプされているが、2mm幅の平たい素材を使用している。

第6図-8・図版4-A-8は、口縁部文様帶下につく蛇行しながら垂下する沈線を施している。外面に煤が付着している。

図版4-A-9は深鉢の口縁部。口縁部は強いキャリパー形である。主文様部は渦巻文と思われる。摩滅が激しいが口縁直下に細かい波状文が見られる。胎土は細砂が多く含まれている。

図版4-B-7は繩文時代によく見られる補修孔のある土器片。表面の磨耗が激しく沈線間の繩文がわずかに観察できる程度である。孔は、外面で縦16mm・横11mm、内面は縦4.5mm・横4.2mmである。

第6図・図版4-Aで示した土器の4・6・8は繩文時代中期末のものと思われる。1989-1の調査区は繩文時代中期の讚良川遺跡に隣接し、中期から後期の土器が出土している。

石 器

図版4-B-1は石皿。中央と思われる部分が磨り面となって窪んでいる。半分が欠損していると思われる。縦13cm・横23.5cm・高さ4.5cmである。

図版4-B-2は磨製石斧。側面に面をもつ定角石斧。刃部の一部が破損している。長さ10.3cm・刃部の長さ5.7cm・基部の厚み2.9cm。

図版4-B-3は敲石。両面の中央に叩いて窪みをついている。

図版4-B-4は砥石。破損しているように見えるが、観察すると両面と、側面の長面を使用している。3面の中央にそれぞれ凹面がみられる。

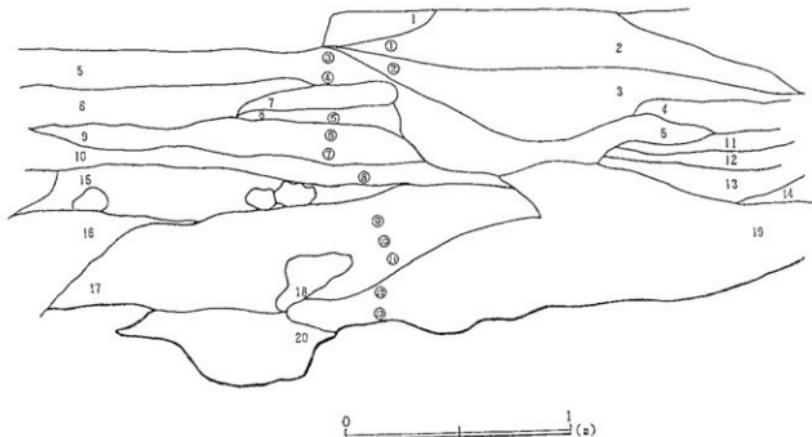
図版4-B-5は石匙。サスカイト製。縦5.4cm・横9.1cm・最大厚0.9cm。

図版4-B-6は石錘。灰緑色をしている。縦6.3cm・横3.5cm・最大厚1.6cm。

更良岡山遺跡発掘調査に伴う
微化分析報告書

1・採取位置(図版3-A)

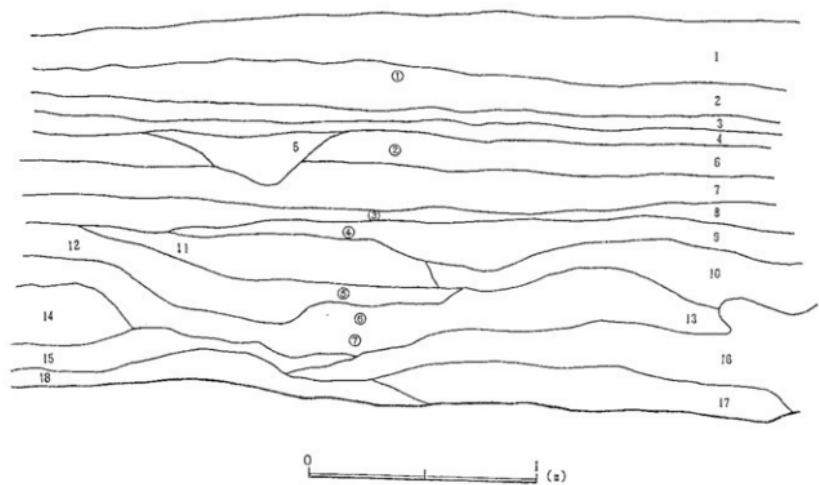
試料を採取したNo.1地点の土層図は第7図のとおりである。図に記入した①～⑯が各々の地点での分析試料の採取位置である。



- 1：鈍い橙色粗砂 2：青灰色砂質土 3：暗オリーブ灰色砂質土 4：緑灰色粘質土
5：緑灰色シルト 6：暗赤灰色シルト 7：灰白色細砂 8：暗青灰色砂質土
9：灰色シルト 10：明青灰色細砂 11：オリーブ灰色粘質土 12：暗灰色砂質土
13：淡黄色砂(明青灰色砂層混入) 14：灰色砂 15：灰色粗砂 16：赤灰色粗砂
17：灰白色シルト(灰白色砂層混入) 18：青黒色腐蝕土 19：灰色砂礫 20：灰色粗砂

第7図 No.1地点 試料採取位置

試料を採取したNo.2地点の土層図は第8図のとおりである。図に記入した①～⑦が各々の地点での分析試料の採取位置である。



- 1：盛土 2,3：耕土 4：床土 5：黄褐色シルト 6：灰色砂質土
7：褐色砂質土 8：浅黄色砂礫 9：明緑灰色シルト
10：明緑灰色粘土 11：灰白色シルト 12：緑灰色シルト
13：明青灰色シルト 14：浅黄色砂礫 15：灰オリーブ色細砂
16：灰色砂礫(縄文土器混入) 17：褐色砂礫 18：白灰色砂礫

第8図 No.2 地点 試料採取位置

1. 化石の検出状況

検出状況（珪藻、火山灰は概査の結果）は以下のとおりである。

産出状況は以下のように分けた。

- ：十分な数量が産出する → 検定・計数可能
- ：少ないが産出する → 検定可能・統計処理不可能な場合あり
- △：非常に少ない → 検定可能・統計処理不可能
- ×：産出しない → 検定・計数・統計処理不可能

(1) No.1 地点 [小計13試料]

	花 粉	珪 藻	火 山 灰
1	△	×	×
2	△	×	△
3	△	×	×
4	△	×	△
5	△	×	△
6	△	×	△
7	△	×	△
8	△	×	×
9	○	×	△
10	○	×	△
11	○	×	△
12	○	×	×
13	○	△	△

(2) No.2 地点 [小計 7 試料]

	花 粉	珪 藻	火 山 灰
1	○	△	△
2	△	×	△
3	△	×	△
4	△	×	○
5	○	△	△
6	○	△	×
7	○	△	△

2. 分析結果

1. 花粉化石の含有状況

前記のように、20試料の花粉分析をおこなった結果、すべての試料から花粉化石が検出された。しかしNo 1 地点試料No 1～8、No 2 地点 2～4 では花粉化石の含有量が少なく統計上充分な量の花粉化石が検出されなかつた。

2. 検出された花粉化石の種類

検出された花粉化石は、48種類である。

これらのうち、全試料を通じて花粉組成を特徴づける種類は以下のようである。

① 卓越樹木花粉

二葉松類、アカガシ亜属、コナラ亜属

② 卓越草本花粉

イネ科 (40ミクロン未満)、イネ科 (40ミクロン以上)、アブラナ科

カヤツリグサ科、ヨモギ属

③ 栽培種花粉

イネ科 (40ミクロン以上)、アブラナ属

イネ科は花粉粒径から40ミクロン以上と40ミクロン未満に区分した。40ミクロン以上は、イネ属(*Oryza*)を含んでいると考えられるが、そのすべてがイネ属であるとは断定できない。

3. 花粉組成の特徴

花粉組成の特徴を以下に、各地点毎に層序的下位より上位に向かって示す。

① No 1 地点

試料No 8～1 では木本花粉の検出量が少なく100に至らなかつた。このため、出現した種類のみを*で示す。

試料No 13～10 ではコナラ亜属が50%程度の高い出現率を示す。また、二葉松類、ハンノキ属、トチノキ属が数～10数%の出現率を示す。草本花粉ではカヤツリグサ科、ヨモギ属が10～15%、イネ科 (40ミクロン未満) が10～25%と高い出現率を示す。試料No 9

は木本花粉、草本花粉とともに試料No.13～10と同様の組成を示すが、二葉松類が20%と高率に、コナラ亜属が30%程度と低率になっている。

② No.2 地点

試料No.4～2では、木本花粉の検出量が少なく100に至らなかった。このため出現した種類のみを*で示す。

試料No.7～5はアカガシ亜属が50%以上と高い出現率を示す。また、草本花粉はほとんど出現しない。試料No.1では二葉松類が64%と高率で、スギ属が16%の出現率を示す。草本花粉はイネ科（40ミクロン未満）が68%、イネ科（40ミクロン以上）、アブラナ科が共に200%以上の高い出現率を示す。

3・考察

花粉分帶

花粉分析結果をもとに花粉分帶をおこない、各地点間の対比をおこなった。

I 帯（No.1 地点試料No.13～9）

コナラ亜属が、30%～50%と優先し、二葉松類、ハンノキ属、トチノキ属などを伴う。草本花粉ではカヤツリグサ科、ヨモギ属が10%～15%、イネ科（40ミクロン未満）が10～25%出現する。

また上部の試料No.9では、二葉松類の出現率が20%と下位に比べ高率に、コナラ亜属の出現率が30%と下位に比べ低率になる。このことから、本花粉帶を下位からa亜帶（No.1 地点試料No.13～10）とb亜帶（No.1 地点試料No.9）に細分した。

II 帯（No.2 地点試料No.7～5）

アカガシ亜属が50%以上と優占し、他に特徴的に検出される種類はない。また、草木花粉もほとんど出現しない。

III 帯（No.2 地点1）

二葉松類が64%と優占し、スギ属を伴う。また、草木花粉はイネ科（40ミクロン未満）が68%、イネ科（40ミクロン以上）343%、アブラナ科が256%と高い出現率を示す。

これまでの調査と花粉帯の対比

土器編年或は考古学的な年代推定の結果と分析試料採取層準を比較することにより、Ⅱ帶を縄文時代以降の堆積物であると考えた。またⅢ帶については中世以降の堆積物と推定されている。

更良岡山遺跡の今回の調査区、隣接した寝屋川市の調査区、高宮八丁遺跡、高柳遺跡および大阪周辺地域（古谷・1979）の花粉帯との比較をおこなった。表1に対比図を示す。大阪周辺地域の花粉帯の推定年代は、古谷（1979）がMAEDA(1976)、深泥が池团体研究グループ（1976）と対応させたものである。

I帶a亜帯はコナラ亜属のみが優占することから、古谷（1979）のF1亜帯に対比されると考えられる。I帶b亜帯は下位に比較しコナラ亜属がやや低率になり、二葉松類が高率になることから、古谷（1979）のF2亜帯および寝屋川市讚良川遺跡のI帶a亜帯に対比されると考えられる。II帶はアカガシ亜属が優占することから、高宮八丁遺跡のP1帯、古谷（1979）のF4亜帯、寝屋川市讚良川遺跡のII帶に対比されると考えられる。III帶は二葉松類が60%以上と優占しスギ属を10%程度伴うことから、古谷（1979）のF6亜帯上部および高柳遺跡のII帶b亜帯に対比されると考えられる。

以上のように対比が考えられ、古谷（1979）の花粉帯の推定年代を対応させると、I帶a亜帯はおよそ10000年から8000年前、I帶b亜帯は9000年から8000年前、II帶は6000年から2500年前、III帶は1500年前以降であると推定される。II帶の6000年から2500年前、III帶の1500年前以降に堆積したという推定年代は、上記のII帶が縄文時代以降、III帶が中世以降という推定年代と矛盾しない。III帶はイネ科（40ミクロン以上）、アブラナ科が高率であるが、このことは大阪周辺の他遺跡でも、近世から現代にかけての堆積物に認められている。従ってIII帶の堆積の推定年代は、中世以降である可能性が強い。

植生変遷

ここでは、各花粉帯毎に遺跡周辺の植生変遷を推定する。

I帶期（10000～8000年前？）

後背の山地（生駒山地）にはコナラ亜属の優占する冷温帯落葉広葉樹林が分布していたと考えられる。また上流の谷沿いでは、トチノキ属などが繁っていたと考えられる。遺跡周辺および遺跡内の湿地ではハンノキ属が繁り、イネ科やカヤツリグサ科の草本も生育していたと考えられる。自然堤防などの微高地では、ヨモギ属が生育していたと考

高宮八丁遺跡			大阪周辺地域		寝屋川讚良川遺跡			四條畷更良岡山遺跡				
			F6	1500y.B.P. 以降				III	中世以降			
P2	c	中世 古墳 -	F5	2000y.B.P.								
	b	弥生中期中頃 -										
	a	弥生前期末頃										
P1	c	弥生前期末頃 -	F4	2500y.B.P. - 6000y.B.P.	II	c	古墳以前 or 縄文?	II		縄文以降		
	b	弥生前期中頃				b						
	a					a						
			F3	6000y.B.P. - 7000y.B.P.								
					I	b	縄文?	I	b			
						a						
			F2	8000y.B.P. - 9000y.B.P.				I	a			
			F1	8000y.B.P. - 10000y.B.P.				I	a			

えられる。

今回の結果では、この時期にブナ属の出現が少なく、同様の現象が大阪湾周辺地域でも認められている（前田1980：古谷1979）。前回（1980）は、これを乾燥の影響であると考え、現在と同程度乾燥した、現在よりやや冷涼な気候であったと推定している。

b亜帯になりコナラ亜属、トチノキ属がa亜帯比べ減少し、二葉松類の出現率が増加する。のことから、気候の温暖化に伴いコナラ亜属を主要素とする落葉広葉樹林が縮小し、二葉松類を主要素とする二次林に移っていったと考えられる。

II带期（6000～2500年前？）

低地から後背の山地（生駒山地）にかけては、アカガシ亜属の優占する照葉樹林が広く分布しており、気候はI带期と比べかなり温暖であると推定される。

草本花粉の出現率が低率なため、遺構内または遺跡周辺の植生の推定は不可能である。

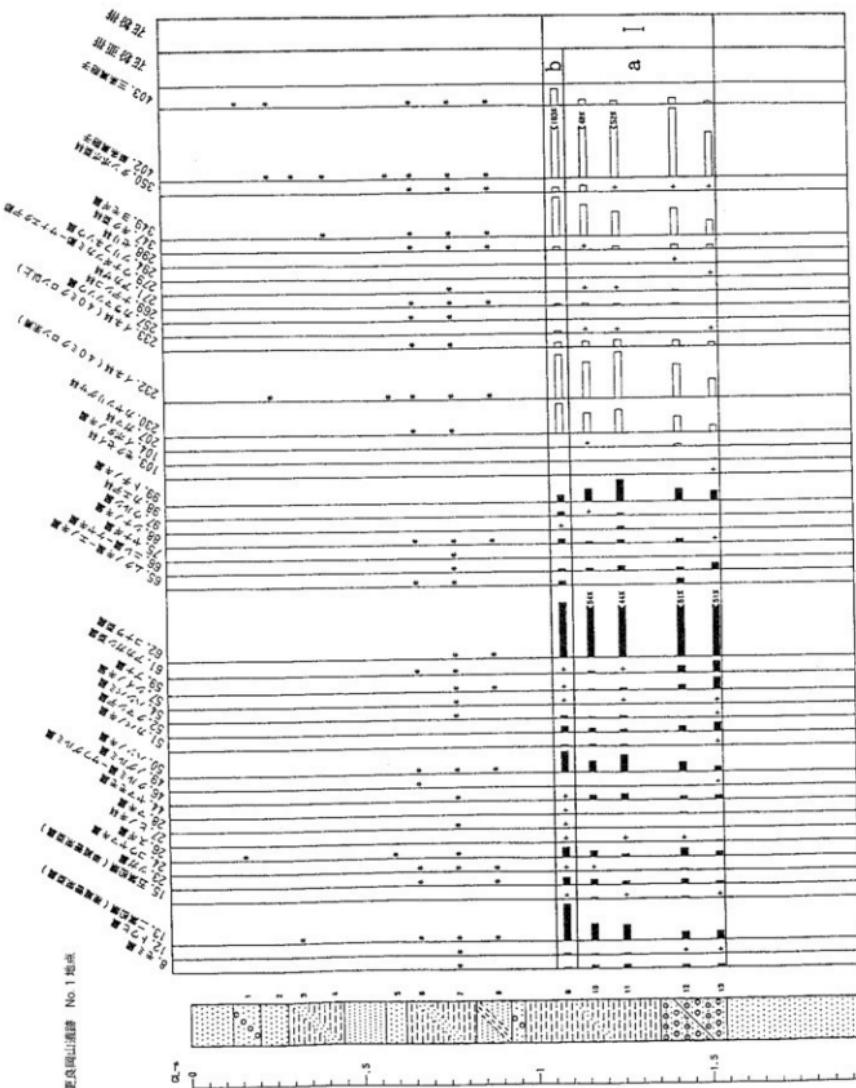
III带期（中世以降）

後背の山地では、アカガシ亜属などの照葉樹林の伐採によって、二葉松類を主とする二次林が広く分布していたと考えられる。遺跡周辺では稻作や、ナタネなどのアブラナ科の植物の栽培が行われていたと考えられる。アブラナ科は大阪府の泉州地区でも同時期に高率に出現することから、広い範囲で栽培がおこなわれていた可能性がある。

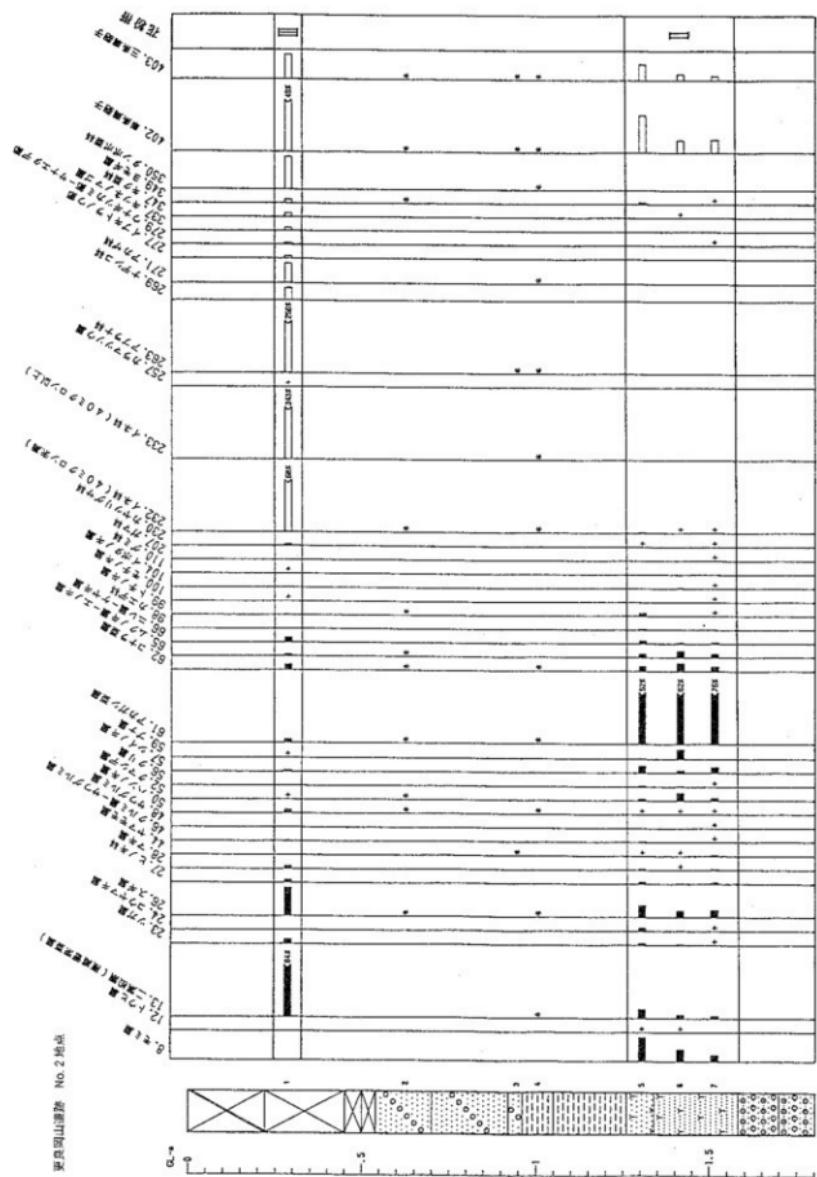
4 まとめ

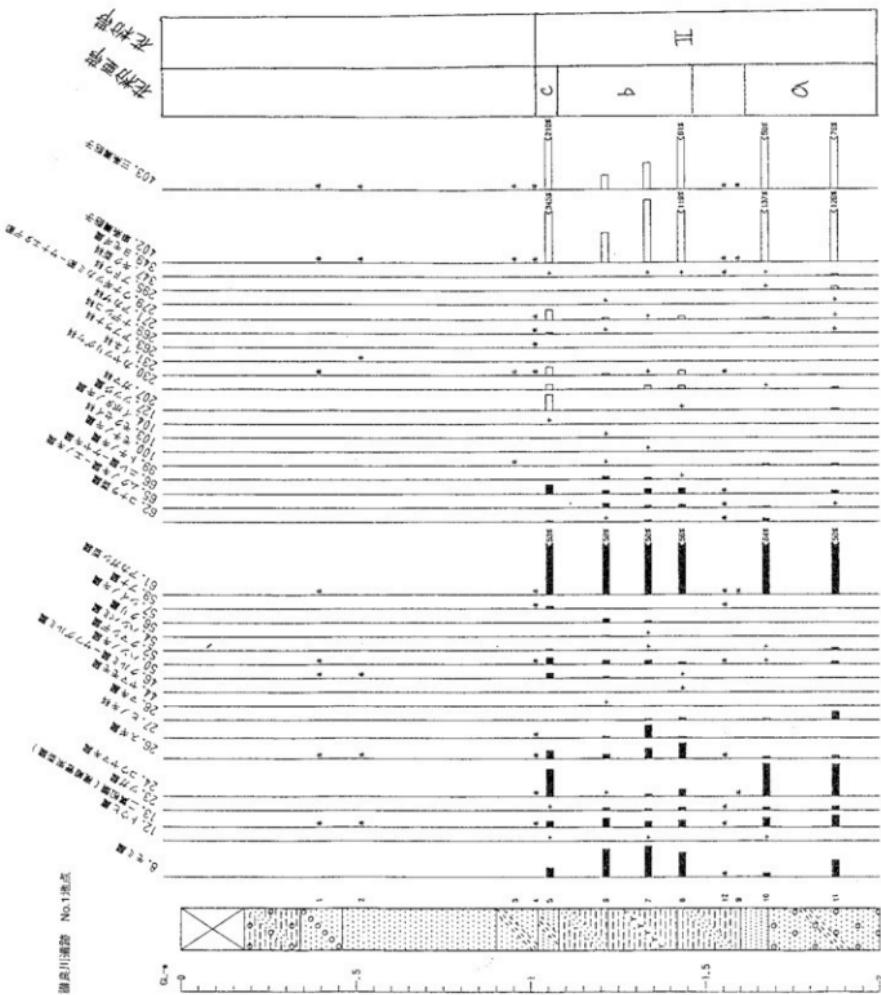
更良岡山遺跡においておこなった今回の分析から以下の事が明らかになった。

- 1) 遺跡内の花粉化石群集はI、II、III帶の3花粉帯に分かれ、さらにI帶はa、b亜帯に分かれる。
- 2) I帶はおよそ10000年から8000年前に、II帶はおよそ6000年から2500年前に、III帶は中世以降に堆積した可能性がある。
- 3) よよそ10000年から8000年前、およそ6000年から2500年前および中世以降の遺跡周辺の植生変遷を推定した。

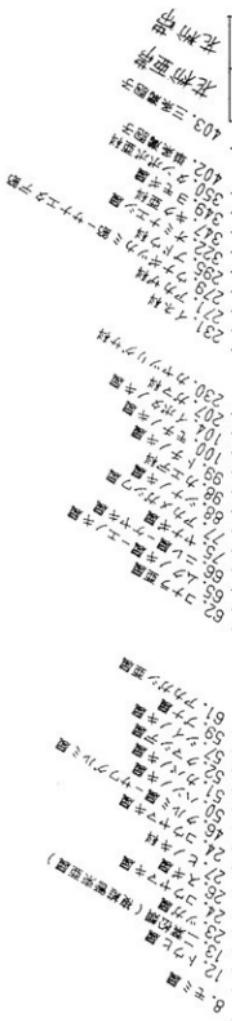
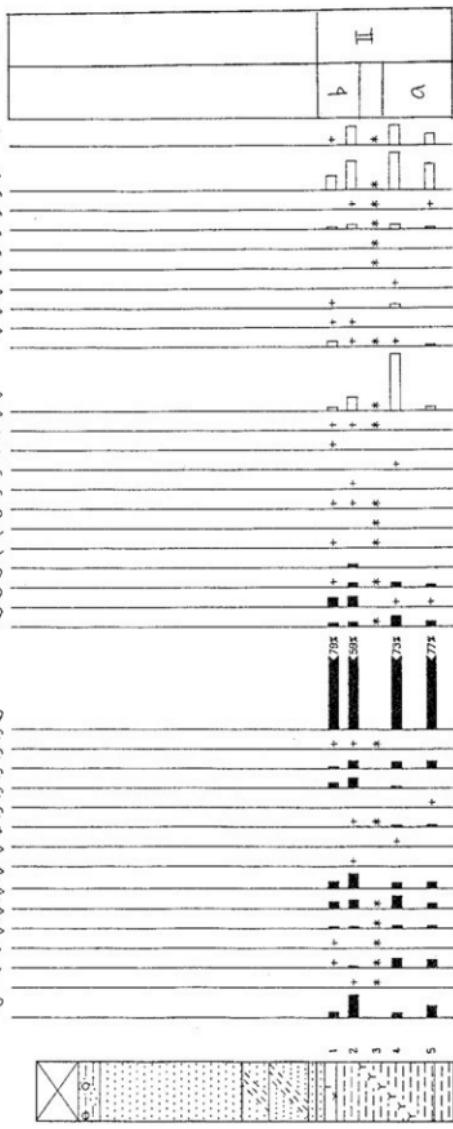


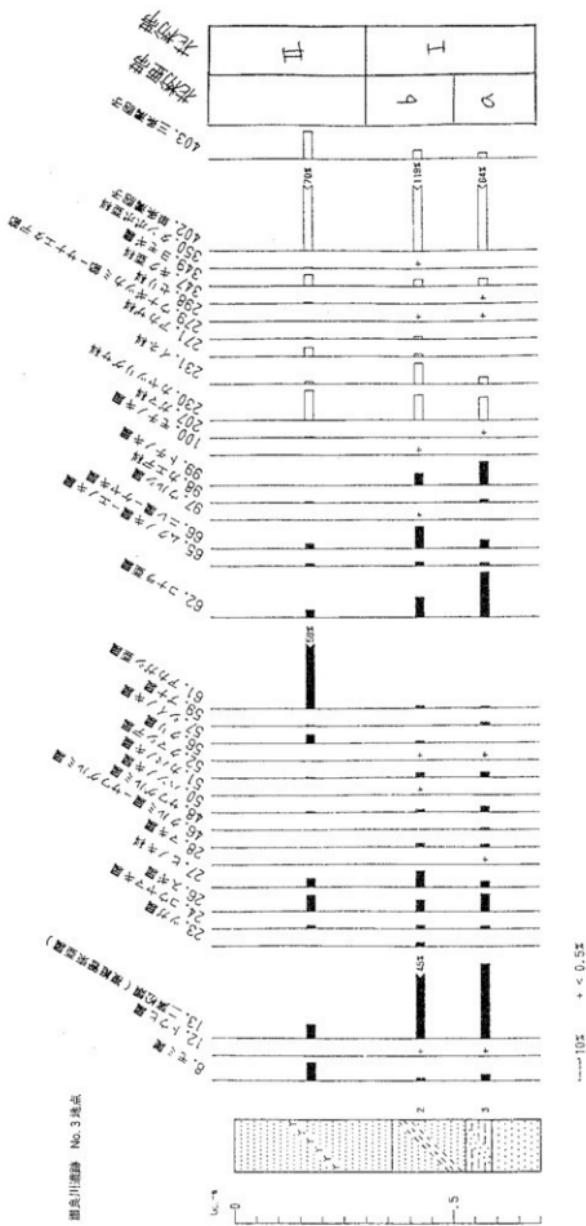
蒙泰煤矿 No. 1 井地质图



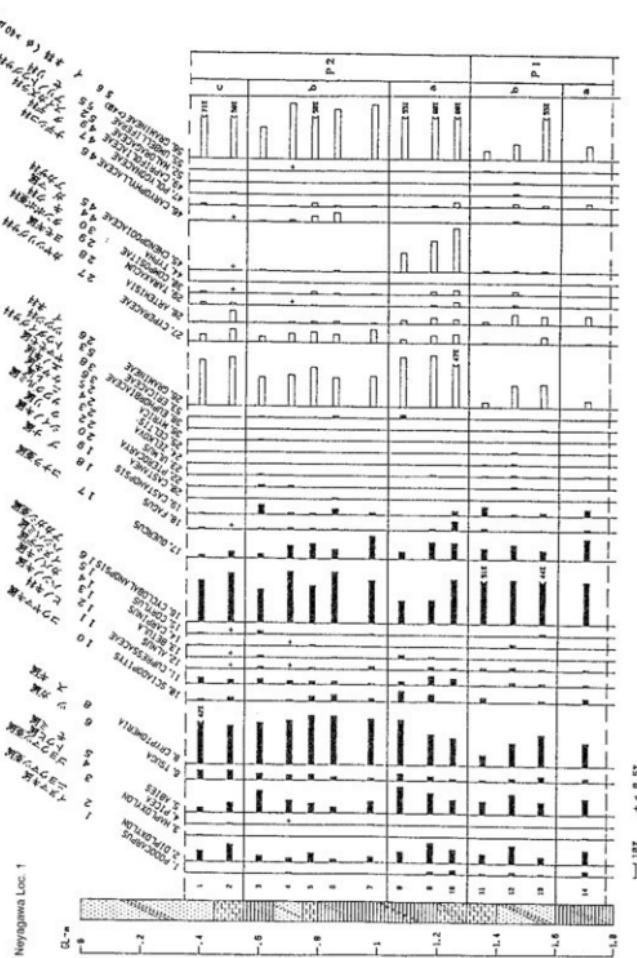


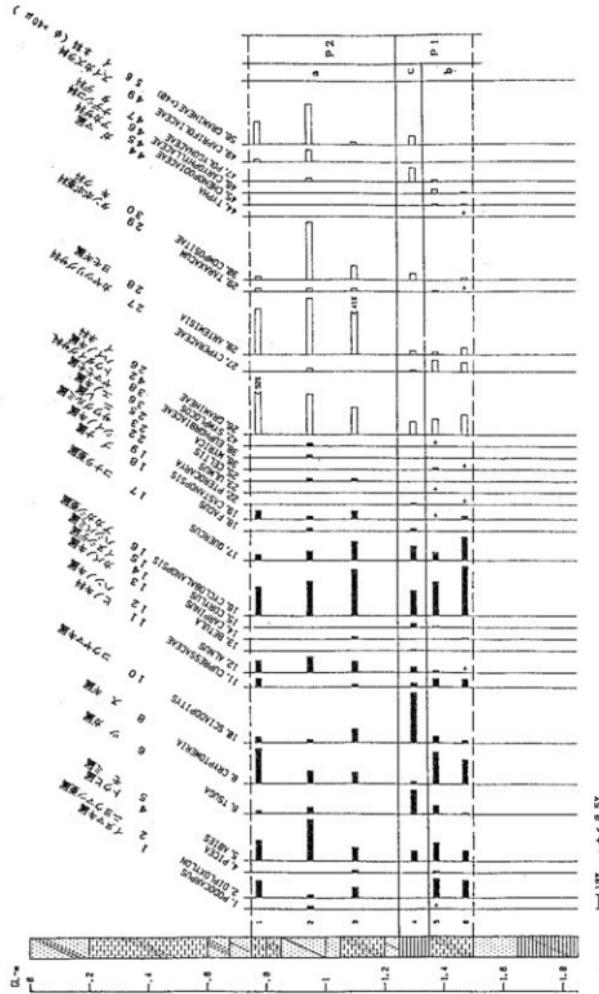
— 10^3 — + < 0.5x





Nev/Gonia Loc. 1





平成5年度（1993-1・1993-2）（第9～12図・図版5～9）

発掘調査地は、平成元年度に調査を実施した四條畷市岡山4丁目889番地の東側、すなわち讚良川上流の右岸側385mを平成5年6月1日から1993-1次調査として実施した。また対岸の左岸側の市道部分185mを平成5年10月16日から1993-2次調査としてそれぞれ実施した。

1993-1

枚方土木事務所の平面計画図面のNo.122+10mからNo.124地点の範囲であり、国家座標X=-139,041～X=-139,056・Y=-32,595～Y=-32,634地区内を調査した。調査区のほぼ中央部に北側住宅から讚良川への下水管が埋設されていた。

層序

調査区の北側断面の基本層序は上から第1層（盛土）、第2層（耕土）、第3層（床土）、第4層灰オリーブ色砂質土（7.5Y6/2）で遺物包含層である。この堆積土層は旧河川の肩部が検出され断面図でもX=-139,047・Y=-32,607地点で検出されている。この旧河川については遺構として後に説明する。また、X=-139,044・Y=-32,620地点では第4層下で土壤3基を検出した。第5層のオリーブ褐色砂質土（2.5Y4/3）遺物包含層まではほぼ水平の堆積をしているがそれより下は、旧河川及び大溝等の堆積土層でブロック状に粘土層が堆積している。

第1層 盛土。会社の事務所及び資材置場・駐車場として使用。

第2層 耕土。

第3層 床土。ほぼ東西水平に床土が置かれている。

第4層 厚さ約20～30cmで東端のY=-32,605地区とY=-32,620地区の2ヶ所に認められる全域から認められる。

第5層 厚さ20～40cmで第4層と接してそれぞれ検出した。この第4層及び第5層には土師質小皿、染付けの陶磁器、陶器などが出土している。

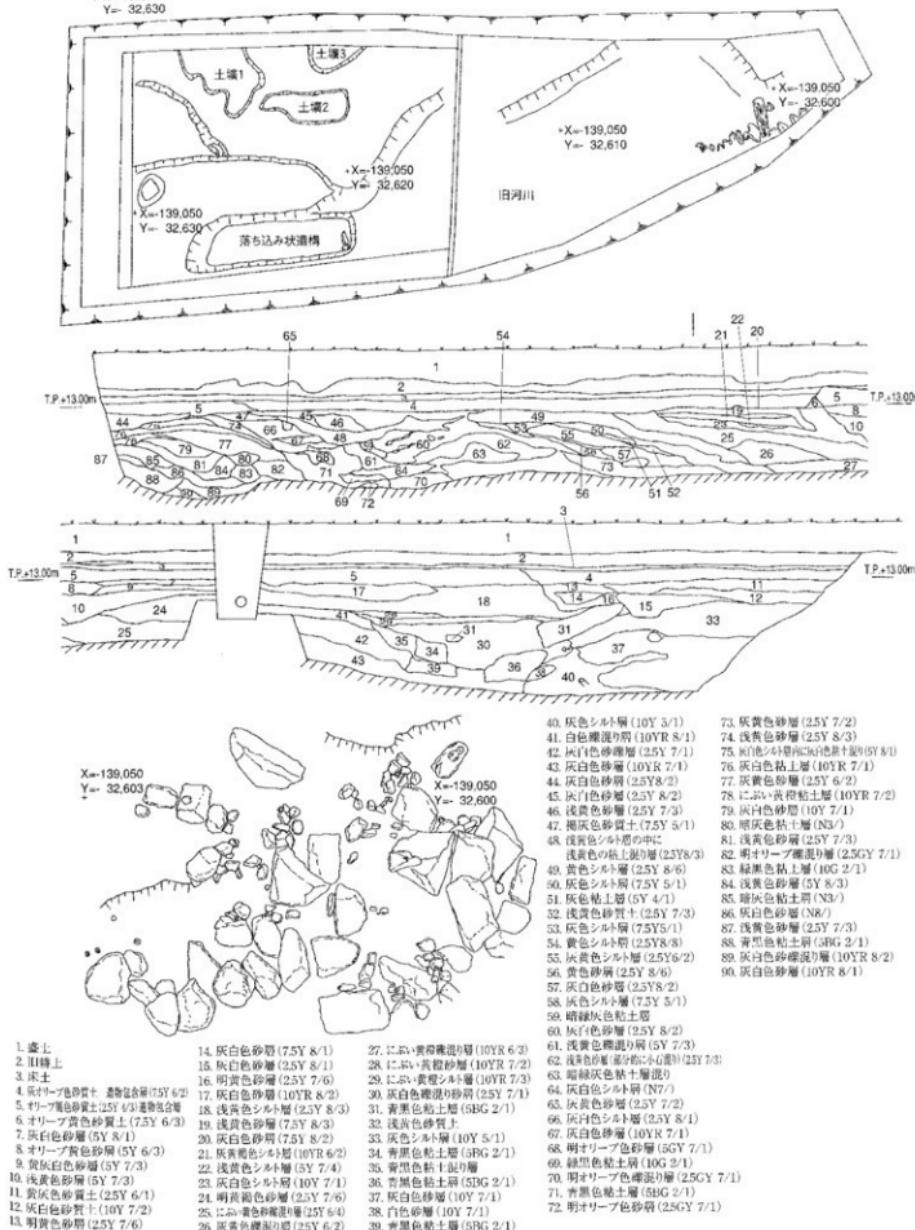
鋤溝は幅30cm・深さ8cmが1.5m間隔に南北方向に検出した。（図版5-B）

第5層以下は土壤及び旧河川の堆積層である。

土壤

発掘調査区内に不整形な土壤を3基確認している。

土壤1はX=-139,045・Y=-32,625地点に検出した。規模は東西幅2.8m、南北3mま



第9図 更良岡山遺跡 平成5年度（1993-1）遺構配置図及び断面実測図

で検出したが北側調査外に続く土壙である。検出面の高さT・P + 12.795m、深さ23cmであった。土壙1内から土師器片1点が出土している。

土壙2は、土壙1の東側のX = -139.047・Y = -32.620地点に検出した。規模は東西4m、南北1.4mの長方形の土壙である。検出面の高さT・P + 12.775m、深さ27cmであった。

土壙3は、土壙2のすぐ北側のX = -139.045・Y = -32.620で北側断面に接して検出した土壙で楕円形を呈している。検出面の高さT・P + 12.815m、深さ16cmで土壙内に浅黄色砂層(7.5Y8/3)が堆積している。

旧河川

旧河川は、調査区X = -139.047・Y = -32.607地点からX = -139.050・Y = -32.630地点に向かって検出したが、河川右岸側の肩部の高さはT・P + 12.831mで断面実測図の第4層下層で旧河川の堆積土層の第11層黄灰色砂質土(2.5Y6/1)厚さ16~24cm、第12層灰白色砂質土(10Y7/2)厚さ10~24cm、第13層明黄色砂層(2.5Y7/6)厚さ20cm、第14層灰白色砂層(7.5Y8/1)厚さ10~20cm、第15層灰白色砂層(2.5Y8/1)厚さ44cm、第16層明黄色砂層(2.5Y7/6)厚さ12cm、第31層青黒色粘土層(5BG2/1)厚さ40cm、第32層浅黄色砂質土厚さ10cm、第33層灰色シルト層(10Y5/1)厚さ24~70cm、第37層灰白色砂層(10Y7/1)厚さ44~104cm、第40層灰色シルト層(10Y5/1)厚さ40cmで河川底になる。河川底の高さT・P + 10.8mで、深さ2.08mを測る。第37層と第40層には自然木が上流から流れていた。

またX = -139.048・Y = -32.630地点の右岸肩部の高さT・P + 12.804mで河川の深さ1.644mである。河川内から古墳時代後期の須恵器・土師器と円筒埴輪や縄文土器が出土している。また河川底のX = -139.053・Y = -32.625地点で東西8m・南北2.5mの長方形の落ち込み状遺構(図版6-A)が検出した。深さ1.15mの落ち込み状遺構内から円筒埴輪及び朝顔形埴輪・提瓶(図版6-B)が出土した。

またX = -139.049・Y = -32.600地点で先ほど説明した旧河川と直交する肩部が検出した。肩部の高さは、T・P + 12.474mで肩部下でT・P + 11.04mを測る。

このX = -139.050・Y = -32.603地点までの東西4m・南北2.7mの範囲に径15~80cmの大小約100個の花崗岩が整然と検出した。この石敷き内から円筒埴輪や中世の瓦器・土師質皿等が出土した。この石組みの中から石仏1基が出土した。

昭和44年に畠古文化研究保存会で発掘調査された際に複弁蓮華文軒丸瓦と重孤文軒平瓦が出土していたが、これは年代が合わないままになっていた。今回の調査によって素弁蓮華文軒丸瓦と重孤文軒平瓦が出土したことにより、正法寺と同じ奈良時代には讃良寺が存在していたことが判明した。

出土遺物

第10図-1・図版6-B-1は縄文時代中期船元Ⅲ式の深鉢胴部片。突带上およびその周囲に多条に平行沈線を施す。三角形の幾何学的な文様を施している。

第10図-2・図版6-B-2は口縁部文様帯をもつ縄文時代中期末の深鉢片。梢円形に区画し、胴部に垂下した沈線をもつ。淡い灰黄褐色。

第10図-3・図版6-B-3は船元式土器深鉢片。表面が摩滅し、縄文は観察できない。口縁部内面に施された縄文がわずかに観察できる。

図版6-B-4は円筒埴輪の基底部。2cmで9本前後のハケメを基底部の下まで施している。タガは断面が低い台形である。

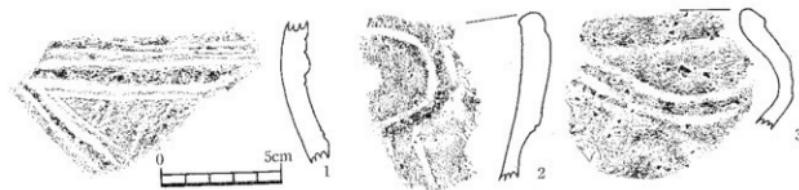
図版6-B-5は形象埴輪片であるが器種は不明である。

図版6-B-6は古墳時代の須恵器提瓶である。口縁径は推定10cm・残存高9cm。

図版6-B-7は須恵器壺口縁部片である。口縁は直口であり、肩部に耳がついている。外面に暗緑褐色の自然釉がかかっている。内面は青海波文が施されている。

これらの古墳時代の出土遺物は6世紀に属するものである。

図版6-B-8は重孤文軒平瓦である。かなり摩滅が進んでいるが、凹面はごくわずかに布目が観察される。凸面は斜格子叩き痕を残し、部分的に磨り消されている。図版37-B-2・3・4・5および第19図-2・3・5に讃良寺の瓦をあげているが、これらの形式から奈良時代に讃良寺が建立されたことを示している。



第10図 出土遺物

1993-2

平成5年度の2次調査は、枚方土木事務所の平面計画図面のNo.124からNo.125+10mの市道を発掘調査した。調査は市道を1993-1次調査を完了した場所に市道を迂回して発掘調査を行った。

まず、市道のアスファルト撤去後盛土部分の機械掘削を行った。もともと市道であつたため盛土及び搅乱層が1~1.8mもあり、道路整地段階で遺物包含層を破壊された部分が認められている。また中央部に縦断に下水道工事や、過去の讚良川左岸の護岸工事によって各遺構の一部が破壊されていた。

層序

調査区の北側断面の基本層序は上から第1層（盛土A）、第2層（盛土B）、第3層（盛土C）、第4層黒褐色砂質土（10YR3/1）、第5層灰黄色砂質土（2.5Y7/2）、第6層灰白色粘土（2.5Y8/2）、第7層灰黃褐色砂質土（10YR6/2）（灰白色粘土がブロック状に混入）、第8層黄褐色砂質土（2.5Y5/3）、第9層淡黄色シルト層（粗砂混入）（5Y8/3）、第10層にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）に礫混入、第11層青灰色粘質土（5B6/1）礫混入、第12層黄灰色粘土（2.5Y6/1）に浅黄色粗砂（2.5Y7/3）と礫混入、第13層灰白色細砂層（7.5Y7/1）、第14層オリーブ黒色シルト層（7.5Y3/1）に腐蝕土混入、第15層灰黄色粗砂層（2.5Y7/2）、第16層灰色細砂層（7.5Y4/1）礫混入、第17層灰色細砂層（7.5Y4/1）、第18層オリーブ灰色砂質土（5GY5/1）礫混入、第19層灰色粗砂層（7.5Y6/1）礫混入、第20層灰白色粗砂層（2.5Y7/1）、第21層青灰色粘質土（10BG5/1）で地山層になる。

第8層内には、石列が確認された。この石列は讃良川左岸の護岸の石列で20~50cmの石が一列に並んでいた。

遺物包含層まではほぼ水平の堆積をしているが、それより下は旧河川及び大溝等の堆積土層である。

第1層 盛土A 市道築造時に盛られた土。

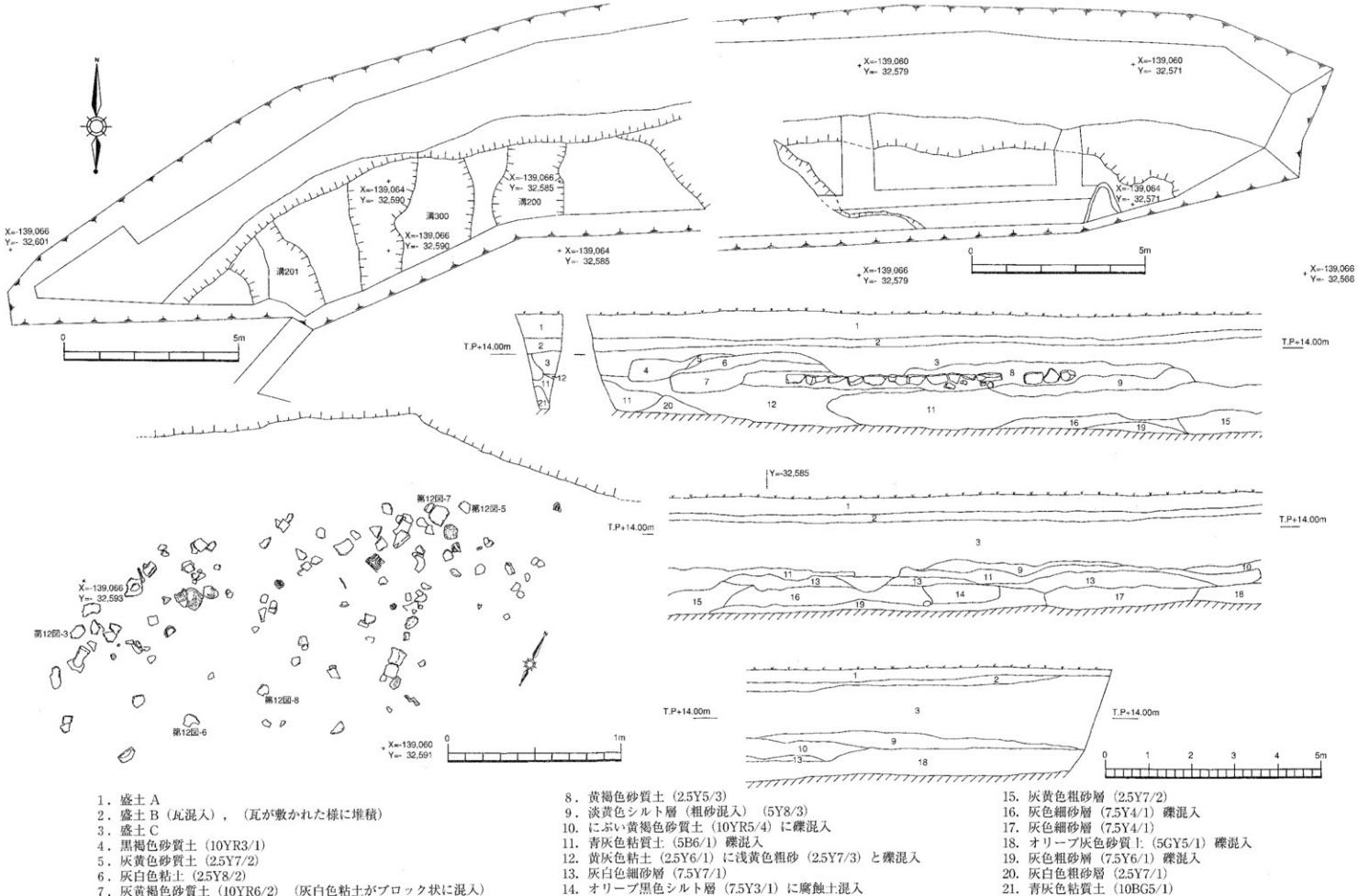
第2層 盛土B 市道構築時に敷かれた土。瓦の破片を整地土に使われている。

第3層 盛土C 市道構築時に埋められた土。

第4層 第1遺構面溝1の堆積土。厚さ約20~50cm。

第5層~6層 厚さ10~20cmで第1遺構面での溝2の堆積土。

第7層 厚さ40cmで第2遺構面の溝200・201の堆積土。



第11～12層 厚さ80cmで縄文時代の遺物包含層及び溝300の堆積土。

調査区内は市道敷きであったためほぼ中央に上下水道管が埋設され、幅約2mの搅乱が認められた。遺構面は3面検出している。

第1遺構面は調査区X=-139,065・Y=-32,590地点で溝1を、そのすぐ東側で溝2を検出した。溝1は、幅3.1mで肩部の検出面の高さT・P+14.70m、深さ28cmであった。溝2の肩部検出面の高さT・P+14.714m、溝1・2の堆積土は暗褐色砂質土層である。この溝1と溝2の北側は後世に搅乱され、その中に青灰色砂質土が堆積していた。この堆積土層に瓦器・埴輪及び縄文土器が混入していた。

第2遺構面はX=-139,064・Y=-32,586地点で幅2mの溝200が検出した。肩部の検出面の高さT・P+14.61m、深さ29cmで堆積土層の暗褐色砂質土から土師器片が出土している。X=-139,064・Y=-32,594地点で幅1.5mの溝201を検出した。肩部の検出面の高さはT・P+14.3mで深さ40cmで上層の暗褐色砂質土の堆積土層内から縄文土器のみ出土している。下層の灰色粗砂層から縄文土器に混じって須恵器・土師器の土器とともにサヌカイト片と石鎌が出土している。

溝201のすぐ北側調査区の断面に長方形の花崗岩長さ80cm、幅50cmの石12個を一列に整地配置されている。この石は、讃良川左岸の護岸もしくは市道築造時に使用されたものである。

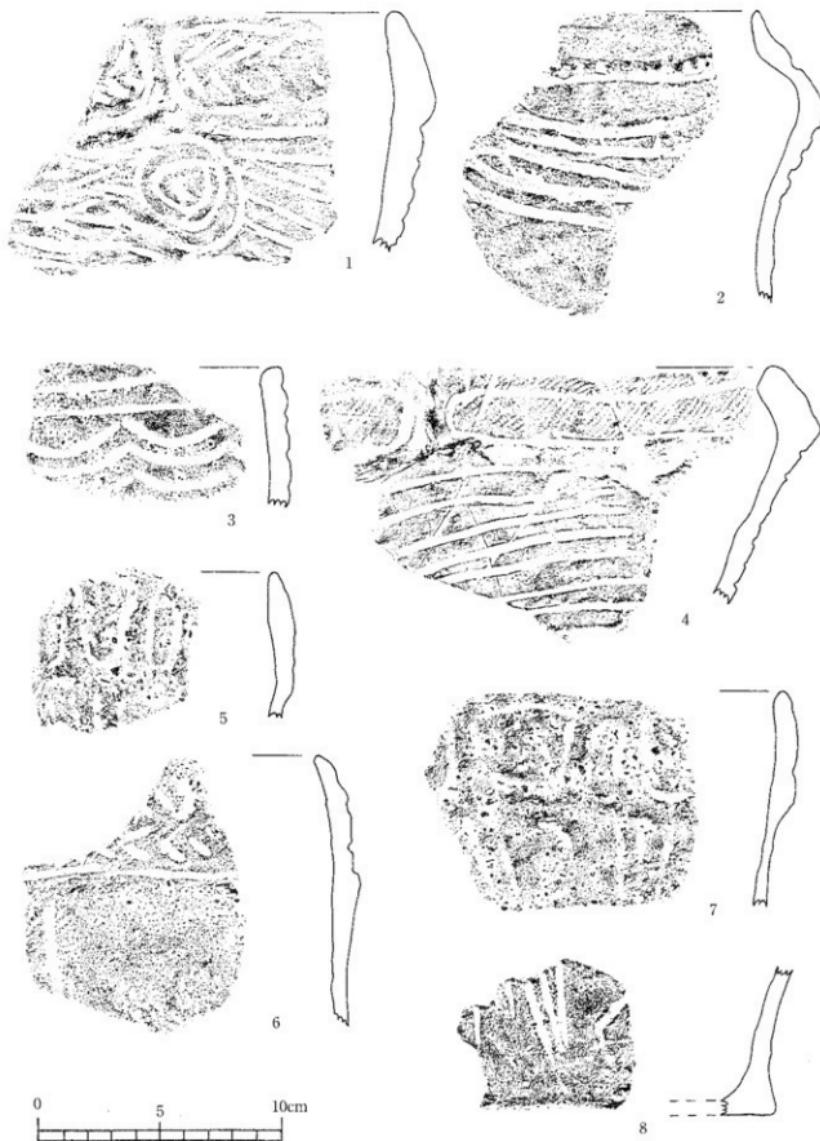
第3遺構面（第11図）は、X=-139,064・Y=-32,585～32,593地区は縄文土器を含む層で第2遺構面の溝200・溝201とともに新たに溝300を確認した。溝300の規模は、幅3.7m肩部の高さT・P+13.429m、深さ26cmで縄文土器のみ出土している。

このX=-139,066・Y=-32,591～32,593地点まで縄文土器が多量に出土している。出土遺物状況は第11図に図示したとおりである。

出土遺物

第12図-1・図版9-A-1は縄文土器の口縁部片。口縁部文様帶は、突帯の楕円形区画の中に《ハ》字の羽状沈線を施している。口縁部文様帶の下の胴部には沈線による渦巻き文と不規則な横位の沈線を施している。胎土は砂粒を多く含み、内外面は明茶褐色で断面は灰黒色である。縦9.6cm・横13.3cmである。

第12図-2・図版9-A-2は縄文土器の深鉢口縁部片。口縁部文様帶は波状文と沈線で連弧文を施している。胴部くびれ部は無文帶となっている。キャリバー形で口縁端



第12 図 出土遺物

部は尖る。

第12図-3・図版9-A-3は縄文土器の深鉢口縁部片。口縁部に直線と弧状の沈線を施している。口縁端部は丸みをもった面をもつ。摩滅がひどく、荒い砂粒が目立つ。

第12図-4・図版9-A-4は縄文土器口縁部片。口縁部文様帶は、突帯を楕円形区画し、その内側に沈線を施し縄文を充填する。胴部は横位の沈線を施している。口縁部と胴部との境が屈曲する深鉢である。口縁端部に縄文を施している。

第12図-5・図版9-A-5は縄文土器深鉢口縁部片。口縁部文様帶は、縱楕円形区画の中に《ハ》字状の羽状沈線を施している。胴部は垂下沈線を施す。

第12図-6・図版9-A-6は縄文土器深鉢口縁部片。口縁部文様帶は《ハ》字状の羽状沈線を施している。胴部に垂下沈線をもつ。

第12図-7・図版9-A-7は縄文土器深鉢口縁部片。口縁部文様帶は楕円形区画の中に《ハ》字状の羽状沈線を施しているものと区画に文様を充填していないものと交互に施している。胴部に垂下沈線をもつ。

第12図-8・図版9-A-8は縄文土器深鉢の底部片。胴部から底部まで沈線が垂下している。

図版9-A-9は縄文土器深鉢の口縁部片。主文様部が波状となり文様部は渦巻き状に沈線を施している。

図版9-A-10は縄文土器深鉢片。5・7・10とは一個体である可能性がある。

これらの縄文土器は中期のものである。本報告のなかで最も中期の土器が多く出土している。

図版9-B-11はフイゴの羽口。中央の大きい破片は口縁部片である。内面が平滑であるので棒などを芯にして制作している。口縁部に鉱滓が付着している。長さ6.2cm・厚み2cm。

図版9-B-12は須恵器甌。胴部の一部と口縁部が欠損している。円孔の周囲をヘラで削っている。残存高10.2cm・最大幅12.5cm。円孔の直径1.3cm。

図版9-B-13は円筒埴輪片。残存高23cm。タガ幅1.9cm、断面が低い台形である。

平成8年度（1996－1）（第13～14図・図版10～13）

発掘調査は、四條畷市岡山4丁目地内で更良岡山遺跡の東端に位置する。府道枚方富田林泉佐野線との合流地点から下流域左岸側の水田地及び個人住宅買収用地の調査面積891m²が対象地であった。

発掘調査は、最初に西側調査区としたX=-139,045・Y=-32,242～Y=-32,297地点までの東西約56m、南北5～9mの水田地部分（図版10）から調査を実施した。発掘によって掘削した土砂は調査区と同一地番内の南側を借地し掘削土の仮置きをした。

西側調査区の遺構は、X=-139,055・Y=-32,285～Y=-32,297地区に溝2条、土壙8基、落込み状遺構、旧河川等の遺構が検出された。

層序

調査区の南側断面の基本層序は上から第1層耕土、第2層床土、第3層オリーブ黄色砂質土（5Y6/4）、第4層淡黄色砂質土（5Y8/4）、第5層浅黄色礫混り層（5Y7/4）、第6層灰白色砂質土（5Y7/2）、第7層灰白色細砂層（5Y8/1）、第8層灰白色礫混り層（5Y8/2）、第9層灰白色砂層（5Y8/1）、第10層淡黄色砂質土（2.5Y8/3）、第11層灰白色砂質土（5Y7/2）、で地山層になる。

遺構のベース面は第3層オリーブ黄色砂質土（5Y6/4）下層でY=-32,253地点で旧河川2、Y=-32,282地点で落ち込み状遺構、Y=-32,290地点で土壙4、Y=-32,292地点で土壙8、Y=-32,285～Y=-32,297地点まで溝1、また溝1の北側で溝2をそれぞれ確認した。

第1層 耕土。

第2層 床土。

第3層 厚さ15～20cm調査区全域で確認した。

第4層～第10層は土壙等の堆積土層である。

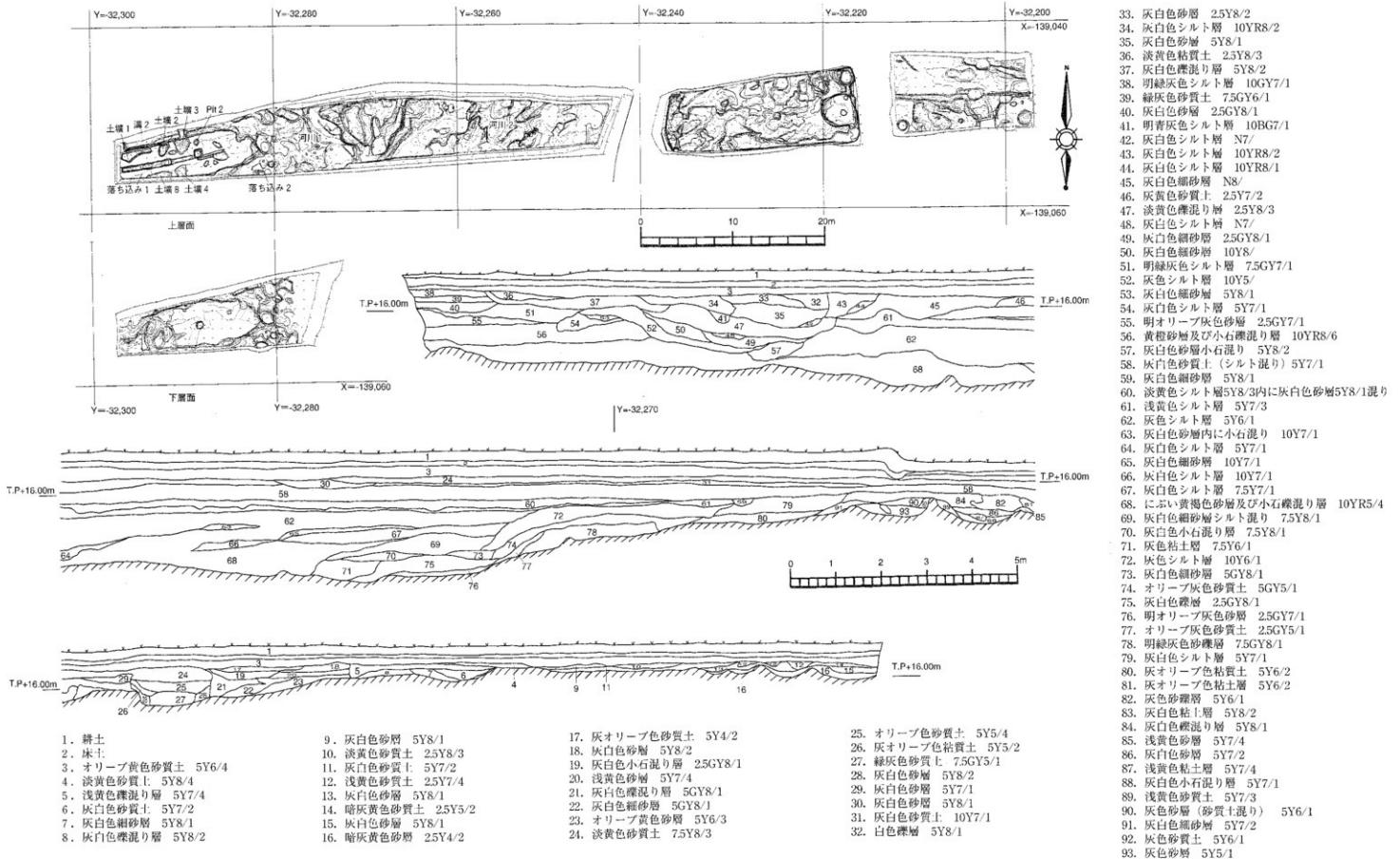
第11層 厚さ5～10cmで地山になる。耕土から地山まで約70cmであった。しかしY=-32,289地点から東に落ち込み状遺構や旧河川のため地山が傾斜している。

Y=-32,270地点で耕土下138cmで地山に至る。

土壙（図版10-B）

発掘調査区内に不整形な土壙を8基確認している。

土壙1はX=-139,054・Y=-32,296地点で検出した。規模は東西幅3.3m、南北0.5～



第13図 更良岡山遺跡 平成8年度（1996-1）造構配置図及び断面実測図

1mまで確認したが北側の溝2で削平されている。長方形の不整形な土壙である。検出面の高さT・P + 16.32m、深さ18cmであった。土師器片が出土している。

土壙2は、X=-139.053・Y=-32.292地点で土壙1のすぐ東側で検出した。規模は東西1.2m、南北1.2mまで確認したが、土壙1と同様に溝2で北側の一部が削平された稍円形をした土壙である。検出面の高さT・P + 16.29m、深さ20cmであった。

土壙3はX=-139.053・Y=-32.290地点で検出した。規模は東西2.8m、南北2.6mまで確認したが北側で検出した溝2で一部削平されている。

土壙4は、X=-139.056・Y=-32.290地点で検出した。規模は東西1.5m、南北1.2mまで確認したが南側調査外に続く隅丸方形の土壙である。検出面の高さT・P + 16.3m、土壙内の堆積土層は第9層灰白色砂層（5Y8/1）で土壙肩部から須恵器・土師器片が出土した（図版11-A）深さ12cmであった。

土壙8は、X=-139.056・Y=-32.292地点で検出した。規模は東西4.4m、南北0.5mまで確認したが南側調査外に続く隅丸長方形の可能性のある土壙である。検出面の高さT・P + 16.34m、土壙内の堆積土層は第12層浅黄色砂質土（2.5Y7/4）、第13層灰白色砂層（5Y8/1）、第16層暗灰黄色砂層（2.5Y4/2）で深さ25cmであった。

落ち込み状遺構

落ち込み状遺構1は、X=-139.056・Y=-32.285地区で検出した。規模は東西4.8m、南北調査範囲の6.4mまで確認した。検出面の高さはT・P + 16.40mで落ち込み状遺構1の肩部から弥生時代中期の打製石槍（図版11-B）が完全な形で出土した。出土した打製石槍の長さは13.8cmである。

堆積土層は第17層灰オリーブ色砂質土（5Y4/2）、第18層灰白色砂層（5Y8/2）、第19層灰白色小石混り層（2.5GY8/1）、第20層浅黄色砂層（5Y7/4）、第21層灰白色礫混り層（5GY8/1）、第22層灰白色細砂層（5GY8/1）、第23層オリーブ黄色砂層（5Y6/3）、第24層淡黄色砂質土（7.5Y8/3）、第25層オリーブ色砂質土（5Y5/4）、第26層灰オリーブ色粘質土（5Y5/2）、第27層緑灰色砂質土（7.5GY5/1）、第28層灰白色砂層（5Y8/2）、第29層灰白色砂層（5Y7/1）で深さ82cmであった。

落ち込み状遺構2は、X=-139.053・Y=-32.279地区で検出した。規模は東西5.8m、南北調査範囲の7.5mまで確認した。検出面の高さはT・P + 16.00mで落ち込み状遺構2の堆積土層は第81層灰オリーブ色粘土層（5Y6/2）、第82層灰色砂礫層（5Y6/1）、第83層

灰白色粘土層（5Y8/2）、第84層灰白色礫混り層（5Y8/1）、第85層浅黄色砂層（5Y7/4）、第86層灰白色砂層（5Y7/2）、第87層浅黄色粘土層（5Y7/4）、第88層灰白色小石混り層（5Y7/1）、第89層浅黄色砂質土（5Y7/3）、第90層灰色砂層（砂質土混り）（5Y6/1）、第91層灰白色細砂層（5Y7/2）で深さ68cmである。

旧河川

西側調査区のほぼ中央部のY=-32,270 地点からY=-32,240地点までの範囲に旧河川1と旧河川2が切り合う形で検出した。

旧河川2は、Y=-32,254地点で断面実測図の第3層オリーブ黄色砂質土（5Y6/4）下で検出した。検出面の高さはT・P+16.40mである。

旧河川2の堆積土層は、第32層白色礫層（5Y8/1）、第33層灰白色砂層（2.5Y8/2）、第34層灰白色シルト層（10YR8/2）、第35層灰白色砂層（5Y8/1）、第36層淡黄色粘質土（2.5Y8/3）、第37層灰白色礫混り層（5Y8/2）、第38層明緑灰色シルト層（10GY7/1）、第39層緑灰色砂質土（7.5GY6/1）、第40層灰白色砂層（2.5GY8/1）、第41層明青灰色シルト層（10BG7/1）、第42層灰白色シルト層（N7/）、第43層灰白色シルト層（10YR8/2）、第44層灰白色シルト層（10YR8/1）、第45層灰白色細砂層（N8/）、第46層灰黄色砂質土（2.5Y7/2）、第47層淡黄色礫混り層（2.5Y8/3）、第48層灰白色シルト層（N7/）、第49層灰白色細砂層（2.5GY8/1）、第50層灰白色細砂層（10Y8/）、第51層明緑灰色シルト層（7.5GY7/1）、第52層灰色シルト層（10Y5/）、第53層灰白色細砂層（5Y8/1）、第54層灰白色シルト層（5Y7/1）、第55層明オリーブ灰色砂層（2.5GY7/1）、第56層黄橙砂層及び小石礫混り層（10YR8/6）、第57層灰白色砂層小石混り（5Y8/2）で深さ1.28mを測る。断面図の観察から数回の氾濫を起こしていることが判明している。第47層及び第56層から衣蓋埴輪片（図版13-3）・土師器が出土している。

旧河川1は、先ほど説明した落ち込み状遺構2を切り合う形で検出した。Y=-32,275地点で断面実測図の肩部の高さはT・P+16.00mで第58層灰白色砂質土（シルト混り）（5Y7/1）の下層で旧河川1の肩部を検出した。河川の堆積土層は、第59層灰白色細砂層（5Y8/1）、第60層淡黄色シルト層（5Y8/3）内に灰白色砂層（5Y8/1）混り、第61層浅黄色シルト層（5Y7/3）、第62層灰色シルト層（5Y6/1）、第63層灰白色砂層内に小石混り（10Y7/1）、第64層灰白色シルト層（5Y7/1）、第65層灰白色細砂層（10Y7/1）、第66層灰白色シルト層（10Y7/1）、第67層灰白色シルト層（7.5Y7/1）、第68層にぶい黄

褐色砂層及び小石礫混り層（10YR5/4）、第69層灰白色細砂層シルト混り（7.5Y8/1）、第70層灰白色小石混り層（7.5Y8/1）、第71層灰色粘土層（7.5Y6/1）、第72層灰色シルト層（10Y6/1）、第73層灰白色細砂層（5GY8/1）、第74層オリーブ灰色砂質土（5GY5/1）、第75層灰白色礫層（2.5GY8/1）、第76層明オリーブ灰色砂層（2.5GY7/1）、第77層オリーブ灰色砂質土（2.5GY5/1）、第78層明緑灰色砂礫層（7.5GY8/1）、第79層灰白色シルト層（5Y7/1）、第80層灰オリーブ色粘質土（5Y6/2）、第92層灰色砂質土（5Y6/1）、第93層灰色砂層（5Y5/1）で地山層になる。

出土遺物

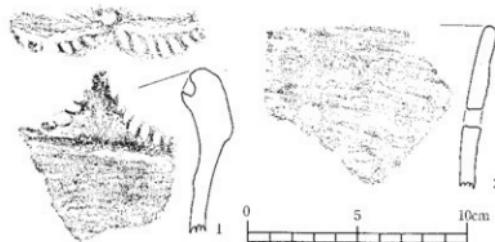
旧河川2の肩部から古墳時代の竈（図版13-1）と円筒埴輪の基底部（図版13-2）が、河川内第75層から須恵器坏蓋（図版13-4・5）・宝珠つまみを持つ須恵器坏蓋（図版13-6）・須恵器杯身（図版13-7）が出土している。

第14図-1は縄文土器深鉢片。突起をもつ口縁部。口縁端部に刻目を施している。

第14図-2は縄文土器深鉢片。口縁部であるが縄文土器によく見られる補修孔がある。

更良岡山遺跡において、打製石槍（図版13-8）と上器底部片（図版3-B-5・6）以外には弥生時代に関わる遺物は出土していない。遺跡周辺の弥生時代の遺跡を見ると、四條畷市雁屋遺跡（前期～後期）まで直線距離で1.8km、四條畷小学校内遺跡（前期）まで1.1km、寝屋川市太秦遺跡（中期～後期）まで1.2km、高宮八丁遺跡（前期～中期）まで2.2km、と非常に距離が離れている。

寝屋川市讚良川遺跡のすぐ北側に隣接する小路遺跡は、昭和52年に小学6年生の児童によって発見された。採集された弥生土器片50数点のうち弥生時代後期の土器が20数点であった。小路遺跡から打製石槍の出土地点まで300m程離れている。この小路遺跡の北西に接して第2京阪国道建設が計画されているが、この発掘調査で小路遺跡が弥生時代中期にさかのぼる遺跡であれば、当遺跡から出土した石槍との関係も解明されるのではないかだろうか。



第14図 出土遺物

平成9年度（1997—1）（第15～19図・図版14～22）

発掘調査は、平成9年9月30日から平成10年2月28日までおこなった。この調査区は四條畷市岡山4丁目地内で更良岡山遺跡の中央部に位置し、讃良川の左岸段丘部分（図版14-A）の調査を実施した。調査面積1579m²が対象地であった。

発掘調査の範囲は、X=-139,060・Y=-32,374～Y=-32,498までの東西124m、南北に最大幅19mであった。この範囲の中で、近世の瓦積み井戸・板枠井戸、中世の東西方向の溝、奈良時代の整地層及び溝、古墳時代の掘立柱建物跡、縄文時代落ち込み状遺構等の各遺構を検出した。

今回の発掘調査の予定地は“第2章調査にいたる経過”の中で記述しているように昭和24年には片山長三氏によって新池北岸における2地点のうちB地点の発掘調査がおこなわれた。この調査で多量の縄文土器・古瓦・須恵器・土師器片等が出土した。表土下50cmから、縄文時代後期から晩期の波状口縁の高杯形土器・元住吉山式の深鉢形土器・船橋式土器等が出土している。石器類も比較的多く、石鎌・石斧・敲石・石錘・石錐など生活に必要な石器が出土している。（片山長三氏は、昭和24年の発掘資料を大阪市立博物館に寄贈されている）

また、昭和44年の歴史文化研究保存会の調査は、片山氏が調査したB地点のすぐ東部分にあたる平屋建倉庫内である。このあたりは讃良寺跡中心伽藍の位置である。この調査で讃良寺の複弁蓮華文軒丸瓦（第19図-3・図版37-B-3）が完全な形で出土した。この種類の瓦は大和飛鳥地方にある有名な川原寺に使用している瓦と系列を同じくするもので、白鳳時代に葺かれたものである。

凹面に「六」とヘラ描きされた重弧文軒平瓦（第19図-5・図版37-B-5）と複弁蓮華文軒丸瓦が一緒に出土しているがそれらは年代的に差があり、讃良寺の創建時期に問題提起する資料であった。今回出土した素弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦は複弁蓮華文軒丸瓦に先行するものであり、創建時期を決定した。

その他、縄文時代後期中頃から晩期にかけて使われた深鉢形土器・注口土器・赤彩のある深鉢形土器や他地域から持ち込まれた土器（巻頭図版5-A・B）（図版35-A）と、石鎌・石斧（巻頭図版6-B）・敲石・石皿（図版35-B）・石錘・石錐などの石器が出土している。特に、磨製石斧は多く出土している。

そのなかで新潟県糸魚川市姫川産のヒスイ製磨製石斧（巻頭図版6-B-3）は現存

長7.5cm、現存幅4.8cm、厚み2.4cmである。これはヒスイ製の大珠とも考えられるが形態的には刃部を欠くものの側面に面をもつ磨製石斧である。同時に出土している蛇紋岩製の磨製石斧（巻頭図版6-B-1・2・4）も姫川産である。

土偶など祭祀に使用されたものも数多く出土している。これらは縄文時代の拠点的集落から発見されることが多い。まず今回の報告書の表紙カットに使用した土偶（巻頭図版6-A-1）をはじめ6点（図版34-A）が出土している。その他、土製勾玉・三角板土製品・角形土製品・きのこ形土製品など、祭祀に使用されたさまざまな土製品（巻頭図版6-A）や小型の石棒・石刀なども数多く出土している。この昭和44年の出土遺物はすべて四條畷市立歴史民俗資料館に保管展示している。

また多量の鉄滓（図版37-A）が木製の整理箱に保管されている。この鉄滓の年代が讃良寺の時期とも考えていた。しかし平成10年度の発掘調査で、鉄滓（図版31-B）が古墳時代後期の素掘り井戸の中から出土した。井戸内からメノウ製の勾玉・須恵器坏身・土師器椀なども出土した。この鉄滓の出土によって昭和44年の鉄滓及び銅滓資料は古墳時代後期のものであったことが判明したのである。このように、昭和24年・昭和44年と今回の平成9年度・平成10年度の発掘調査とかかわりを充分認識しなければならない。

また、昭和24年と昭和44年の発掘調査で旧石器が出土している。昭和44年に発見された旧石器（図版33-A・B）については、四條畷市史第1巻に発掘調査担当者である櫻井敬夫氏が考古編に紹介されている。また、大阪府史第1巻に松藤和人氏が讃良川床採集の石器として、チョッピング・トゥール、ナイフ形石器、削器、彫器、舟底形石器、細石器など詳しく紹介している。

以上のように平成9年度の発掘調査は、更良岡山遺跡の各時代を解明することができた重要な発掘調査であった。今回の讃良川改修工事にともなう更良岡山遺跡の概要報告書には、膨大な資料を掲載することは困難な為、私なりに更良岡山遺跡の時代にそって記述する。

層序

調査区は東西124mで南側断面をすべての基本層序を記載することは困難なため縄文時代の落ち込み状遺構と奈良時代整地層の南北断面を基本層序とする。

縄文時代の落ち込み状遺構の断面図（第15図）は、第1層表土、第12層浅黄色砂質土

(2.5Y7/3)、第14層灰白色シルト層(7.5Y8/2)、第15層浅黄色粘質土(2.5Y8/3)、第18層浅黄橙砂層(7.5YR8/4)、第19層浅黄色砂層(2.5Y8/4)、第20層にぶい黄橙砂層(10YR7/2)、第21層灰白色シルト層(2.5Y8/2)、第25層灰白色シルト層(7.5Y8/2)鉄分混る、第29層浅黄橙砂層(10YR8/3)、第34層灰白色礫混り層(10Y8/1)、第37層オリーブ褐色砂層(2.5Y4/3)で地山となる。

第1層 表土。

第2層 幅1.5m、深さ50cmと幅1.3m、深さ42cmのU字状遺構のように見られるが昭和44年の発掘調査穴である。

第3層～6層 この4層分の堆積土層は第2層と同じく昭和44年の埋土である。

溝（中世）（図版14-B）

調査区のX=139,093～X=-139,102・Y=-32,440～Y=-32,480地区に幅約30cmの東西方向の溝9条（図版14-B）を検出した。

整地層（奈良時代）（図版15-A・B）

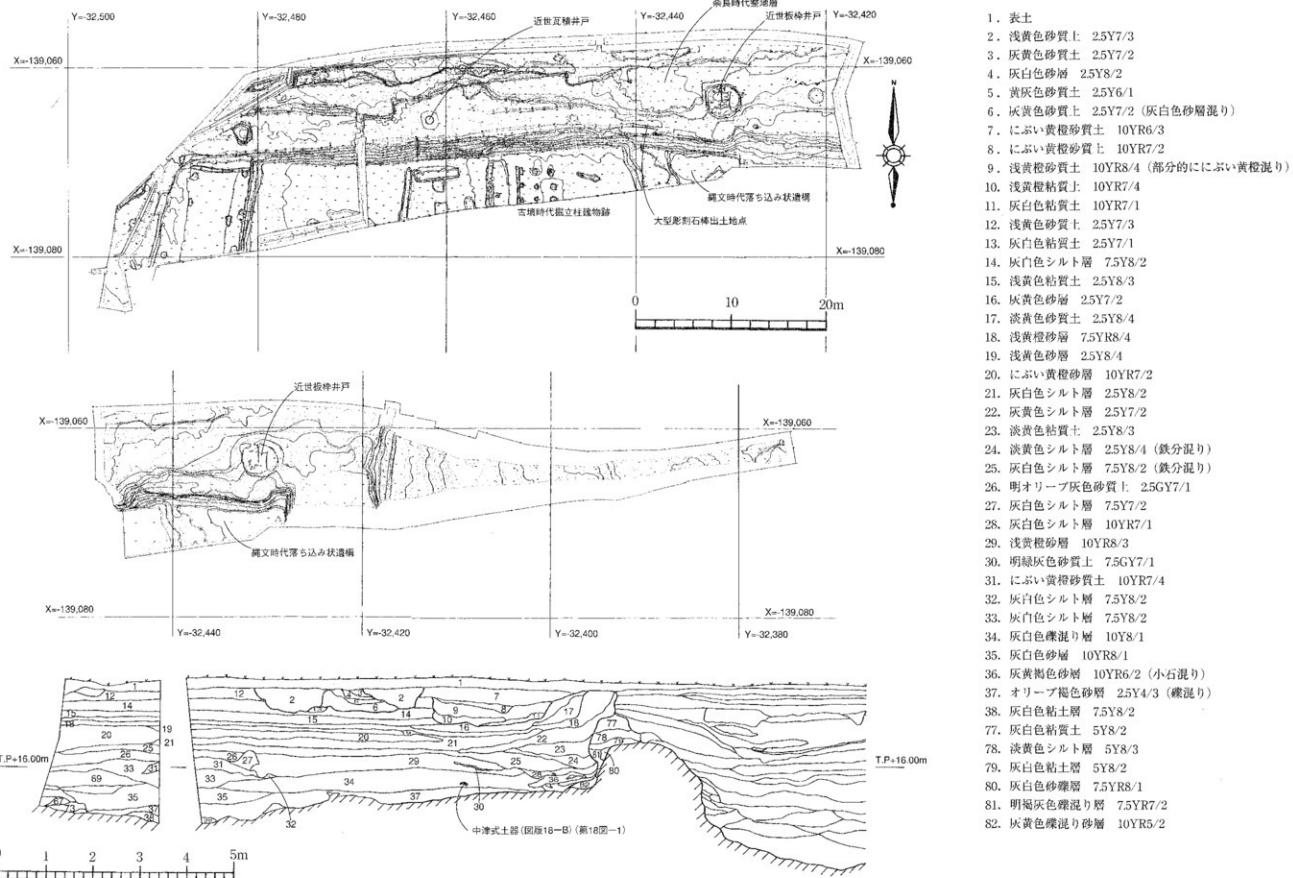
X=-139,058～X=-139,063・Y=-32,437～Y=-32,442地区に、讚良寺に葺かれていた素弁蓮華文軒丸瓦・平瓦・丸瓦が整地層の中から出土した。この素弁蓮華文軒丸瓦（第16図・第19図—2・図版15-B・図版22-B-1）は、中央部で二分に割れていた。しかし、出土状況でわかるように1つは上向きにもう1つは裏向きに出土した。この2つの破片は約60cm離れて出土したものが接合した。色調は赤褐色を呈している。整地層の検出面の高さT・P+15.28m、素弁蓮華文軒丸瓦の検出高は、T・P+15.21mであった。

溝（奈良時代）

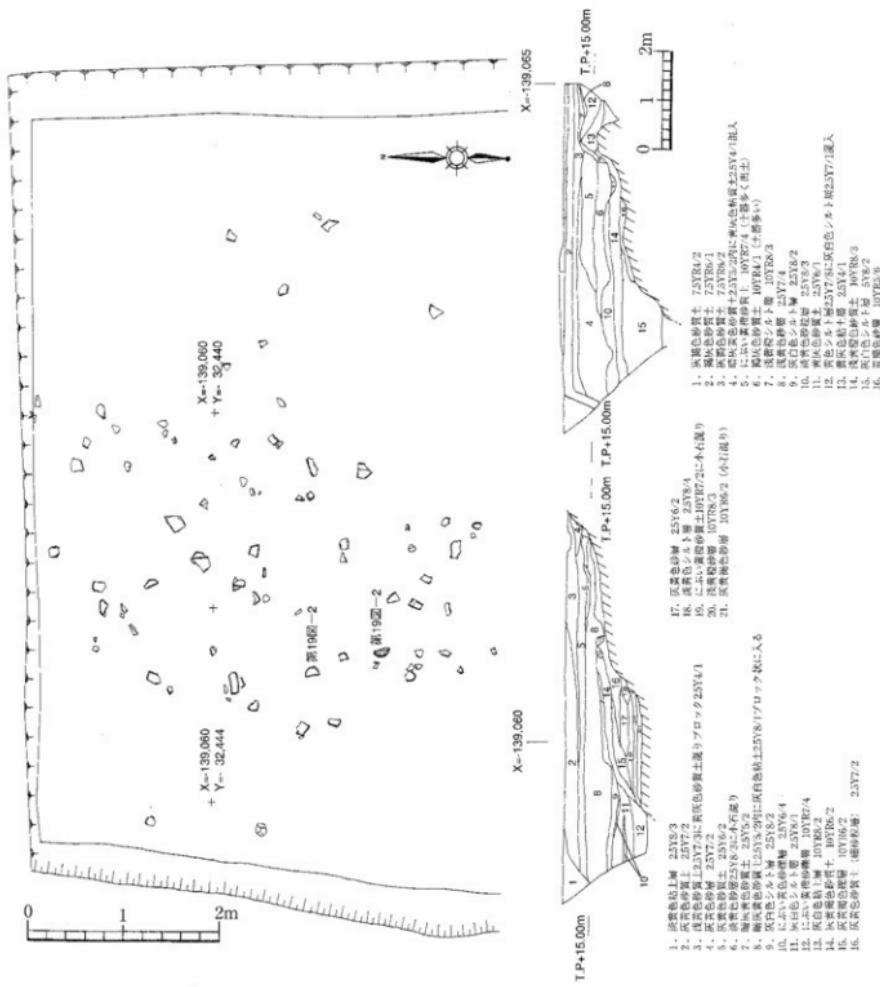
また同一地区の下層から東西方向に3条の溝を確認した。東西26.5m、溝幅0.3～0.6mで、東西26.5mの西端から11.5mと東側15mの位置に溝3条をつなぐ状況でつながっていた。溝の検出面の高さはT・P+14.73m、深さ17cmのU字状の溝で、このような遺構検出は畠の可能性がある。

掘立柱建物跡（古墳時代）（図版16-A）

X=-139,072・Y=-32,450地点で掘立柱建物跡を検出した。柱跡の検出状況から東西2間×南北2間以上の建物と考えられる。西側柱列は後世の溝によって削平されているが柱間は1.5m等間である。総柱建物で、検出面の高さT・P+17.54m、掘形は一辺が0.5



第13図 更良岡山遺跡 平成9年度（1997-1）遺構配置図及び断面実測図



第16図 整地層内讃良寺創建瓦出土状況

～0.8mの方形で、深さ12cmである。方位はN 4° 40' Eである。

落ち込み状遺構（縄文時代）（図版16-B・17～19）

X=-139,070・Y=-32,432～Y=-32,440地点で落ち込み状遺構を検出した。

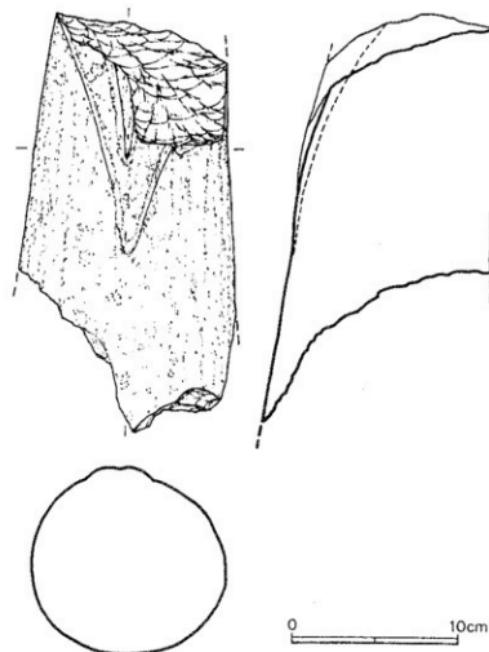
落ち込み状遺構の基本層序は、第1層表土、第2層浅黄色砂質土(2.5Y7/3)、第3層灰黄色砂質土(2.5Y7/2)、第4層灰白色砂層(2.5Y8/2)、第5層黄灰色砂質土(2.5Y6/1)、第6層灰黄色砂質土(2.5Y7/2)に灰白色砂層混り、第7層にぶい黄橙砂質土(10YR6/3)、第8層にぶい黄橙砂質土(10YR7/2)、第9層浅黄橙砂質土(10YR8/4)、第10層浅黄橙粘質土(10YR7/4)、第11層灰白色粘質土(10YR7/1)、第12層浅黄色砂質土(2.5Y7/3)、第13層灰白色粘質土(2.5Y7/1)、第14層灰白色シルト層(7.5Y8/2)、第15層浅黄色粘質土(2.5Y8/3)、第16層灰黄色砂層(2.5Y7/2)、第17層淡黄色砂質土(2.5Y8/4)、第18層浅黄橙砂層(7.5YR8/4)、第19層浅黄色砂層(2.5Y8/4)、第20層にぶい黄橙砂層(10YR7/2)、第21層灰白色シルト層(2.5Y8/2)、第22層灰黄色シルト層(2.5Y7/2)、第23層淡黄色粘質土(2.5Y8/3)、第24層淡黄色シルト層(2.5Y8/4)鉄分混り、第25層灰白色シルト層(7.5Y8/2)、第26層明オーリーブ灰色砂質土(2.5GY7/1)、第27層灰白色シルト層(7.5Y7/2)、第28層灰白色シルト層(10YR7/1)、第29層浅黄橙砂層(10YR8/3)、第30層明緑灰色砂質土(7.5GY7/1)、第31層にぶい黄橙砂質土(10YR7/4)、第32層灰白色シルト層(7.5Y8/2)、第33層灰白色シルト層(7.5Y8/2)、第34層灰白色疊混り層(10Y8/1)、第35層灰白色砂層(10YR8/1)、第36層灰黄褐色砂層(10YR6/2)に小石混り、第37層オーリーブ褐色砂層(2.5Y4/3)疊混り層で地山になる。

断面実測図で確認できた第1層表土下の第2層と第3層から第6層までの幅3.6m、深さ0.5mと第7層から第11層の幅3.2m、深さ0.8mのU字状の遺構と思われるがこの部分は昭和44年の発掘調査の掘削穴であった。

検出された幅7.5m、深さ2.3mの断面U字形をなす東西断面で確認された遺構である。平成10年度発掘調査中この平成9年度で調査した落ち込み状遺構をさらに南側土地所有者と枚方土木事務所との協議で畠地への進入道路を造るために再度追加で発掘調査を行った。更良岡山遺跡の南側に江戸時代に築堤した新池の池の水が地下水として落ち込み状遺構の最下層から湧き出すことから、南北方向の大溝の可能性も考えておかなければならぬ。

平成10年1月26日にX=-139,066・Y=-32,439地点の段丘斜面から研磨加工された石

製品が出土した。出土状況の写真撮影及び実測後取り上げたが、裏側から浮き彫り（陽刻）のV字文が確認された。大型彫刻石棒の出土（巻頭図版3-A・図版18-A・第17図）は、近畿地方には全くない文化で誰もが予想しなかったものであった。石棒周辺の堆積土層を詳しく観察した結果、この大型彫刻石棒は落ち込み状遺構の第34層の灰白色礫混り層(10Y8/1)の中から出土した。石棒の出土した高さはT-P+15.63mで、同所から後期初頭の中津式土器（図版18-B）と磨製石斧（図版17-A）・石皿（図版17-B）などの土器や石製品が出土した。また、大型彫刻石棒が出土した落ち込み状遺構の堆積土層を洗浄した結果、若狭産のメノウ・石川県手取川の正硅岩・羽咋市周辺の鉄石英・碧玉などの色とりどりの小石（巻頭図版4-A）が出土した。また大型彫刻石棒の出土地点の東約3mの所から倒れたケヤキの大木が検出された。



第17図 大型彫刻石棒

出土遺物

第17図・巻頭図版3-A・図版20-A-1・1'は大型彫刻石棒である。現存長25cm・最大幅13.3cm。上下が欠損している。完形品であれば長さ1m・重さ25kgぐらいであつただろうと思われる。まとめで詳しく述べるが、彫刻石棒は北陸の文化であり、石川県で産出する石英安山岩の石材を使用している。これは北陸地方との交易を示すものである。

この大型彫刻石棒と同じ層から次に紹介する第18図-1の中津式の深鉢形土器が共伴している。

第18図-1・巻頭図版4-Bは縄文時代後期初頭の中津式深鉢片。水平口縁である。磨消縄文で、口縁部から胴部まで文様が施されている。黒雲母・角閃石が混入し、茶褐色を呈している。推定口径24cm・残存高16.6cm。器厚0.6cm。

第18図-2は胴部のくびれがほとんど見られない縄文土器深鉢片である。器壁は状痕のみで文様を施していない。残存高30.8cm・器厚0.6cm。

第18図-3は縄文時代深鉢片である。器壁全体に条痕を施し、2と同じく文様をもたない土器である。

第18図-4は縄文時代深鉢の底部である。底部外面と側面に縄文を施している。底径8.2cm・残存高5.7cm。

第18図-5は縄文時代深鉢の口縁部片である。口縁下からくびれ部まで磨消縄文を施している。残存高10.2cm・器厚0.5cm。

第18図-6縄文時代深鉢片。胴部片であるが、1のように口縁部から胴部まで磨消縊文を施すものと思われる。

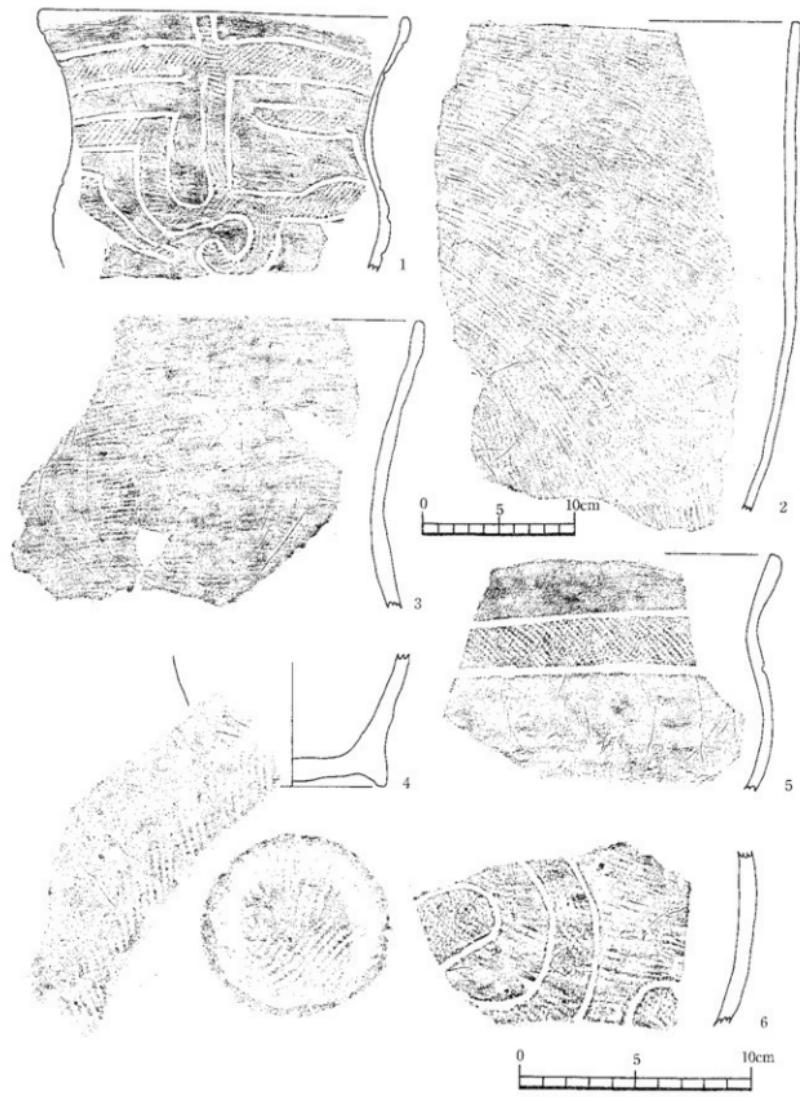
これら1~6までの縄文土器は後期初頭に属するものである。

図版20-B-1石斧。側面に面を持つ石斧で完全品である。刃の一部を欠くが、再度磨いている。玄武岩質火山疊凝灰岩。長さ18.2cm・最大幅6.8cm・厚み3.7cm。

図版20-B-2は紅簾石片岩で、ノコギリなどの石材である。縦8cm・横4.8cm・厚み0.6cm。

図版20-B-3は敲石。すべての面に叩き痕が認められる。縦6.4cm・横5.5cm・厚み4.7cm。

図版20-B-4は側面に面をもつ石斧。刃部が鋭く研がれている。最大幅のところで欠損している。丹波に産する玄武岩。現存長6.6cm・最大幅5.5cm・厚み3.4cm。



第18図 出土遺物

図版20-B-5は石刀。紀ノ川に産する玄武岩質凝灰岩質片岩。縦6.7cm・横2.6cm・厚み現存で0.8cm。

図版20-B-6は石刀。火山礫凝灰岩。縦10.9cm・横2.8cm・厚み1.9cm。

図版20-B-7は石棒になると思われる。玄武岩質凝灰岩質片岩。縦9.7cm・横3.1cm・厚み1.9cm。

図版20-B-8は石刀。絹雲母片岩。縦7.3cm・横2.3cm・厚み1.5cm。

図版20-B-9は石棒。

図版20-B-10は石刀。丹波に産する頁岩。縦13.2cm・最大幅3cm・現存厚み2.5cm。

図版20-B-11は石棒。縦10.4cm。最大幅4.9cm・現存厚み3cm。

ここでは断面が背と刀部をもつものを石刀とし、断面が円形または梢円形になるものを石棒とした。

図版21-A-1は磨製石斧。中央でくびれ、基部は横梢円形である。第17図の彫刻石棒と同じ石材を使用している。石英安山岩。風化が進んでいる。縦7.6cm・最大幅5.1cm。

図版21-A-2は磨と叩きに使用している。第17図の彫刻石棒と同じ石材を使用している。北陸に産する石英安山岩。

図版21-B-1は石皿。上下と側面に叩き痕が顯著である。縦18.9cm・横33cm・高さ14.8cm。

図版21-B-2は敲石。縦7.0cm・横9.4cm・厚み6.2cm。

図版21-B-3は石皿。上下面に磨面が顯著である。縦35.6cm・横12.5cm・高さ11cm。

図版21-B-4は敲石。半分が欠損しているが、上下と側面のすべての面に叩き痕が認められる。縦4.2cm・横7.2cm。

図版22-Aは縄文時代の石鐵である。左上が長さ2.4cm・幅1.8cm・厚み0.25cm。左下は大分県姫島に産する黒曜石。残存長2.0cm・幅1.5cm・厚み0.4cm。

第19図-2・図版22-B-1・2は奈良時代の素弁蓮華文軒丸瓦。1(正法寺出土)は丸瓦部と外区の1/2を欠損するものの瓦当部のほとんどが残存している。2は瓦当部で外区は欠損している。中房は1とともに1+4の連子を配している。昭和44年に重孤文軒平瓦第19図-5が出土していたが、これに伴う素弁蓮華文軒丸瓦が出土していなかった。今回の発掘調査で素弁蓮華文軒丸瓦第19図-2が出土したことによって、「讚良

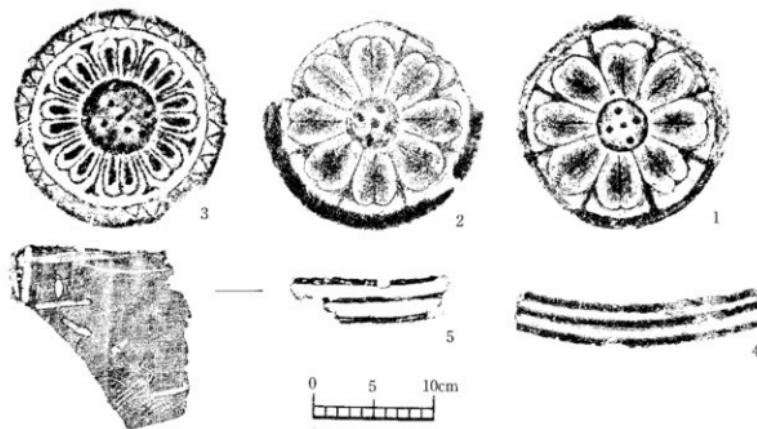
寺」は奈良時代に創建されことが判明した。

第19図の5点の瓦

- | | | |
|-------------------|----------------|--------|
| 1、正法寺跡出土 素弁蓮華文軒丸瓦 | 昭和51年度発掘調査で出土。 | 創建当時の瓦 |
| 2、讃良寺跡出土 素弁蓮華文軒丸瓦 | 平成9年度発掘調査で出土。 | 創建当時の瓦 |
| 3、讃良寺跡出土 複弁蓮華文軒丸瓦 | 昭和44年度発掘調査で出土。 | |
| 4、正法寺跡出土 重弧文軒平瓦 | 昭和51年度発掘調査で出土。 | 創建当時の瓦 |
| 5、讃良寺跡出土 重弧文軒平瓦 | 昭和44年度発掘調査で出土。 | 創建当時の瓦 |

1・2の両者とも弁端に切りこみを入れて、蓮弁を桜花状に表現したものである。中房が小さく設けられているため連弁が幅広く感じられる。

1の正法寺軒丸瓦と2の讃良寺軒丸瓦を細部にわたり比較検討した。拓本2枚を重ね合わせた結果この2点の素弁蓮華文軒丸瓦は、同じ木型の范で製作されたものであることが判明した。しかし、八枚の蓮の花弁と中央の中房連子の状況から正法寺の蓮弁部分及び中房の連子が讃良寺出土の瓦よりシャープであり、製作順位が正法寺の後に讃良寺の瓦を制作し、同じ木型の范で作られたことが判明した。



第19図 讃良寺跡・正法寺跡出土瓦

平成10年度（1998－1）（第20～23図・図版23～32）

発掘調査は、平成10年11月12日から平成11年3月10日まで行った。四條畷市岡山4丁目地内の平成8年度発掘調査区と平成9年度に発掘調査を行った地区との間が平成10年度当初の発掘調査予定地であった。平成10年度の調査区は讚良川の両岸（図版23-A・B）の調査面積1260m²が対象地であったが、大阪府枚方土木事務所から、平成9年度で大型彫刻石棒が出土した落ち込み状遺構の南側畠地に讚良川改修後の管理道路からの進入口設置に伴い平成10年度に追加調査の依頼を受けた。その結果、最終調査面積1572m²が対象地であった。

発掘調査の範囲は、讚良川左岸側のX=-139,040～X=-139,064・Y=-32,270～Y=-32,374までの東西100m、南北に最大幅13m、右岸側のX=-139,044～X=-139,058・Y=-32,347～Y=-32,410までの東西63m、南北最大幅7.5mと追加調査区X=-139,066～X=-139,083・Y=-32,416～Y=-32,471までの東西55m、南北最大幅10mであった。この範囲の中で、中世の旧讚良川の堰、讚良川に注ぐ南北方向の溝、古墳時代の素掘り井戸、縄文時代の土壙墓群、落ち込み状遺構等の各遺構が検出した。

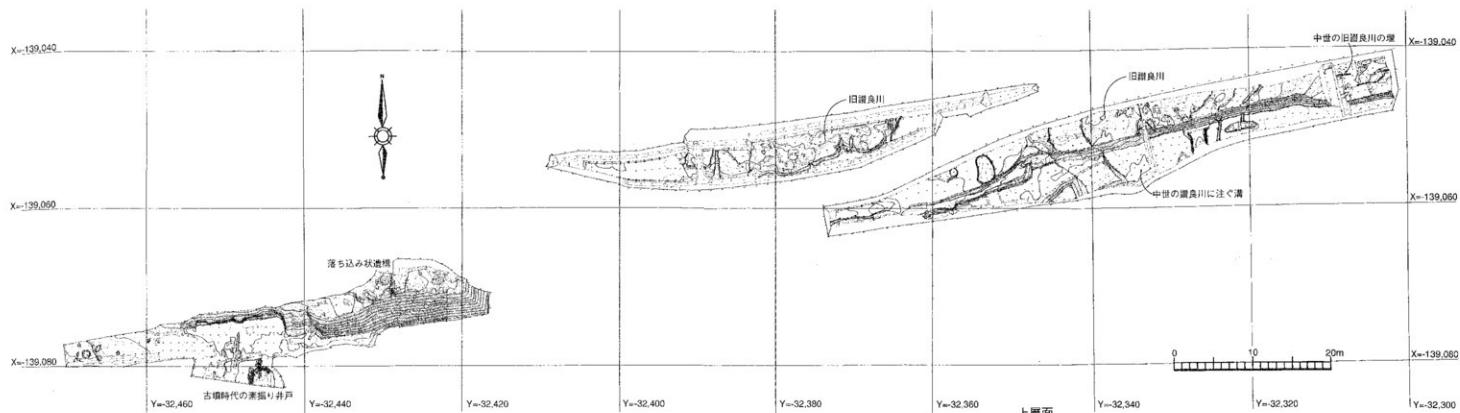
層序

調査区の延長163mで、讚良川両岸は氾濫による護岸工事のため搅乱をうけていた。また、両岸の南側断面及び北側断面について実測記録を行ったが、大半が讚良川の流路に沿った断面であったため今回の報告書には縄文時代の落ち込み状遺構周辺の断面を基本層序とする

第1層耕土、第2層にぶい黄橙砂質土(10YR6/3)、第3層にぶい黄橙砂質土(10YR7/3)、第4層灰黄色砂層(2.5Y6/2)と灰白色砂層(5Y8/1)混り、第17層灰白色砂層(5Y7/2)、第19層灰白色シルト層(5Y8/2)、第42層灰黄褐色シルト層(10YR6/2)、第47層にぶい黄橙砂層(10YR7/3)、第48層灰白色シルト層(10Y8/2)、第49層灰白色シルト層(7.5Y8/2)、第53層淡黄色シルト層(7.5Y8/3)、第54層灰白色細砂層(5Y8/1)、第55層灰白色砂層(7.5Y8/1)、第57層灰白色シルト層(7.5Y7/2)、第59層にぶい黄色礫混り層(2.5Y6/3)、第60層にぶい黄色礫混り層(2.5Y6/3)で地山になる。

第1層 耕土。

第2層 昭和44年の発掘調査穴と調査の埋め土。



第20図 更良岡山遺跡 平成10年度（1998-1）遺構配置図

第3層～4層は縄文時代晩期の土壙墓。

第47層縄文時代後期の落ち込み状遺構検出の肩部。

旧讃良川の堰 (中世) (第20図上層面・図版23-B)

調査区のX = -139,044・Y = -32,308地点で東西方向に方形柱4本と南北方向に杭列3本づつ2列を検出した。杭列約50cm間隔で打ち込まれていた。この堰は、南北方向に流れる現在の讃良川左岸に位置する讃良川の旧河川左岸よりに検出したもので河川の幅は約6～7mの規模であったものと思われる。旧河川の堆積土内から瓦器椀・土師器皿が出土した。

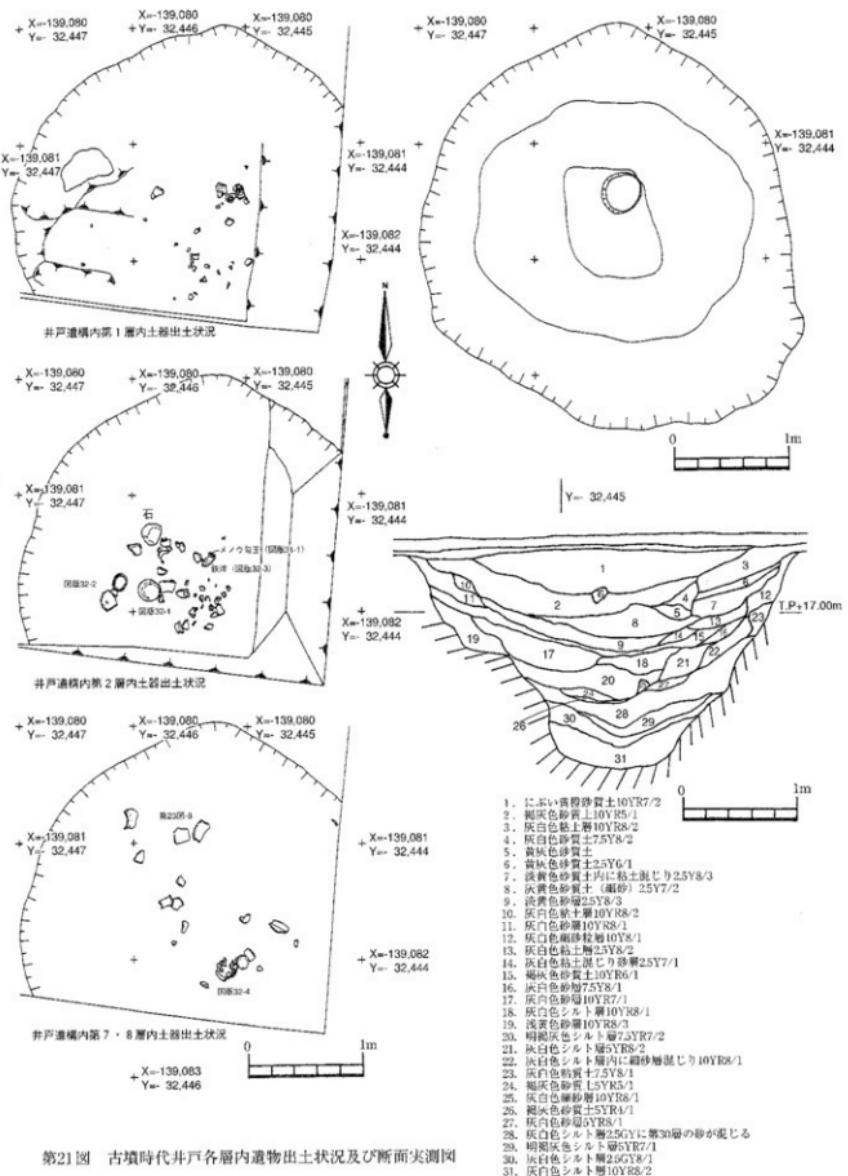
讃良川に注ぐ溝 (図版23-B)

調査区のX = -139,050・Y = -32,333地点で検出した溝の規模は長さ南北7.5m・幅東西1mである。この溝の南側延長は発掘調査区外に続くと思われる。

素掘り井戸 (古墳時代) (第21図・図版24～25)

X = -139,081・Y = -32,445地点で素掘り井戸を検出した。井戸の規模は東西3.2m、南北3.45m、深さ1.85m。(図版24-B)

井戸は、耕土及び床土を除去した段階で検出した。検出面の高さはT・P + 17.54mで、堆積土層は第1層にぶい黄橙砂質土(10YR7/2)、第2層褐灰色砂質土(10YR5/1)、第3層灰白色粘土層(10YR8/2)、第4層灰白色砂質土(7.5Y8/2)、第5層黄灰色砂質土、第6層黄灰色砂質土(2.5Y6/1)、第7層淡黄色砂質土内に粘土混り(2.5Y8/3)、第8層灰黄色砂質土(細砂)(2.5Y7/2)、第9層淡黄色砂層(2.5Y8/3)、第10層灰白色粘土層(10YR8/2)、第11層灰白色砂層(10YR8/1)、第12層灰白色細砂粒層(10Y8/1)、第13層灰白色粘土層(2.5Y8/2)、第14層灰白色粘土混り砂層(2.5Y7/1)、第15層褐灰色砂質土(10YR6/1)、第16層灰白色砂層(7.5Y8/1)、第17層灰白色砂層(10YR7/1)、第18層灰白色シルト層(10YR8/1)、第19層浅黄色砂層(10YR8/3)、第20層明褐灰色シルト層(7.5YR7/2)、第21層灰白色シルト層(5YR8/2)、第22層灰白色シルト層内に細砂層混り(10YR8/1)、第23層灰白色粘質土(7.5Y8/1)、第24層褐灰色砂質土(5YR5/1)、第25層灰白色細砂層(10YR8/1)、第26層褐灰色砂質土(5YR4/1)、第27層灰白色砂層(5YR8/1)、第28層灰白色シルト層(2.5GY)に第30層の砂が混る、第29層明褐灰色シルト層(5YR7/1)、第30層灰白色シルト層(2.5GY8/1)、第31層灰白色シルト層(10YR8/2)で地山となる。



第21圖 古墳時代共21各層內遺物出土狀況及7E斷面來測圖

井戸内からの出土遺物（第21図）は、第1層にぶい黄橙砂質土（10YR7/2）内から土師器高杯・須恵器坏身・鉄滓（T・P + 17.48m）（図版31-B）・土玉（図版31-A-14）・縄文時代の石鎌が出土した。また、第2層褐灰色砂質土（10YR5/1）内（図版24-A）からメノウ製勾玉（図版25-A・図版31-A-1）（T・P + 17.311m）・土師器鉢（図版32-1）（T・P + 17.176m）・須恵器坏身（図版25-B・図版32-2）（T・P + 17.295m）が出土した。また、第7層～第8層淡黄色砂質土内に粘土混り（2.5Y8/3）・灰黄色砂質土（細砂）（2.5Y7/2）内から土師器甕（図版32-4）・石斧・縄文深鉢（第23図-8・図版32-5）が出土している。

土壙墓群（縄文時代）（第22図・図版26-A・B）

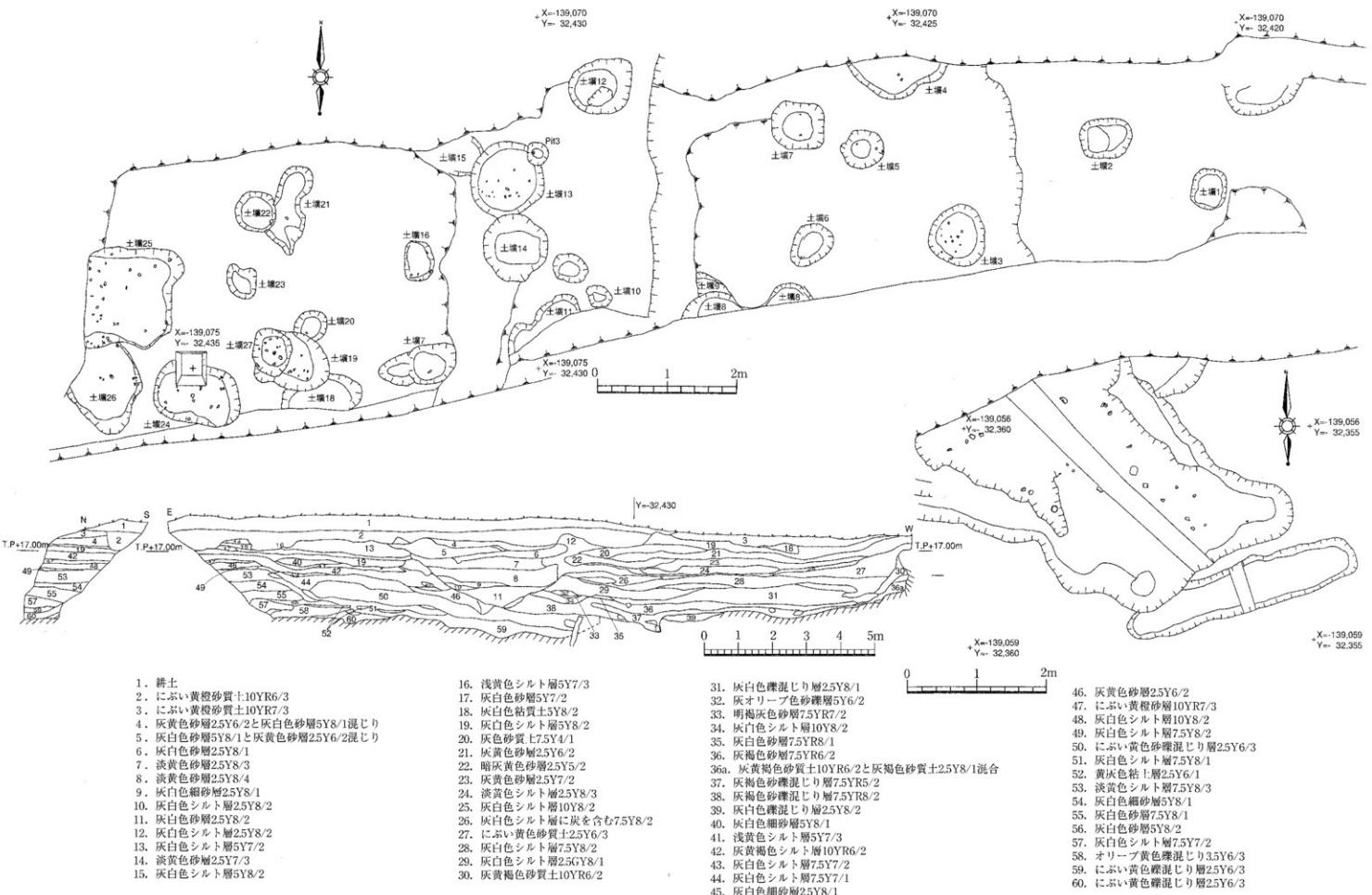
調査区 X = - 139,073～X = - 139,076・Y = - 32,419～Y = - 32,437地区内に平成9年度の発掘調査で検出した大型彫刻石棒が出土した落ち込み状遺構のすぐ南側で、調査地の上層で始めて墓地群を検出した。

合計27基の縄文時代晩期の土壙墓で、土壙墓検出面の高さはT・P + 17.133mである。阪南市向出遺跡と同様の環状配置を呈しており、サークルの半分途切れたものが2サークル分検出された。後に紹介するが、このサークルの下層から縄文時代後期初頭の中津式土器とそれに伴う粗製土器・メノウ原石・碧玉原石・鉄石英・正硅岩が出土している。

以下、各土壙墓の規模を記述する。

- | | |
|-------|---|
| 1号土壙墓 | 検出面の高さは、T・P + 17.418m、規模は東西50cm・南北57cm・深さ21cm。 |
| 2号土壙墓 | 検出面の高さは、T・P + 17.584m、規模は東西75cm・南北56cm・深さ37cm。 |
| 3号土壙墓 | 検出面の高さは、T・P + 17.254m、規模は東西80cm・南北86cm・深さ28cm。土壙内から縄文時代晩期の土器片が出土。 |
| 4号土壙墓 | 検出面の高さは、T・P + 17.267m、規模は東西1.5m・南北52cm以上・深さ9cm。土壙内から縄文時代晩期の土器片出土。 |
| 5号土壙墓 | 検出面の高さは、T・P + 17.168m、規模は東西62cm・南北54cm・深さ22cm。土壙内から縄文土器片出土。 |
| 6号土壙墓 | 検出面の高さは、T・P + 17.171m、規模は東西57cm・南北57cm・深さ11cm。土壙内から縄文時代晩期の土器片出土。 |

7号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.235m、規模は東西73cm・南北64cm・深さ32cm。土壙内からサヌカイト及び土器片出土。
8号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.231m、規模は東西128cm・南北32cm・深さ19cm。
9号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.229m、規模は東西42cm・南北32cm・深さ20cm。8号土壙墓によって切られている。
10号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.248m、規模は東西30cm・南北32cm・深さ14cm。
11号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.334m、規模は東西120cm・南北30cm・深さ28cm。
12号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.456m、規模は東西75cm・南北78cm・深さ35cm。
13号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.524m、規模は東西105cm・南北107cm・深さ30cm。土壙内からサヌカイトが多数出土。
14号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.421m、規模は東西100cm・南北93cm・深さ33cm。
15号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.393m、規模は東西58cm・南北の規模は計測不能・深さ2cm。
16号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.168m、規模は東西46cm・南北55cm・深さ16cm。土壙内にサヌカイトと縄文時代晚期の土器が出土。
17号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.492m、規模は東西68cm・南北55cm・深さ19cm。土壙内に縄文時代晚期の土器と人骨が出土。
18号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.199m、規模は東西115cm・南北55cm以上深さ7cm。
19号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.126m、規模は東西100cm・南北80cm・深さ12cm。土壙内に石鎌・縄文時代晚期の土器が出土。
20号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.107m、規模は東西45cm・南北53cm・深さ7cm。土壙墓内からサヌカイト出土。
21号土壙墓	検出面の高さは、T・P + 17.127m、規模は東西120cm・南北38cm・深



第22図 繩文晩期土器墓群平面実測図及び断面実測図・縩文晚期落ち込み状造構

- さ12cm。土壙内に縄文時代土器片出土。
- 22号土壙墓 檜出面の高さは、T・P + 17.125m、規模は東西57cm・南北55cm・深さ10cm。土壙内に縄文時代土器片出土。
- 23号土壙墓 檜出面の高さは、T・P + 17.123m、規模は東西42cm・南北45cm・深さ8cm。
- 24号土壙墓 檜出面の高さは、T・P + 17.119m、規模は東西120cm・南北82cm・深さ26cm。土壙内に石鎚・人骨・縄文時代晩期の土器片出土。
- 25号土壙墓 檜出面の高さは、T・P + 17.125m、規模は東西120cm・南北140cm・深さ23cm。土壙内に縄文時代土器片及び人骨出土。
- 26号土壙墓 檜出面の高さは、T・P + 17.139m、規模は東西107cm・南北130cm・深さ21cm。土壙内に縄文時代土器片・サスカイト出土。
- 27号土壙墓 檜出面の高さは、T・P + 17.09m、規模は東西56cm・南北67cm・深さ17cm。土壙内に晩期の縄文時代土器片と石鎚出土。

各土壙の規模について述べたとおりである。環状配置サークルは、土壙3・土壙4・土壙12・土壙13・土壙14・土壙11の中心部を直径6mの円を描くことが出来る。また、土壙18・土壙19・土壙21・土壙27・土壙26にも直径7mの円を描くことが出来る。

溝（縄文時代）（第22図・図版27）

平成9年度にX=-139,070・Y=-32,440地点で検出した落ち込み状遺構の南側の3～4mを大阪府枚方土木事務所の依頼で拡張することになった。この調査で大型彫刻石棒の欠損部が出土することを期待して調査にあたった。

平成9年度の断面図と平成10年度の断面図を比較すると落ち込み状遺構とX=-139,075ラインの断面ではY=-32,417～Y=-32,430までに大溝を確認した。平成9年度ではこの部分は調査範囲外であったため大溝を確認できなかった。

Y=-32,420地点で幅5.8m深さ2mの溝を確認した。その堆積土は、第4層灰黄色砂層(2.5Y6/2)と灰白色砂層5Y8/1混り、第5層灰白色砂層(5Y8/1)と灰黄色砂層(2.5Y6/2)混り、第6層灰白色砂層(2.5Y8/1)、第7層淡黄色砂層(2.5Y8/3)、第8層淡黄色砂層(2.5Y8/4)、第9層灰白色細砂層(2.5Y8/1)、第10層灰白色シルト層(2.5Y8/2)、第11層灰白色砂層(2.5Y8/2)で底部になると思われる。

第11層の堆積土の中から縄文土器が出土している。

落ち込み状遺構 (縄文時代) (図版27-A・B)

溝の西側に平成9年度に検出した遺構の続きが検出できた。この遺構のすべての土を洗浄したが大型彫刻石棒の欠損部を見出すことが出来なかった。しかし、メノウの原石や正硅岩・鉄石英・碧玉の原石など石棒と同じ北陸地方から持ちこまれた色とりどりの小石が数多く見つかった(巻頭図版4-A)。

堆積土層は第18層灰白色粘質土(5Y8/2)、第19層灰白色シルト層(5Y8/2)、第20層灰色砂質土(7.5Y4/1)、第21層灰黄色砂層(2.5Y6/2)、第22層暗灰黄色砂層(2.5Y5/2)、第23層灰黄色砂層(2.5Y7/2)、第24層淡黄色シルト層(2.5Y8/3)、第25層灰白色シルト層(10Y8/2)、第26層灰白色シルト層に炭を含む(7.5Y8/2)、第27層にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)、第28層灰白色シルト層(7.5Y8/2)、第29層灰白色シルト層(2.5GY8/1)、第30層灰黄褐色砂質土(10YR6/2)、第31層灰白色礫混り層(2.5Y8/1)、第32層灰オリーブ色砂礫層(5Y6/2)、第33層明褐灰色砂層(7.5YR7/2)、第34層灰白色シルト層(10Y8/2)、第35層灰白色砂層(7.5YR8/1)、第36層灰褐色砂層(7.5YR6/2)、第36a層灰黄褐色砂質土(10YR6/2)と灰褐色砂質土(2.5Y8/1混合)、第37層灰褐色砂礫混り層(7.5YR5/2)、第38層灰褐色砂礫混り層(7.5YR8/2)、第39層灰白色礫混り層(2.5Y8/2)で地山になる。第36層及び第37層から長さ31cm最大幅14.5の斑レイ岩製の石棒(図版27-A・B、図版29-B)が大型彫刻石棒と接する場所で横向きの状態で出土した。この石棒の出土する層位は中津式土器年代である。

大 溝

Y=-32,420地区で先ほど紹介した溝によって切られている。堆積土層は、第40層灰白色細砂層(5Y8/1)、第41層浅黄色シルト層(5Y7/3)、第42層灰黄褐色シルト層(10YR6/2)、第43層灰白色シルト層(7.5Y7/2)、第44層灰白色シルト層(7.5Y7/1)、第45層灰白色細砂層(2.5Y8/1)、第46層灰黄色砂層(2.5Y6/2)、第50層にぶい黄色砂礫混り層(2.5Y6/3)、第51層灰白色シルト層(7.5Y8/1)、第59層にぶい黄色砂礫混り層(2.5Y6/3)で地山なる。第50層及び第59層から縄文土器(第23図-1~7・図版29-A-1~5・図版32-6~7)が出土している。

落ち込み状遺構 (図版28-A)

X=-139,056・Y=-32,356地区で検出した落ち込み状遺構は旧讃良川の流路で一部破

壊しているが最下層から縄文時代後期の土器が出土している。

出土遺物

第23図-1・図版32-7は縄文時代の丸底の鉢である。口縁部と胴部の半分と底部が残存している。外面に煤が付着している。茶褐色で胎土は角閃石と乳白色の砂粒が見られる。推定口縁径は18.4cm・器高7.0cm・器厚0.5cmである。

第23図-2は縄文時代の鉢であるが底が欠損している内外面とともにヘラケズリを施している。推定口縁径20.4cm・残存高11.0cm・器厚0.7cm。外面茶色、内面は黒褐色。角閃石と0.5~4.5mmの乳白色の砂粒が混入している。

第23図-3・図版29-A-1は縄文時代の条痕文を施すだけの深鉢片である。胴部がややくびれ、口縁端部はやや面をもつ。残存器高17.7cm・器厚1.2cm。

第23図-4・図版29-A-3は縄文時代の深鉢の口縁部片。波状口縁の中津式土器である。磨消繩文の沈線と繩文が口縁部直下から波頭部の端部まで施され円孔があく。角閃石を含み色調は茶褐色である。残存高6.0cm・口縁下の厚み1.3cm。

第23図-5・図版29-A-4は縄文時代の深鉢の口縁部片。わずかに波状となる中津式土器である。磨消部分は条痕が顕著である。磨消繩文の沈線を口縁端部まで施している。端部は丸みをもつ。茶褐色を呈している。残存高7cm・器厚0.6cm。

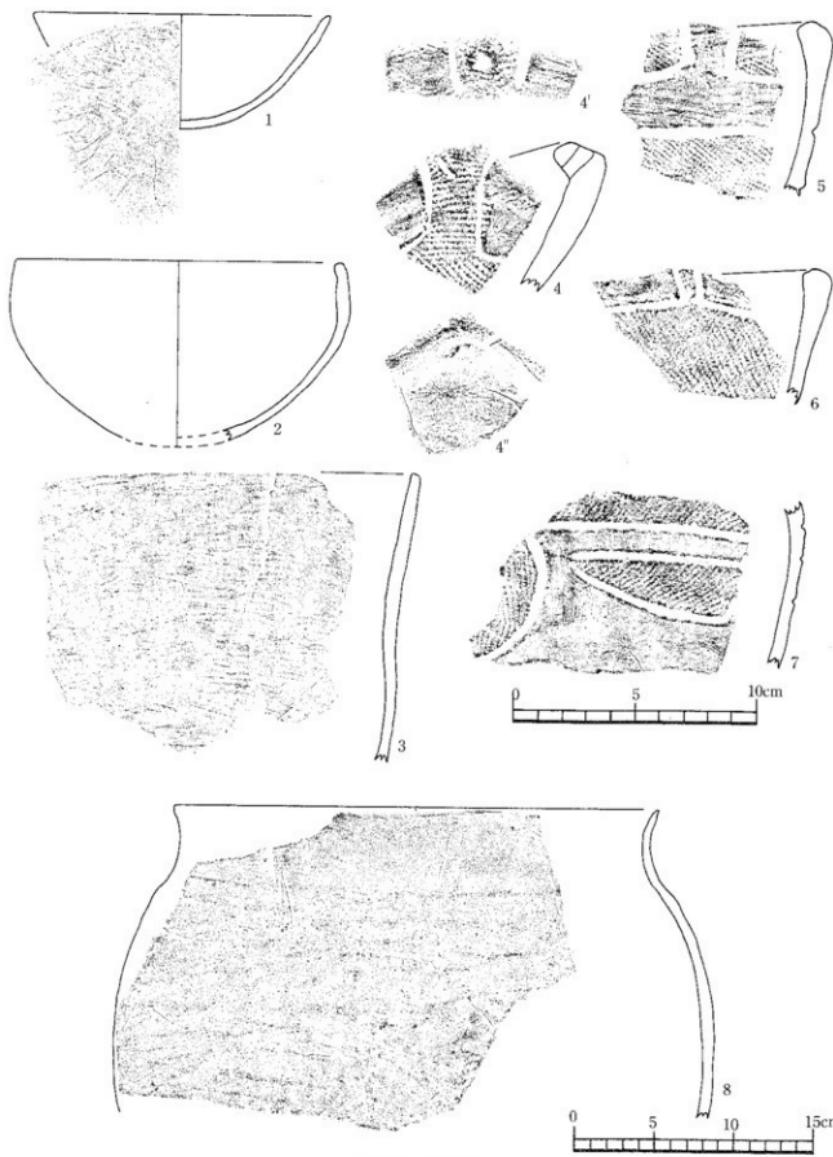
第23図-6・図版29-A-2は縄文時代深鉢片。わずかに波状口縁となる中津式土器である。磨消繩文の沈線と繩文が波頭部の口縁端部まで施されている。角閃石と乳白色の砂粒が認められる。残存高5.0cm・器厚0.6cm。

第23図-7・図版29-A-5は縄文時代の中津式深鉢胴部片である。茶褐色。残存高6.7cm・器厚0.5cm。

第23図-8・図版32-5は縄文時代深鉢片である。角閃石を多量に含み茶褐色を呈している。口縁部のみナデである。推定口縁径30.2cm・残存器高は19cm・器厚は0.7である。

これらの縄文土器のうち第23図-8・図版32-5は後期から晩期に属するもので古墳時代の井戸から出土した。その他の土器は縄文時代後期初頭に属するものである。

図版29-Bは石棒である。図版20-1・1'の大型彫刻石棒と同じ遺構から出土した。生駒山頂あたりで産する斑レイ岩である。写真左が頭部であろうと考えている。頭部はやや丸くきのこ形をしている。表面は研磨されている。高さ31cm・頭部の厚さは14.5cm



第23図 出土遺物

である。

図版30-Aは石鎌と石錐である。石錐は上段の右の4個である。右から4番目の長さは4.2cm・最大幅1.7cm。石鎌の左下が高さ1.8cm・最大幅1.9cm・厚み0.3cmである。

すべてサスカイト製である。

図版30-B-1は石錐。長辺の両端を打ち欠いている。長辺8.5cm・縦6.0cm・厚さ2.6cm。

図版30-B-2は石棒だが上下を欠いている。丁寧な研磨が施されている。

図版30-B-3はスクレイバー。サスカイト製。

図版30-B-4は石錐。長辺の両端を打ち欠いている。長辺4.8cm・縦4.2cm・厚さ5.5mm。

図版30-B-5は石棒。頭部は線刻されている。頭頂部には 0.9×0.8 cmの橢円形の線刻が施されている。頭部直下を少し残して欠損している。

図版30-B-6は石製の丸棒であるが用途不明である。棒の左端は5面の磨面が見られる。反対側は丸く面をもつ。かなり丁寧に研磨されている。長さ5.2cm・直径0.5cm。

図版31-A-1はメノウ製勾玉。乳白色で扁平な形である。縦3.1cm・中央あたり1.1cm。厚み0.7cm。古墳時代の井戸から出土。

図版31-A-2は滑石製の有孔円板。一部欠損している。1.5mmの円孔が2ヶ所あけられている。古墳時代の井戸から出土。

図版31-A-3は滑石製の紡錘車。上面が薄くはがれたものである。鋸歯文が線刻されている。古墳時代の井戸から出土。

図版31-A-4は緑色凝灰岩製管玉。縦半分が欠損。外面中央に溝が刻まれている。古墳時代の井戸から出土。

図版31-A-5~13は滑石製白玉。13の一番小さいもので直径3.5mmである。古墳時代の井戸から出土。

図版31-A-14は土製玉。濃黒褐色。古墳時代の井戸から出土。

図版31-Bは鉄滓。右下は図版32-3と同じもので、長辺が10.5cm・幅4.1cm・厚み3.4cmである。これらの鉄滓は古墳時代の井戸から出土した。昭和44年の調査で大量の鉄滓が見つかっていたが、奈良時代の讃良寺の金属工房に関連するものと考えていたが、古墳時代の井戸からの出土によって古墳時代のものであることが判明した。なおこの井戸

からは縄文時代と古墳時代の遺物しか出土していない。

図版32-1は古墳時代の丸底の鉢。完全な形である。外面にハケメが所々に見られる。明るい茶色で0.5~3mmの砂粒が多く含まれる。口径18.5cm・器高9.4cm。古墳時代の井戸から出土。

図版32-2は須恵器の杯身。完全な形である。淡灰色。口径11.7cm・器高3.8cm。古墳時代の井戸から出土。

図版32-3・図版31-Bの右下は鉄滓で同じものである。長辺10.5cm・幅4.1cm・厚み3.4cm。

図版32-4は古墳時代の小型丸底甕。口縁部の1/3とその直下の胴部が欠損している。1cmあたり8本のハケメが施されている。古墳時代の井戸からの出土である。推定口径10.8cm・器高10.3cm・胴部最大幅9.0cm。

これらの古墳時代の井戸から出土した遺物は古墳時代後期に属するものである。この井戸から出土した縄文時代の遺物は後期から晩期のものである。

第5章 まとめ

更良岡山遺跡出土の『大型彫刻石棒（巻頭図版3-A・図版20-A-1・1'）』は平成10年（1998）に出土し、今回報告することができた。石棒は、縄文時代中期以降に東日本を中心に行なうる大型石棒のなかでも、特に『鍔をもつ大型石棒』あるいは『彫刻石棒』と呼ばれるものである。彫刻石棒の研究者である金沢美術工芸大学教授の小島俊彰氏は從来からの石棒全体に関する解釈をもとに『石棒本体は男性生殖器』・『石棒に彫刻されているV字隆帯は女性生殖器』であり、男女の交接を表現するものであるという意味深い見解を示された。

『鍔をもつ大型石棒』の分布について、北は秋田県から南は石川県までの日本海側のみに見られ、特に富山県を中心に新潟県西部から石川県東部と岐阜県北部に集中して分布し、北陸地方と旧飛驒国域には限定されている。

今回の出土例は、近畿地方ではもちろん初出であると共に、従来知られていた分布域から大きく西に離れて出土した。

1) 大型彫刻石棒

平成10年1月26日、誰も予想することができなかった鍔をもつ大型石棒が、幅7.5m・深さ2.3mの落ち込み状遺構から倒れた状態で出土した。この遺構のそばからは中津式深鉢（巻頭図版4-B）と倒れたケヤキの大木が検出された。

更良岡山遺跡は、本報告に記述したように縄文時代後期初頭から晩期まで続く拠点的集落である。この遺跡から西に400m下流の右岸に、寝屋川市教育委員会が平成2年（1990）に調査した譲良川遺跡がある。遺跡名は異なっているが、更良岡山遺跡とは一連の遺跡である。この遺跡は縄文時代中期を中心とし、膨大な量の船元式土器が出土している。土器の時期は船元I式から里木式まで継続し、船元II・III式が主体をなしている。この多量の土器と共に北陸系の浅鉢土器をはじめ、関東・東海系の土器が出土している。この遺跡は後期には衰退し、上流の更良岡山遺跡に移っていったようである。

譲良川遺跡から西に500m下流の左岸にも縄文時代中期の砂遺跡があるが、この遺跡は譲良川遺跡の西端となり河内湾の河口付近となる。

彫刻石棒の形状

このような遺跡環境のなかで彫刻石棒は出土した。残念なことに完形ではなく頭部の直下と身部の上半部の2ヶ所で折れた状態の破損品だが、本来の形は他県で出土した彫刻石棒を参考に復元することができる。現存長25.0cm・最大幅13.3cm・最大厚12.0cm・重さ4kgを測る。現存部では下半に向かうに従って徐々に器幅を増しており、全体を残す類例から推定すると身部の中程に最大幅をもついわゆる「中太」の形状を呈すると考えられる。遺存度は全体の約4分の1で、本来の全長は1mを前後する大型石棒であったと推定される。残存する一面の上部に、側縁が末端に向かって徐々に内湾しつつ尖る浮き彫り（陽刻）のV字文＝V字隆帯を形成している。これがいわゆる女性性器を表現するものである。器表面には丁寧な研磨が施されており、整形時の叩打痕などは観察されない。

上下の割れ面と背面側の割れ面は同一線上の位置から打撃されており、連続して何らかの意図をもって破碎された可能性が極めて高い。破碎後の二次的な剥離面などは認められない。

分布と搬入ルート

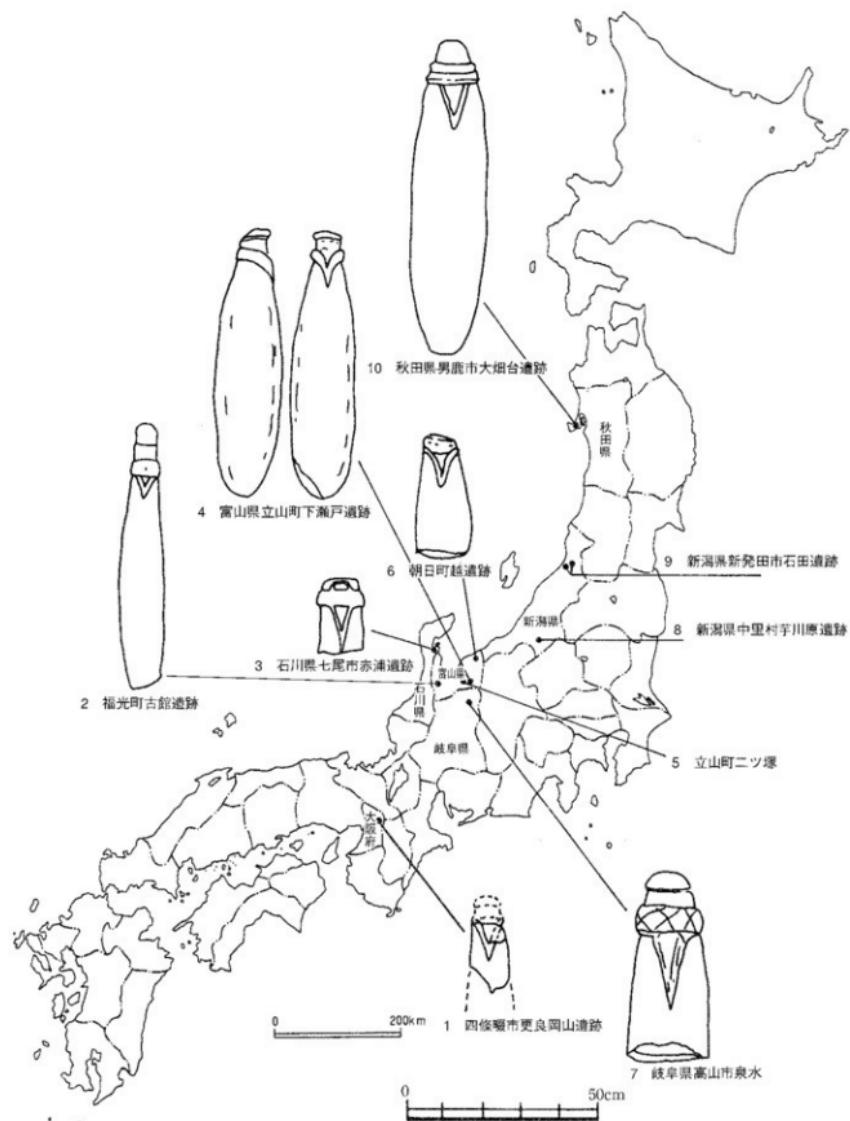
『鍔をもつ大型石棒』使用石材は、石川県南西部の金沢から小松市にかけての地域で産出する石英安山岩であることが、奥田尚氏（八尾市立曙川小学校教諭）によって同定された。この彫刻石棒は特別な搬入例として考えることができる。石棒以外に石英安山岩製の磨石および石斧・ヒスイ製石斧をはじめ、鉄石英・正硅岩など北陸地方に産出する石材が数多く搬入されている。

縄文時代の讃良川流域における北陸との交流としては、前述の讃良川遺跡での北陸の新保・新崎式土器、更良岡山遺跡における前述の石器および石材や岐阜県を中心に出土する石冠などが挙げられる。これらは北陸地方との深いつながりを感じさせ、精神活動に伴う遺物の豊富さは、拠点的集落としての性格の反映であるといえる。

彫刻石棒が使われた時期

小島氏の研究では、彫刻石棒は中期中葉に使用された可能性が高く、更に中期中葉末にはその製作が中止されたことを明確にされている。

更良岡山遺跡で石棒を用いた呪術活動は、一般には完形の石棒を前提として考えられている。しかし、実際に遺跡から出土する大型石棒のうち完形での出土例が少なく、さ



第24図 更良岡山遺跡出土と同系式の大型彫刻石棒分布図
小島俊彰「鶴をもつ縄文中期の大型石棒」「大鏡」第10号（1986.12）に一部加筆

らに現状では大型石棒の最古例と考える長野県穴沢遺跡出土の石棒破片の事例から、『破碎行為自体が一つの儀礼であったと予測される』との見解を示されている。

本石棒の破碎を改めて検討してみると、他の破損石棒の類例と比較しても破損面の在り方は特異なものである。特に同一方向から連続して折られている状態は、明らかに意図的に破碎したものである。また破碎後の二次的な剥離や敲打による再加工を行った痕跡が全くみられないことから、石材としての二次的な利用はしていない。そのようなことから折ることに何らかの意味が込められているのではないだろうか。

中期中葉の石棒が、後期初頭に折損して廃棄されたと考える場合、後期初頭までの伝世あるいはその段階での再利用ということが想定されるが先述のように生活用具としての二次的な再利用の痕跡はみあたらない。

小島俊彰氏は再利用の可能性をもつ石棒の類例として、石川県米泉遺跡出土例（後期後半から晩期）と新潟県寺地遺跡例（晩期前半）を挙げている。近畿地方でも三重県天白遺跡で後期後葉から晩期初頭の配石群に伴って4点の大型石棒片が出土している。これらは鍔を有するものではないが、いずれも受熱や折れ面の摩滅が見られ、折損後長期間にわたってこのままの状態で使用されたことを示しているといえる。

今回紹介した更良岡山遺跡例の廃棄時期は、前述のように後期初頭であることはほぼ間違いない、米泉例や寺地例と比べると『鍔をもつ大型石棒』の盛行時期には近いが、中期後葉という明らかな断絶を挟むことから、やはり中期中葉の石棒としての再利用を考えるのが妥当ではないか。

彫刻石棒が北陸地方から更良岡山遺跡へ搬入されたことは間違いない。その搬入ルートとしては、北陸ないし岐阜県北部から滋賀県に入り淀川を下るルート。または琵琶湖の水運を使うことも考えられる。

所属時期

『鍔をもつ大型石棒』全体の所属時期については、中期中葉に搬入され完形のまま使用された後に後期初頭に至って折損とほぼ同時に廃棄されたというものである。しかし、搬入時期の再下限が後期初頭まで下がることも全く否定されるものではない。

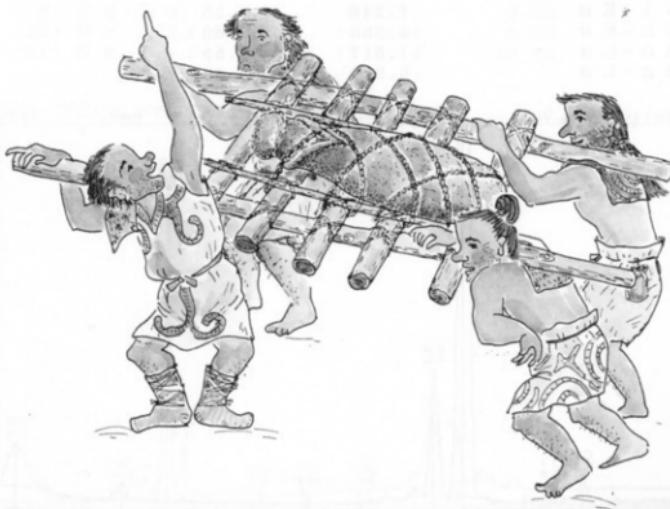
この彫刻石棒は単なる土器や石器などの生活用具ではない。更良岡山人は精神生活に深く関わる異文化を導入した進歩的な思想をもつ人々であるが、本遺跡と北陸地方が何

らかの深い繋がりがあることだろう。

本石棒のような特殊な表現や意味をもった石棒が遠隔地に搬入されていることの意味を考えるとき、単に生活資材である土器や石器石材などが移動していることはその次元が大きく異なっている。当時の更良岡山の人々が何の意味もなく遠い北陸から運んできたわけではない。更良岡山の人々が何か切なる願いを込めて異文化を受け入れたのだろう。

1998（平成10）年度の発掘調査が、幸いにも石棒出土地のすぐ南側で行われた。その結果、調査地の上層で縄文時代晩期の土壙墓群が確認された。阪南市向出遺跡と同様の環状配置を呈しており、サークルの半分途切れたものが2サークル分検出された。この下層からは縄文時代後期初頭の中津式土器とそれに伴うメノウ原石・碧玉原石などが出士した（巻頭図版4-A）。この層から今回紹介した大型石棒の欠損部破片は出土しなかったが、他の石棒が出土した。

参考文献：野島 稔・大下 明『大阪府四條畷市・更良岡山遺跡の鍔をもつ大型石棒』（古代文化第51巻第4号）



第25図 「更良岡山村へむけて出発だ～」

2) その他の祭具

本報告の讃良川改修工事に伴う発掘調査では土偶は一体も出土しなかったが、昭和44年の更良岡山遺跡の発掘調査では土偶が6体出土している。そのうちの2個体は良好な状態である（図版34-A-2・3・第26図-1・2）。他は、足の部分が2固体（図版34-A-5・6・第26図-3）、顔1（図版34-A-1）、腕1（図版34-A-4）である。他に赤彩（巻頭図版5-B）された土器片をはじめ勾玉やミニチュアの祭具（巻頭図版6-A）が出土している。

測定時間 : 100sec

フィルター : 無し

X線管電圧 : 45kV

コリメータ : 0.30mm

X線管電流 : 3.00mA

X : -17.56mm

ターゲット :

Y : -82.90mm

最大 : 64.56cps 数え落とし率 : 3.85%

No.	元素	ENERGY(keV)	積分強度cps
1	C a -K α	3.706	8.19
2	T i -K α	4.543	8.32
3	F e -K α	6.431	472.35
4	F e -K β	7.082	75.11
5	N i -K α	7.546	9.35
6	N b -K α	16.588	57.69
7	M o -K α	17.517	35.55
8	H g -L α	9.929	0.45

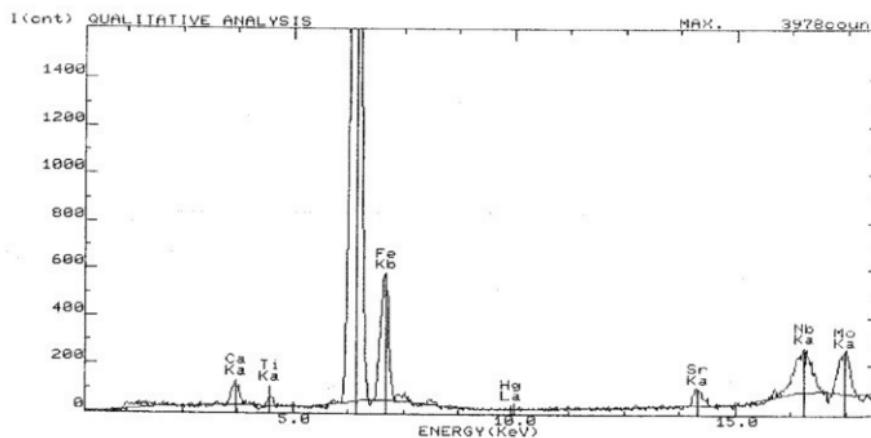


表1 上偶元素分析表 (図版34-A-6)

土偶

土偶（巻頭図版6-A-1・図版34-A-2・第26図-1）の左目（耳？）にベンガラによる赤彩がわずかに観察された（表-2）。目は後方まで貫通しており左目は上方に向かって貫通している。口は角が丸い逆三角形である。この口から下方に直径3mmの穴が貫通し消化器官を表現している。上口が凹んでいるのはこの穴をあける際にできたものである。

測定時間	30sec	フィルター	無し
X線管電圧	45kV	コリメータ	3.00mm
X線管電流	1.00mA	X	36.45mm
ターゲット		Y	-82.20mm
最大	241.93cps	数え落とし率	31.82%

No.	元素	ENERGY(keV)	積分強度cps
1	Ba-L α	4.481	101.65
2	Ba-L β 1	4.883	27.51
3	Mn-K α	5.874	49.54
4	Fe-K α	6.369	1941.37
5	Fe-K β	7.020	337.96
6	Sr-K α	14.142	74.68
7	Nb-K α	16.495	793.78
8	Mo-K α	17.455	464.44
9	Hg-L α	9.929	0.00
10	Hg-L β 1,2	11.788	0.00
11	Hg-L γ 1	13.752	10.60

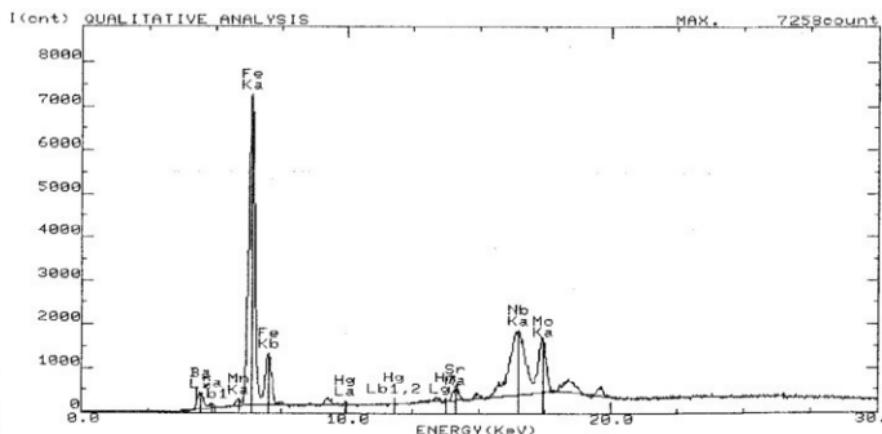
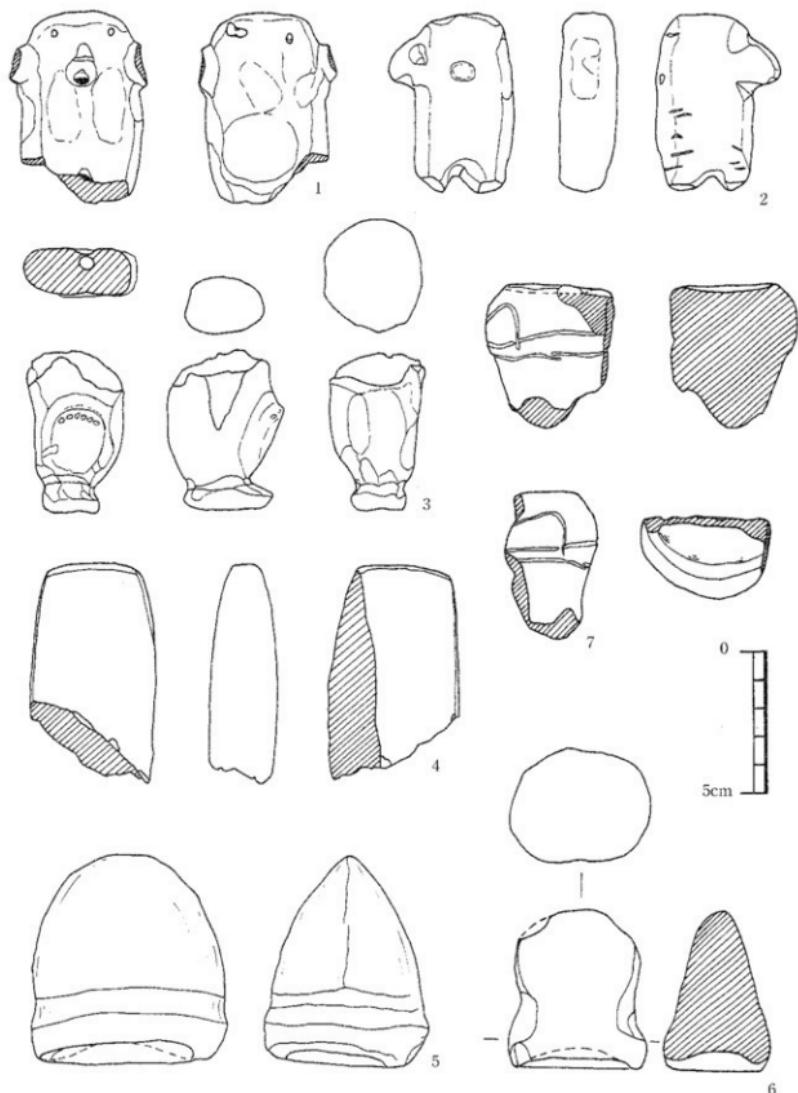


表2 土偶元素分析表（巻頭図版6-A-1・図版34-A-2）



第26図 昭和44年出土祭具

手の部分と腰から下は欠損し、乳房は剥離しており、剥離部分が灰色を呈している。この土偶の手足はソケット状にさし込まれている（レントゲン写真図版36-1）。この制作方法は、消化器官・垂下した乳房の表現など櫻原遺跡の土偶と全く同じ手法である。残存高6.8cm。

土偶（図版34-A-3・第26図-2）は左手が欠損している。手は貼りつけて、足は体からひねりだしている。

測定時間	100sec	フィルター	無し
X線管電圧	45kV	コリメータ	0.30mm
X線管電流	3.00mA	X	34.61mm
ターゲット		Y	-77.55mm
最大	39.78cps	数え落とし率	1.96%
No.	元 素	ENERGY(keV)	積分強度 cps
1	C a - K α	3.706	6.21
2	F e - K α	6.431	287.30
3	F e - K β	7.082	39.50
4	S r - K α	14.173	6.09
5	N b - K α	16.557	23.92
6	M o - K α	17.486	16.22
7	H g - L α	9.946	0.23
8	T i - K α	4.467	1.47

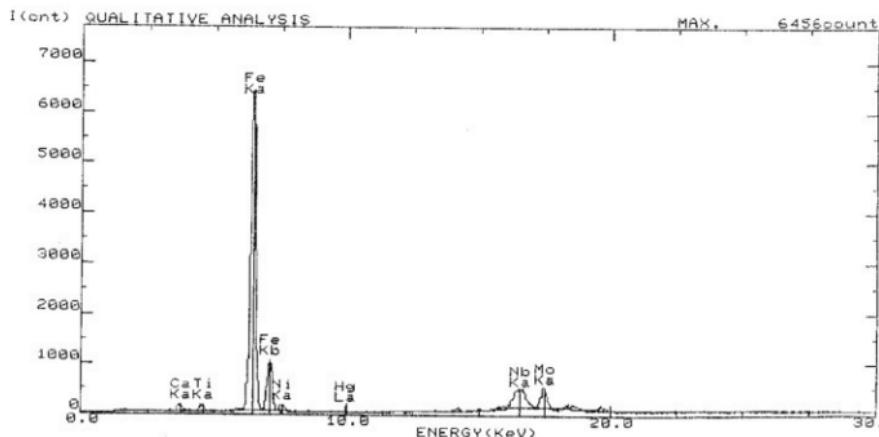


表3 赤彩土器元素分析表（巻頭図版5-B）

顔は指で押して口を表現するのみで乳房もなく、かなり省略化した形である。高さ6.3cm。

土偶（図版34-A-6・第26図-3）は左脚部である。脚部前面に弧状に刺突が施されているがその刺突の2ヶ所にベンガラが認められた（表-1）。足の底面は凹んでいる。残存高5.4cm。

土偶（図版34-A-5）は右脚部である。足部は欠損している。脚部に弧状に沈線を施している。残存高6.4cm。

土偶（図版34-A-1）は顔の部分である。耳は右から左に貫通している（レントゲン写真図版36-2）。顔の表情は表現していないが、顎の輪郭が表現されている。なお図版では後頭部が写されている。残存高2.6cm。

土偶（図版34-A-4）は手部である。手先は2つの突起で表現されている。残存高2.7cm。

ミニチュア祭具（巻頭図版6-A）

2は土製であるが何を表現しているか不明である。上下が欠損、1の土偶の手足と同様ソケット方式で突起部分を挿し込んでいる（レントゲン写真図版36-3）。左側にも突起があったのか挿し込んだ部分から脱落している。残存長4.6cm。

3は土製勾玉である。長さ3.8cm。

4・7・9はきのこ形をした土製品である。4の長さ3.8cm（レントゲン写真図版36-6~8）。

5は土製品。2つの突起がつき、下部前面に沈線一条と、円孔が4ヶ所あり底部に貫通している。高さ3.6cm。

6はしゃもじ状であるが梢円部分に貫通した穴が2ヶ所みられる（レントゲン写真図版36-4）。

12は平たい球状である。中央に貫通した穴が認められる。一部破損している（レントゲン写真図版36-5）。

13は一部欠損しているが下部の3箇所に貫通した穴がある。穴から放射状に4つの突帯がある。突帯の先は尖っている。底部は深く凹んでいる。

8は彫刻が施されている石製品である。

ヒスイ石斧（巻頭図版6-B-3・第26図-4）

新潟県姫川産である。ヒスイ製の石斧は他に類例がみられない、祭具としての道具であろう。残存長7.5cm

日常に使う蛇紋岩製石斧（巻頭図版6-B-1・2・4）も3個体出土している。これも北陸に産するものである。

石冠（図版34-B-1・第26図-5）

石冠は周知のように岐阜地方に分布するものである。表面は研磨されている。下部に稜をもち底部は凹面となっている。7.5cm。

他に土製のものもある（図版34-B-2・3、第26図-6・7）。下部が張り出し、底部凹面をもつ。2の高さ5.9cm。

上記の祭具以外にも石刀や石剣も出土している。

3) 日常に使う道具

他地域の土器

（図版35-A-1）関東系の土器である。口縁波頭部である。波頭部直下に円孔がある。

（図版35-A-2）東北大洞BC式土器の口縁部片。

（図版35-A-3）櫛原式土器部片。

石皿と敲石（図版35-B）

石皿はよく使い込まれ中央が凹んでいる。敲石は叩き面が顕著である。敲石は大量に出土している。

昭和44年の調査で祭具とともに大量の土器と石器類が出土している。これらは日常生活に不可欠なものである。現在の新池のあたりがこの遺跡の中心地であり生活空間である。そのすぐ北側にある石棒出土地や墓がこの集落の祭祀場所であると考えている。石棒出土地からケヤキの大木が倒れて出土した。このような情景を考えると祭祀場らしい雰囲気である（巻頭図版3-B）。祭具は北陸地方の石材を多く使い、また文化も柔軟に受け入れている。縄文時代中期から晩期まで北陸とは強いつながりがあったことがわかる。

讃良川流域は後背の飯盛山系や河内湾の自然に恵まれた住みやすい環境であったのだろう。縄文時代中期以降は現在のように温暖な気候であり広葉樹林が広く分布し動植物が繁殖しやすい条件であり集落を営むには最高の場所であった。それはこの遺跡が縄文時代中期から晩期末まで続いたことからも推察することができる。

更良岡山遺跡

櫻井敬夫



昭和44年頃の更良岡山遺跡

讃良川のはとり

JR忍ヶ丘駅を降り、北へ50m、一方通行の西行きの道を200m、忍岡古墳のある丘のふもとを右に折れ細道を下ると、岡山新池の大きな池面を見ることができる。

寝屋川市南端の台地とこの忍ヶ丘の丘陵との谷間を流れる川は、昔の郡名をそのまま今につたえる讃良川である。この川は東の山にその源を発して、門真市巣本付近で寝屋川に合流しているが、昔はこの丘陵の谷間を自由に流路をかえて流れ、西の平地に至って天井川を形成していった。後に新池が築造され、この谷間の出口は用水池となり、この時に讃良川の流路は、現在の新池北側につけ替えられたのである。

かねて片山長三先生からお聞きしていた四條畷の岡山にある縄文遺跡をたずねようと、家から自転車でこの地を訪れたのは、たしか昭和30年の秋の日曜日の午後であった。

星田から打上を過ぎ、東高野街道が寝屋川市と四條畷市の境界を流れる讃良川をわたる橋のたもとに自転車を置き、川ぞいに西に向かって歩いた。当時このあたりは、今のように住宅はなく川より北の斜面は段々畑になつておらず、川の南は畠田でありそれは岡

山新池の堤に接してした。

川より北側の段々畠のうねを行ったり来たりしながら、畠を一枚一枚しらべて行った。遺跡特有の黒みがかった土の層はないか、表面に遺物はないか。畠を往復し畠の段差の土の色を気にしながらの観察の時間であった。

ちょうど新池の北東の畠を歩いている時、うねにはじめて土器片を発見することができた。土の色も古い昔の生活の跡をしのばせるような黒褐色。ひきつけられるように目を移していくと、続いて数片の土器片とサヌカイトの破片、そして石鎌を見つけることができた。土器片は、弥生時代のものと異なり、明らかに縄文の土器片であった。引き続いて池の北岸の畠で土器片やサヌカイトの石片を採集することができた。

これらの土器や石器を使い、私たちの祖先がこの地で生活していた頃は、讃良川も今よりも清らかな流れでありまた水量も豊かであったであろう。森林はこの近くまでせまっており、木の実の採集や狩猟にも事欠かなかったであろう。西にひらける低地に続いて、それ程遠くないところに入海（河内湾）がせまっており、それはまた豊かな海の幸を提供していたであろう。清流の讃良川をひかえ南面したこの段丘は、4000年もの昔縄文時代に生きた私たちの祖先の住居としては、まことに好適の場所であったに違いない。

秋の夕日が岡山新池の池面をそめ、やがて夜のとばりがおりはじめるまで、私は池畔に立っていた。私にとってこの日は、更良岡山の縄文遺跡に足をふみ入れた最初の記念すべき日であった。

この更良岡山遺跡は、昭和24年片山長三先生が四条畷高校の地歴クラブを指導されて、発掘調査を行われたのが最初であり、この地が縄文時代の遺跡であることがはじめて確認されたのである。この時の出土品には、縄文後期に属する高杯の祖形と考えられる美事な土器や、元住吉山式の深鉢が発見され、いずれも大阪市立博物館に展示されている。

その後、年を追ってこの付近は宅地化される中で、昭和44年曇古文化研究保存会が、続いて昭和46年四條畷市教委がそれぞれ調査を行っている。その結果は多くの土器片、石器、礫器等の発見となり、旧石器もこの折に見つかっている。その間に帝塚山大学の堅田直氏の発掘もあり、これまでの調査によって遺跡地は、岡山新池北岸一帯の段丘にひろがっており、旧石器・縄文時代後期・晩期を中心とし、その後西部には古墳が築造された模様がうかがわれ、続いて奈良時代に創建されたと推定される讃良寺の遺構も複合している事が判明した。

旧石器の発見

私たちが解明したいと思うことの一つに、私たち日本人の祖先は、いったいどのようにして、いつ頃からこの国土に住みはじめたのであろうか。またその頃の国土の様子はどのようであつただろうかという課題がある。

はるかな未知の祖先のあしあとを少しでも解明しようとする努力は、特に戦後多くの人たちの手によってなされて来た。昭和23年、相沢忠洋氏によて群馬県岩宿の関東ローム層とよばれる赤土の中から私たちの祖先が使用した石器が発見された。今から一万年前から数万年前にできたこの地層からは、今までにこのような石器は発見されておらず、この発見は、日本の考古学会で特筆すべき発見となったのである。このことは、我が国にもアジア・ヨーロッパ大陸での旧石器時代と並ぶ時代に人類が住んでいたことを証拠づける大きな発見であった。

その後、我が国の各地から次々と旧石器時代に属する石器が数多く発見されてきた。昭和24年、片山長三先生が四条畷高校で教鞭をとっておられた頃、この讚良川畔で縄文時代遺跡発掘の折に遺物中から旧石器時代に属するものと思われる石器を発見され報告されている。また、昭和31年、近畿ではじめての旧石器発見として、交野市神宮寺での国府型ナイフ形石器・握槌状の核石器の発見があった。その後昭和32・33年と2年間にわたって、山内清男・島五郎・鎌木義昌の各先生が、藤井寺市の国府遺跡で本格的な旧石器の発掘調査をされたことは、近畿地方における旧石器の解明に大きな足跡となった。

枚方台地から寝屋川・四條畷に至る丘陵地帯からもその後次々と旧石器の発見がなされてきた。昭和50年、枚方市文化財研究調査会が発掘調査をされ多くの収穫のあった楠葉東遺跡をはじめ、津田三ツ池遺跡・茄子作遺跡・四條畷市讚良川床遺跡等があり、石器採集地としては寝屋川市高宮・打上・四條畷市忍ヶ岡が数えられる。

旧石器時代

洪積時代といわれる今より200万年前より一万年前までの時代は、氷河期と呼ぶ寒冷の時期と、間氷期と呼ぶ温暖の時期が交互に地球をおとすれ、寒冷の時期が4回、温暖の時期が3回あり、現在に至っているとされている。温暖の時期には、気温が現在よりも高くしたがって動植物の様相も暖地性、亜熱帶性のものに変わり、降りしきる雨は谷を作り砂礫を川下へ堆積していったことであろう。温暖の時期が終り、徐々に寒冷に向いその極寒に達した頃は、蒸発した水分は雪となって降り地球の両極を中心に、3分の

1近くも氷雪で覆われた時期があったということである。そして、その寒冷の時期には我が国と大陸とは地続きになっており大陸からの動物と共に人類の移動もあったことと予想される。

激しい雨の時は大量の砂礫が流され堆積し、おだやかな雨の時は砂や泥を堆積し、黒い粘土には多くの動植物の遺体を含んで積み重なっていったことであろう。枚方台地をはじめ、生駒山系によりそうように所在している赤土の層は、この時期にできたもので、この地層を洪積層とよんでいる。

この氷河時代こそが、人類の誕生の時代であり人類の夜明けの時代でもあった。私たちの祖先がまだ土器の製作を知らず、専ら石器や礫器を生活の用具としていた今より1万年以前のこの人類の夜明けの時代は旧石器時代と呼ばれている。

讚良川床遺跡

昭和44年の10月のころであった。調査の緊急性から畠古文化研究保存会の手で、片山長三先生がこの地を調査されて以降はじめての調査が行われた。調査期間僅か1週間であったが、この調査は旧石器の発見という大きな成果を得た調査であった。

表土層下20cmから縄文晚期の土器を含む黒土層が出現し、80cmでそれが切れ、砂層が続き150cmから以下が砂利層となっており、その砂利層の中に縄文後期に属する土器と共に旧石器の存在を確認したことである。砂利層に旧石器が縄文後期の土器片と混在



昭和44年更良岡山遺跡調査風景

していることは、この地点が直ちに旧石器時代の生活層と言うことができず、以前に片山先生の調査の折にも指摘されたように、この地点に近い場所に遺跡があり、洪水によって流され堆積したものであろうと推測をした。

この発見以降、旧石器について讃良川地域から表面採集された石器等をできるだけ多くつかみたいと思い、関係者の協力を得て石器を集めることができた。その結果、この讃良川床から出土した旧石器の数は多く、また、その年代的な巾の広さからみても、今後に大きな課題を残す資料としてその姿を現すに至ったのである。

次にその主な資料について紹介をすることにしたい。

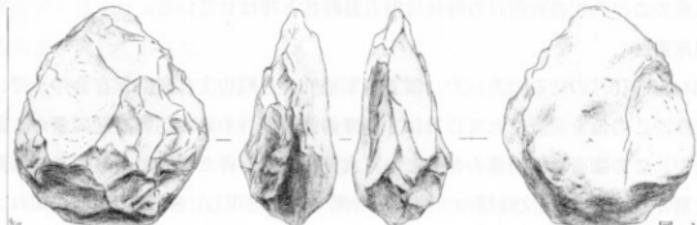


図-1

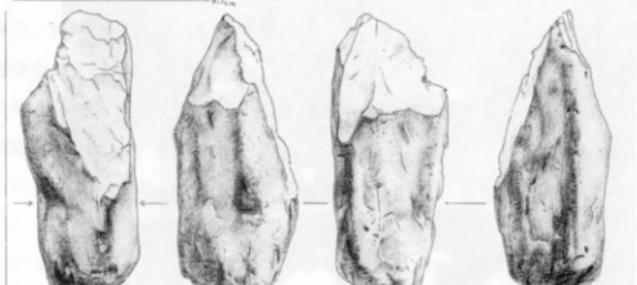
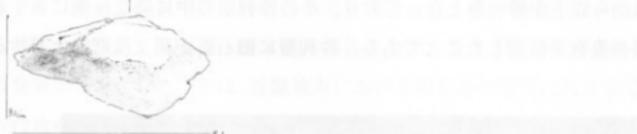
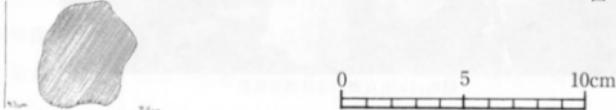


図-2



讃良川床遺跡旧石器チョッピングトール（片山ノートより）

チョッピングツール (図版33-A)

旧石器の中で極めて原始的な石器として考えられているもので、手頃な礫の端を両側から打ちかいて道具として使用したものであり、讃良川床から2点のこの石器が出土している。(図-1) のものは、たて約9cmの石器で、溶結凝灰岩とみられる珍しい石質で、特に片側はうちかきがゆきとどいている石器で、手に握って都合よく、万能石器としての役目を果たしたことであろう。(図-2) の石器は、サスカイトの棒状の原石の一端を思いきって打ちかき、するどく刃をつけたものである。これも先の礫器と同じく当時としては貴重な役目を担った石器であろう。長さは約11.2cmで、握るには好都合の大きさのものである。この2点は讃良川床出土の石器として特筆すべきものであり、近畿地方の旧石器研究にとって誠に貴重な資料であろうと思う。

ナイフ形石器 (図版33-B)

文字通り石器の片側がナイフ状になりするどい刃をもつ石器で、出土の石器はいずれも二上山から採取されたサスカイトの原石から作られたものである。近畿・瀬戸内にその文化圏をもつ瀬戸内技法を用いた国府型の翼状のものもあるが、それと異なり石刃と呼ばれるたてはぎの技法を用いたものもあり、この遺跡の時間的経過を思わせる資料がそろっている。

細石器 (図版33-B)

かつて片山先生が調査された折に、旧石器時代の終わりの頃、約1万年前頃に出現したとされる細石器もあるに違いないとの判断のもとに、出土遺物を綿密に調査した結果、予想通り、何個かの細石器を見出すことができた。

他の石器

翼状の剥片をとって残った石核、また舟底形とよばれるもの、或いは剥片を更に加工して用いたと思われるもの、錐として使用した石器等もその後発見されるに至った。

縄文の時代

ながい旧石器の時代がその終末をむかえる頃、私たちの祖先は土器を作ることを発見した。住居の近くで粘土遊びをしていた子どもが、それを埋火に投げ入れておいたのがいつの間にか焼きあがり、変化したことが土器を作る糸口になったのではないだろうかと、勝手にこのようなことを想像するのであるが、粘土をひねり器を作りそれを焼きし

めて、素焼の土器とするこの発明は、人間の生活に大きな変化をもたらしたものであった。縄文時代という名称は、この土器の表面に縄目の文様が施されていたことから名づけられたものである。

さらに、今一つ大きな進歩といえるものに石鎌の出現がある。槍や丸太などを使っても手のとどかない遠くの獲物に対して飛道具としての弓矢を使うことは実に効果的であり、このことは狩猟生活に大きな革命をもたらしたということができる。この弓矢は鉄砲の発明まで続くのであるが、石でつくった鎌を見るにつけて祖先の技術のすばらしさに感嘆するのは私だけではあるまい。縄文時代は、祖先が土器を作り、弓矢を発明し、これを生活の中に組み入れはじめた時代である。

長崎県の福井洞穴から、旧石器の終り頃に出現する細石刃と共に出土した土器は、土器の表面に粘土の紐をはりつけたもので、隆線文土器と呼ばれているものである。最近の考古学における年代測定の方法として、遺跡から出土した植物の遺体や貝殻を資料として放射性炭素による年代測定法が行われているが、これによって隆線文土器は今より約12000年前のものと測定された。

これによって今まで9000年前と考えられた土器出現の時期が、さらにさかのぼることになり、縄文時代を草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六つの時期に区分され今日に至っている。およその日安として草創期は約9000年から1万2000年前、早期は約7000年前から9000年前、前期は約5000年前から7000年前、中期は約4000年前から5000年前、後期は約3000年前から4000年前、晩期は弥生時代がはじまる約2300年前から3000年前とみてさしつかえないであろう。

およそ1万年にわたる時期の流れの中では、自然現象にも様々な変化があり、祖先の生活もこれらに影響を受けつつ営まれたことであろう。寒冷気象の名残をとどめて縄文草創期から早期にかけては、尚、寒さが厳しく生活はそれに耐えて行かなければならなかつたであろう。やがて縄文前期に入つて気温は上昇しはじめ河内湾とよばれるような大きな入海を形成していった。その後河内湾は、淀川、大和川を中心とする各河川から運び込まれる土砂で埋められて行くと共に、上町台地北に続く砂州の発達で徐々に河内潟と変わり、やがて古墳時代には河内湖と変わって行くのである。

当然食料とする動植物相にも変化があったであろう。私たちの祖先はこれらの条件のなかで自然と共に永い縄文の時代を生きてきたのである。さて、この時代北河内の東北

台地は、旧石器時代に続いて縄文人が活躍した場でもあった。早期には、交野市神宮寺、枚方市穂谷の各遺跡があり、大東市寺川の堂山西方でも土器片が採集されている。中期には交野市星田旭遺跡、後期・晩期には四條畷市岡山の更良岡山遺跡が所在している。

石の道具

縄文時代の後期から晩期に属するこの更良岡山遺跡は、土器片と共に多くの石器や礫器が発見され、この時代の祖先の生活を知る上に貴重な手がかりとなっている。まず、かつての調査により出土した石器類から紹介することにしよう。

(石鎌)

表面採集・調査時を含めて一番多く出土したもので、石質は二上山を産地とするサヌカイトである。形状はなかなかバラエティに富んでおり、一つ一つ観察してゆく程、当時の技術のすばらしさに感嘆するのみである。大型のもので3.3cm、小型のものでは1.1cm、いずれも茎をもっていない。

(石錐)

大型、小型をふくめて数点出土している。おもりいしとして魚をとるあみのおもり、或いは魚つりのしづとして使用したであろう。比較的扁平な石の天地にくぼみをつけて使用している。小さなものは横にくぼみをつけているものがある。大型のものは8cm、小型のものは2.4cm。

(石匙)

大型のものから小型に至るまで、また形もさまざまであるが、いずれも片側に二次加工を丁寧に施し、するどい刃部を作っている。数も多く出土しているが、石質はいずれもサヌカイトである。大きい物では刃部が10cm、小さいものでは3cm。

(石斧) (巻頭図版6-B)

石の斧として使える適当な石を探し出してそれを磨いて片方に刃をつけ、片方は木に接続させて斧として使用したもので、完形品は少なく刃部に近い所、或いは中頃でわれている。このことは、すべて使用したことを示している。石質は、流紋岩・硬砂岩、等で、1個はヒスイ製である(巻頭図版6-B-3)。大きさは12cmのものから6cmのもの。

(敲石)

木の実をうちくだいたり、澱粉をとったり、纖維をとるために植物をたたいた石と思

われる。手に都合よく握れるくらいの大きさで片方にくぼみをつけ指の支えをうまくできるようにしている。丸い石そのままを加工しているものと、半分にしてこれを使っているとのがある。石質はほとんど砂岩に類するもので、中にはずいぶんと使用した跡をとどめているものもある。

磨消繩文

出土した数多くの土器片を観察すると、褐色をおびた粗製の土器と黒味がかったやや光沢をもった精製された土器とに分けることができる。土器の表面に施されている文様も多様であり、変化のあとをたどることができ、土器片を手にしてこれらの文様をみてみると当時の祖先の気持ちが伝わってくるように思える。

さて、繩文時代後期から晩期にかけての時期になると、全国的に磨消繩文と呼ばれる文様が発達することは、これまでの各地の遺跡調査の結果で明らかになっている。

磨消繩文というのは、土器表面に繩文の文様をつけた後、直線や曲線で区画を作り、繩文を残す部分はそのままにし、他の部分はていねいにへらですり消して土器面に変化のある文様を作り出すための土器施文法の一つである。

さまざまな器形にあわせて、土器の口縁部、頸部、胴部に施文されたこの磨消繩文がかもし出す美しさはすばらしいもので、祖先の高い芸術性に感嘆せざるを得ない。更良岡山遺跡でも、この例にたがわず磨消繩文の文様をもつ多くの土器片が発見されている。
つながりをもつ土器

繩文時代の後期、晩期に属する遺跡について生駒山系西麓一帯を見ると、更良岡山遺跡をはじめとして、一番近隣でしかも大きな関連をもっているものと思われる東大阪市の繩手遺跡、馬場川遺跡がある。

繩手遺跡は昭和44年、馬場川遺跡は昭和45年以降調査されたもので、住居跡の遺構をはじめ多数の遺物が発見され、近畿地方でも貴重な遺跡の一つに数えられている。さらに同市では、日下、恩地、鬼塚各遺跡があり、これらの遺跡からも繩文後、晩期の遺物が多く出土している。

また大和川が二上山の北を流れ河内平野にそそぐ扇のかなめにあたる船橋遺跡からは、繩文晩期の船橋式と呼ばれている形式の土器が出土している。

上町台地の北端の森の宮遺跡は、昭和49年に調査が行われ繩文晩期の解明に大きな資

料を提供している。

これらの遺跡以外に更良岡山遺跡と関連をもつものと考えられる瀬戸内、近畿の遺跡には、中津遺跡（岡山県玉島市黒崎字中津）元住吉山遺跡（神戸市垂水区細田）一乗寺遺跡（京都市左京区一乗寺）宮滝遺跡（奈良県吉野郡吉野町宮滝）樋原遺跡（奈良県樋原市樋原神宮外苑）滋賀里遺跡（滋賀県大津市滋賀里）などがある。

かずかずの土器片

出土した土器片を整理してゆく中で、これらは先にあげた近畿、瀬戸内の各遺跡出土の土器とその形式が似通っているものを多く発見することができる。当然のこととはいながらも更良岡山遺跡は、一番近くにある東大阪市の縄手、馬場川両遺跡との関連が極めて深いようである。河内湾の東縁部にあって相互に交流をもつていていたことを物語っている。

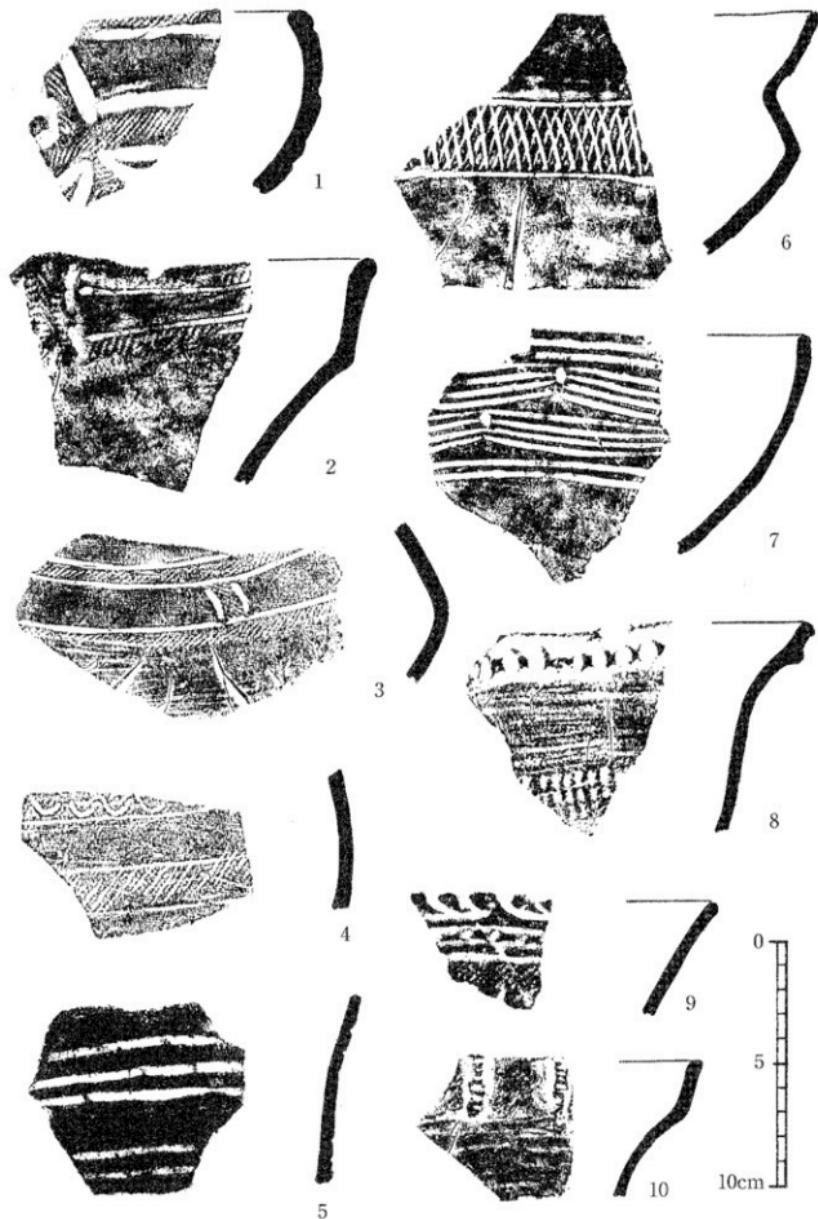
次に土器片多数の中からこれらを紹介することとしたい。拓影の（1）は、中津式（後期）に属するもので、やや黒褐色でしっかりした焼き上がりの深鉢の口縁部の一片である。口縁部から直線と曲線でくぎり流麗な磨消繩文を施している。

拓影（2・3）は元住吉山式（後期）に属するもので、（2）はこの形式の古い時期に属するものと思われ、黒色の勝った色で焼き上がりもしっかりしており波状口縁の突起をもつた口縁部である。この形式は、ひらいた口縁から頸部に至ってくびれ、胴部でふくらみをもって底部につらなる器形をもつ深鉢が多く、精製されたもの、粗製を含めて更良岡山遺跡出土の土器形式の主流をなすものと思われる。（3）は胴部の破片で（2）よりも後の時期のものと思われ、ふくらんだ胴部に簡単な磨消繩文を施している。

拓影（4）は一乗寺式（後期）に属するもので、繩文を施した胴部の破片で、焼き上がりもしっかりしており、数点の出土がある。

拓影（5）は宮滝式（後期）に属するもので、黒褐色の深鉢の胴部で、2本、3本とのグループに分かれた沈線がみられる。宮滝式の文様は、卷貝の腹縁を利用して器面に扇のようにおしたところを中心として帶状に沈線をめぐらしているのが特徴で、この資料にも沈線のゆきつくところに貝の文様があるはずである。数片の出土がある。

拓影（6）は樋原式（晩期）に属する浅鉢で、器の内外共にへらでていねいに仕上げており、口縁につづいてふくらみを持つ部分に文様を刻んでいる。薄手で焼き上りもしっかりしている。



更良岡山遺跡土器拓影

拓影（7）は滋賀里式（晩期）に属するもので、広口の鉢の口縁部で、文様はさきの宮滝式に似た手法をうける典型的なものである。褐色でていねいな仕上げである。

拓影（8）は船橋式（晩期）に属するもので、口縁部に突帯をつけ、それに刻み目をいれている深鉢で、この時期では古い部に入るとと思われる。黒みがかった焼きあがりも良い。この形式は口縁や土器の肩の部分に突帯がついており、刻み目も大小さまざま、口縁部が比較的多く出土している。

拓影（9）は亀ヶ岡式（晩期）に属するものである。東北地方の晩期の土器は一般に亀ヶ岡式と呼ばれており、文様や器形の美しさは現代にも通ずる藝術性をもっており縄文時代最後を飾るにふさわしい土器といえよう。更良岡山遺跡からは今まで一片だけの出土であるが大洞B式の系列に入る土器片と思われる。

拓影（10）は観塚式（後期）のものと思われる。観塚遺跡は浜松市に所在しており、この土器片は口縁部に隆線をはりつけ刻み目をついているもので、比較的薄手の土器で、これも1片のみの出土であるが注目に値する。

復元の土器（巻頭図版5-A）

写真は出土土器を復元したもので、（1）は広口の頸部がくびれて胴部のはっている元住吉山式の深鉢で、3個の突起をもつて美しい形の土器である。黒褐色を呈しており、焼き上がりもよい方で、口縁部と胴部に磨消縄文の文様を施している。口径約20cm、器高も約20cm。

（2）は（1）と同じ元住吉山式の粗製の深鉢で、褐色、小型のもので文様はなく仕上げの時に残したと思われる浅い条痕が一部に残っている。口径10.3cm、器高8.5cm。

（3）は注口土器とよばれるもので、器高23cm、中央の最大直径約30cm、薄手のもので良質の粘土を使って念入りな仕上げを施している。中央上部の口の周囲には元住吉山



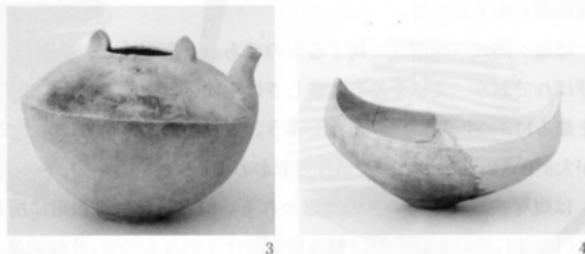
1



2

式の文様が施され、中央部の口の付近には直径5mmの穴が2ヶ対称にあけられている。注口土器の器形は珍しく今までに注口部が9個出土しており、この種の土器については今後注目すべきものがあると思う。

(4) の船形の土器は注口土器と共にこの遺跡では特色のあるものと思われる。長径約25cm、口縁部には細かい縄文を施している。褐色で焼きあがりも良く形も美しい。



3

4

土偶やまが玉（巻頭図版6—4）

更良岡山遺跡遺跡では、土器以外に当時の生活を知る上で貴重な土製品の数々も出土している。土製のまが玉、円環、半球形の中央部に穴を施したもの等である。土偶も数点出土しており当時の祖先の精神生活を知る上で貴重な資料となっている。

その内下の写真の土偶は遺跡出土の土偶の中で特筆すべきものである。足の部分と手の部分、乳房は欠落しているが、頭部に作られた二つの目、鼻と口とを一つにして一つでない形、両脇の手の位置、高さ6cm、幅4cm、厚さ1.5cmのこの土偶がかもし出す雰囲気は実に素朴なあどけなさと親しみ深いものがあり、いつまでながめていてもあきない親しさを感じるのである。なおより一層この感を深くさせるものに、口から下まで中央を直径3mmの穴を通しておることがあげられる。樅原遺跡出土の土偶と酷似している。

讃良川畔3000年の昔、私たちの祖先は弓矢をもって東の山々を歩いていたであろう。余り遠くない西の海辺へ漁をしにも行ったであろう。この石錐で衣をつくろっていたであろう。これら出土した土偶などの祭祀具をはじめ、土器や石器の一つ一つは私たちに当時の生活の様子と祖先の人々の気持ちを伝えてくれるのである。

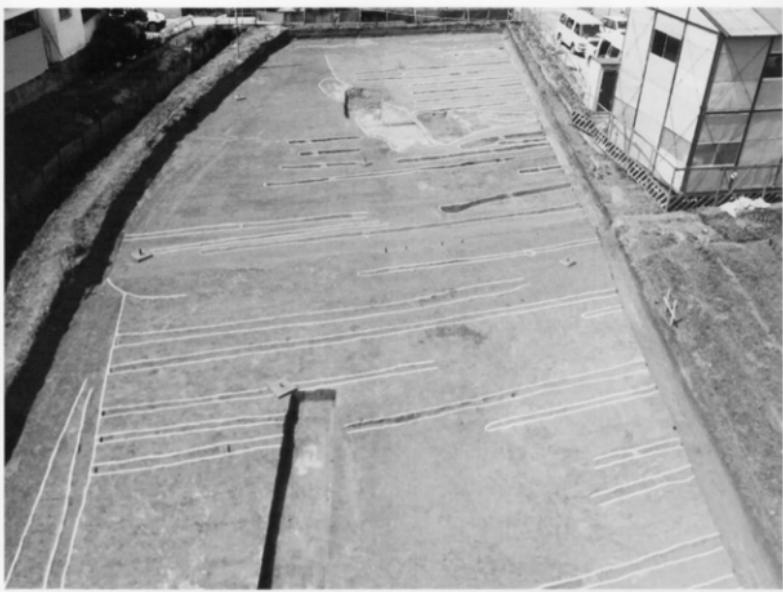


地域文化誌《まんだ》12・14・15号記載 一部加筆

図 版



A



B

図版 2 調査区スナップ・土壤・溝検出状況



A



B

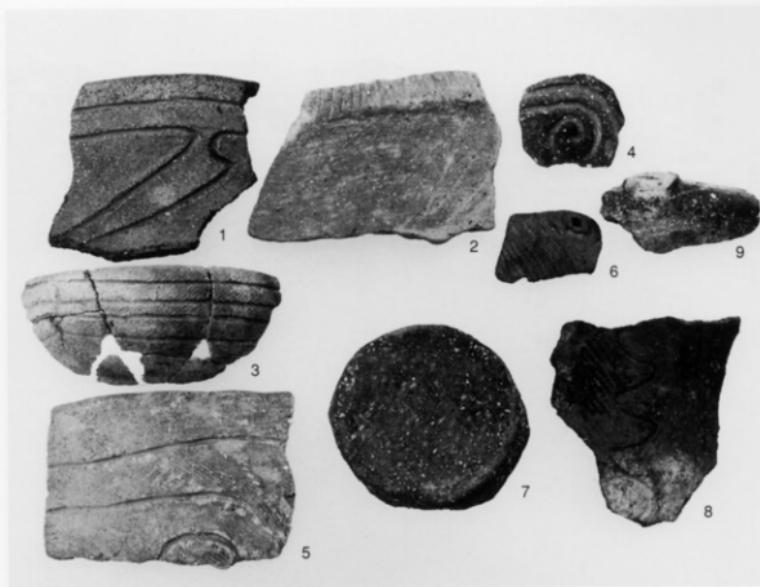
図版 3 微化分析試料採取スナップ・出土遺物 土器



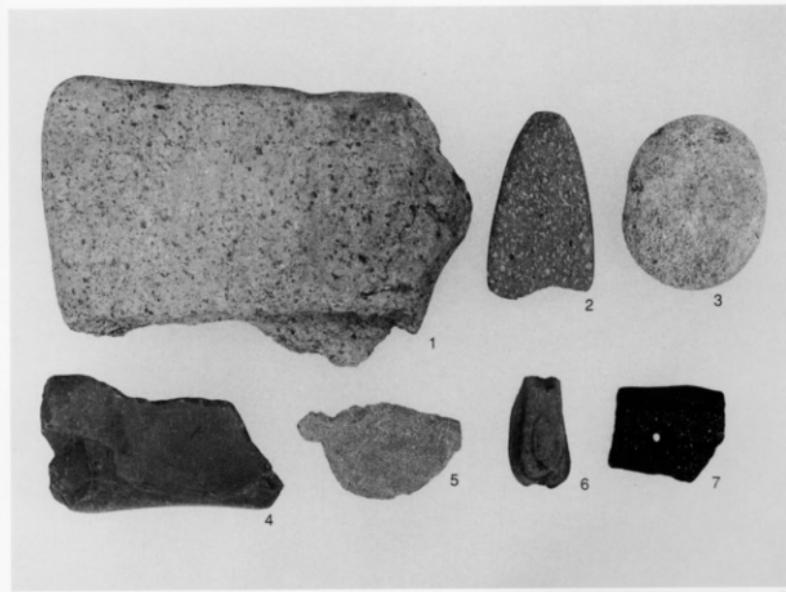
A



B



A



B



A



B

図版 6 調査区スナップ・出土遺物 土器



A



B



A



B

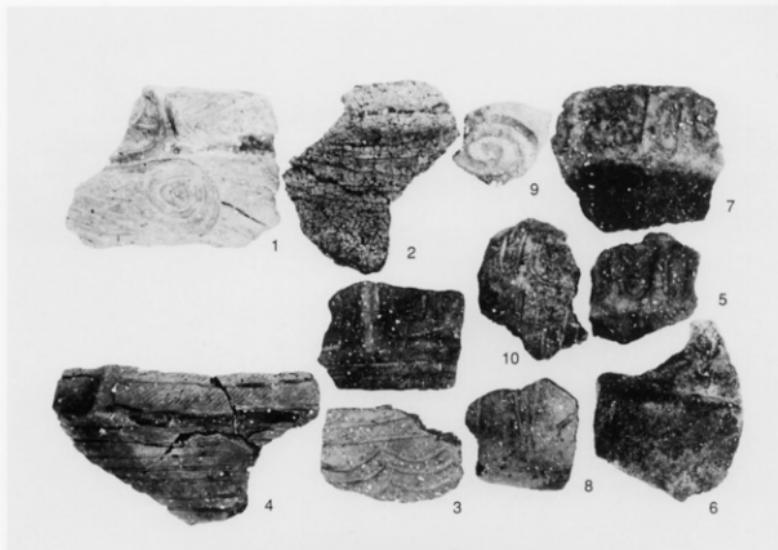
図版 8 調査区スナップ・縄文土器出土状況



A



B



A



11



12



13

B

図版 10
更良岡山遺跡 平成 8 年度調査区全景



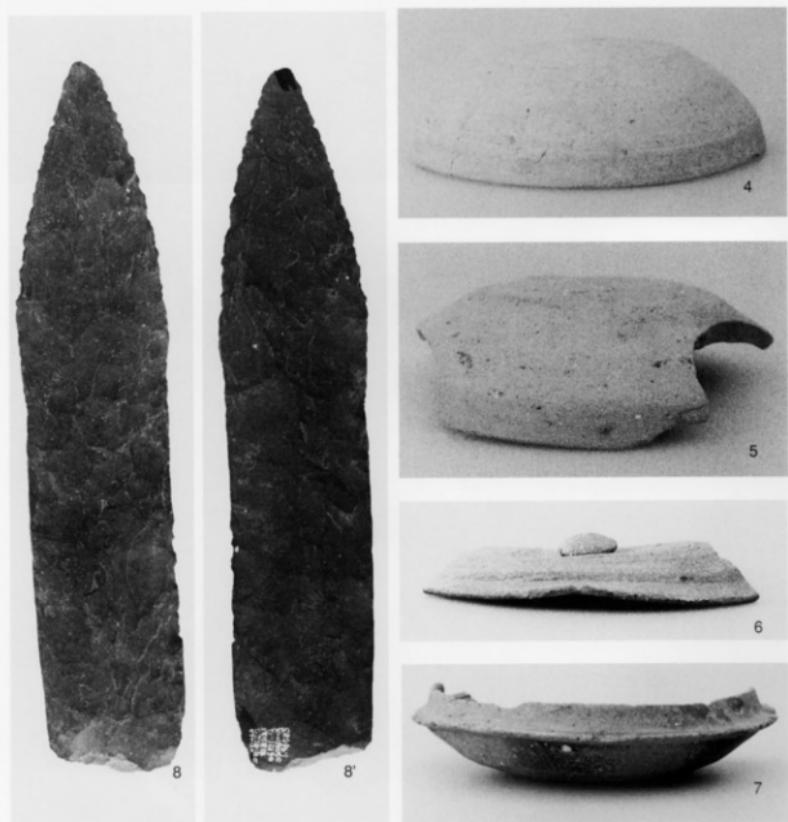


A



B









A



B

掘立柱建物跡・落ち込み状遺構検出状況



A

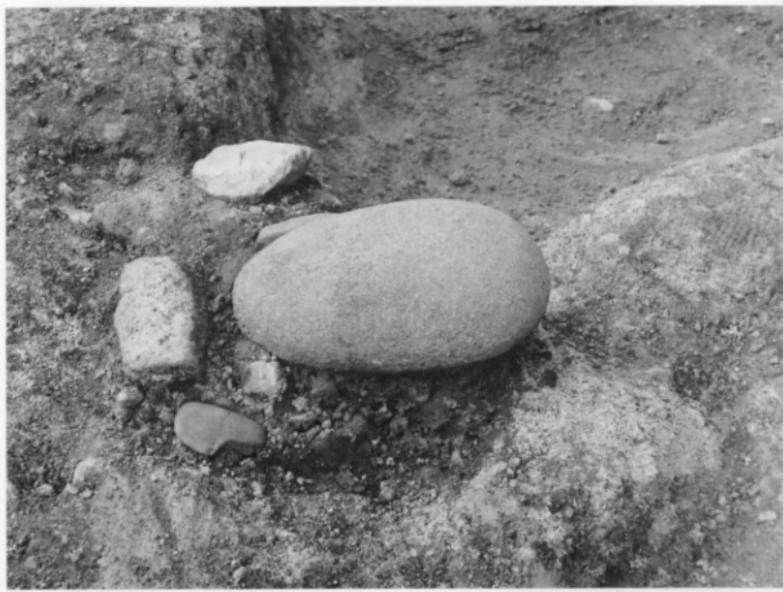


B

落ち込み状遺構内磨製石斧・石皿出土状況



A



B

落ち込み状遺構内大型彫刻石棒・中津式土器出土状況



A



B

落ち込み状遺構断面・調査区全景

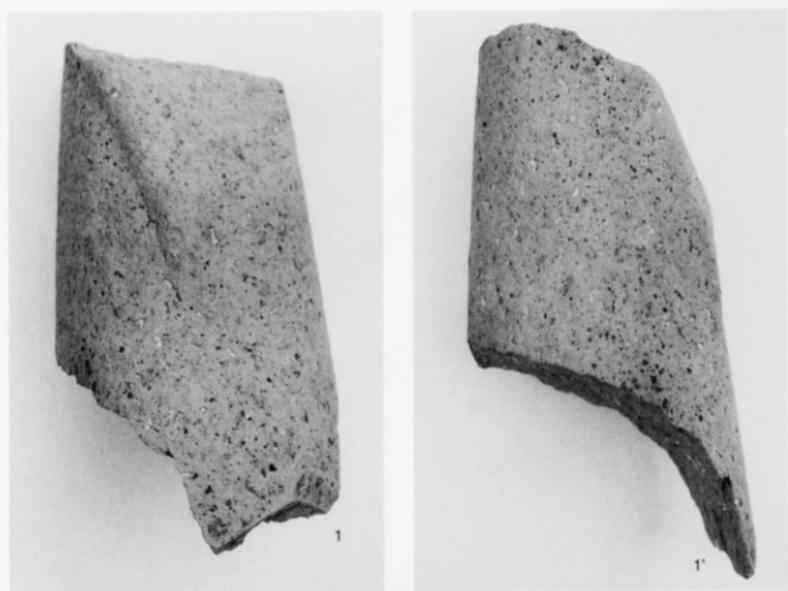


A

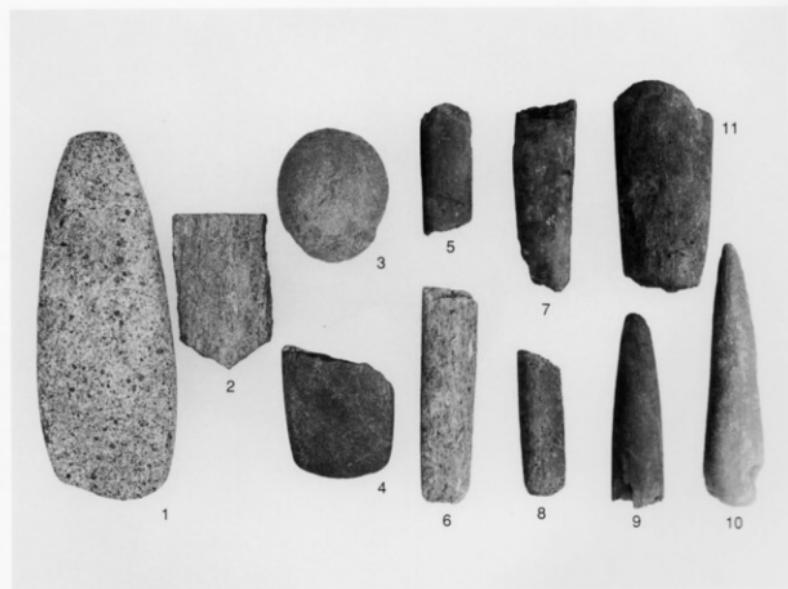


B

図版 20 出土遺物 大型彫刻石棒・石斧・石棒



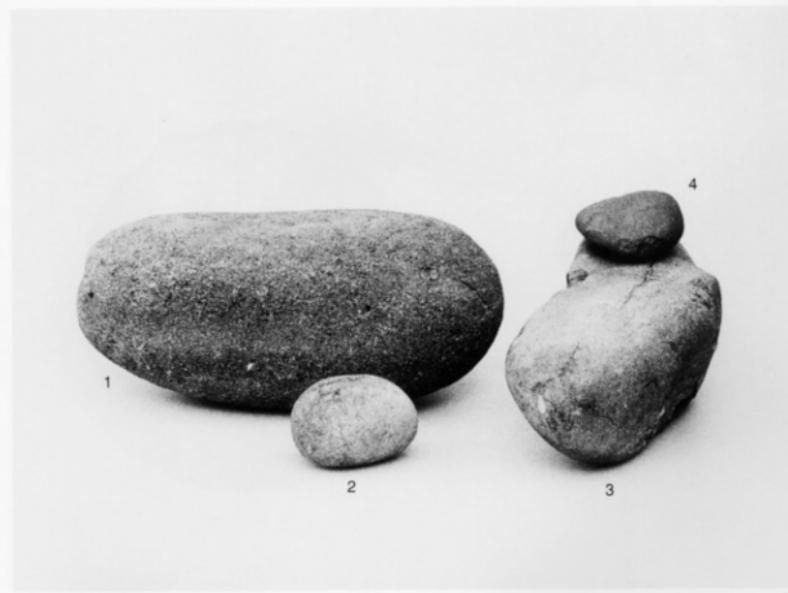
A



B



A



B

圖版 22
出土遺物 石鑿・軒瓦



A



B





A



B



A



B



A



B

図版
27
落ち込み状遺構内石棒出土状況

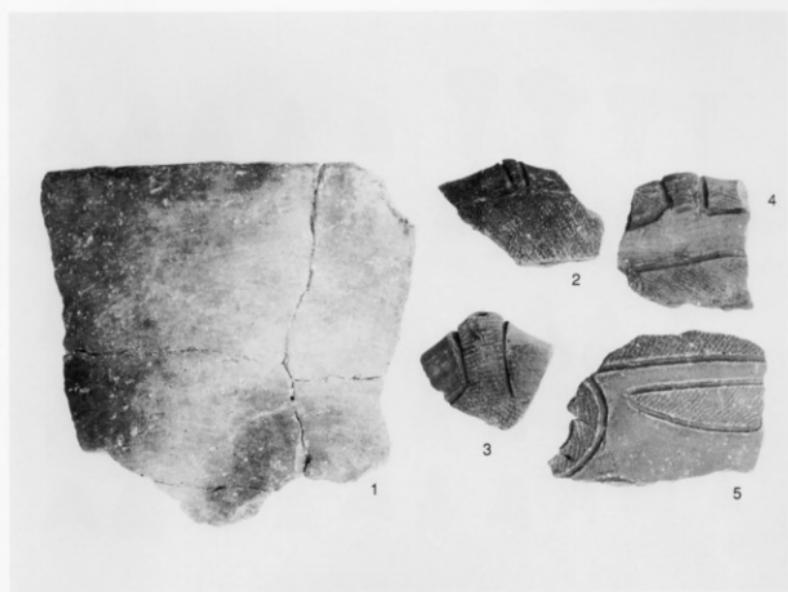




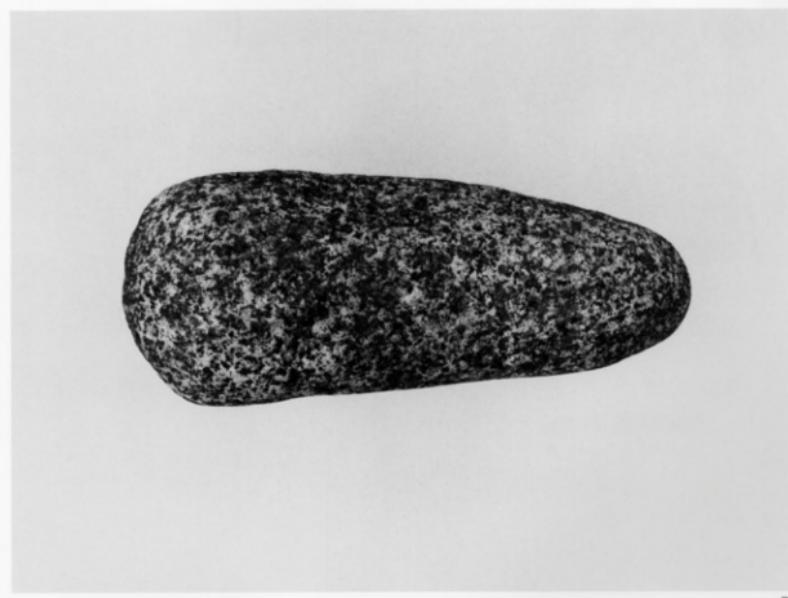
A



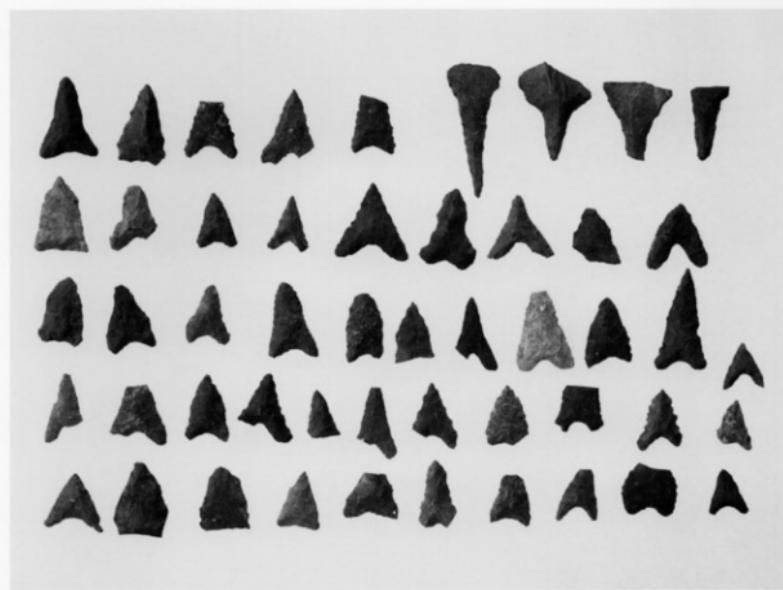
B



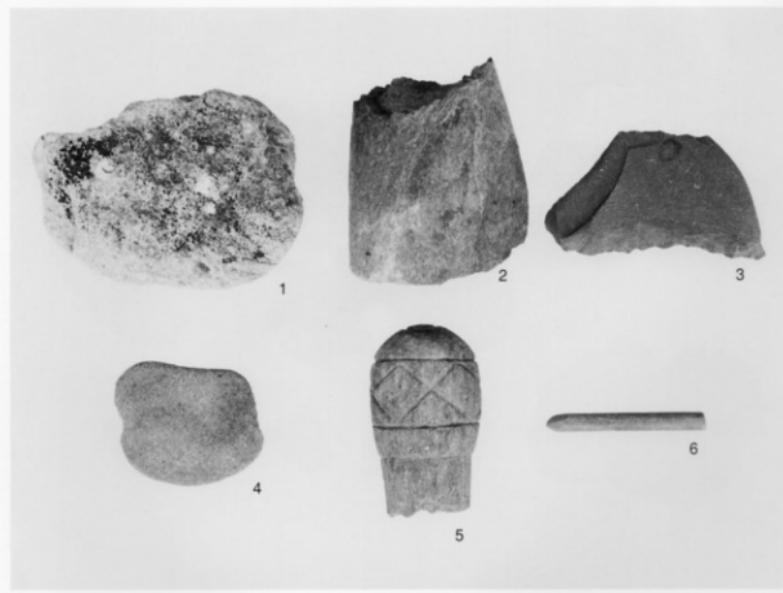
A



B

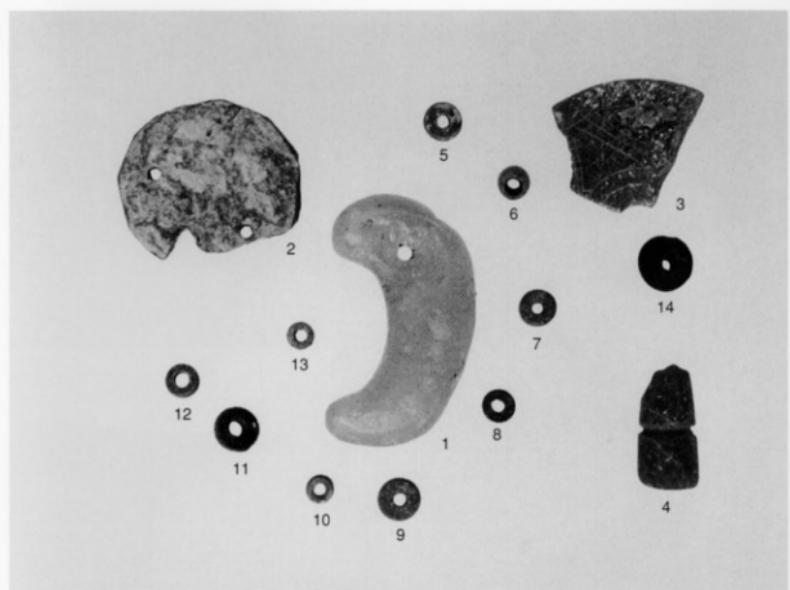


A



B

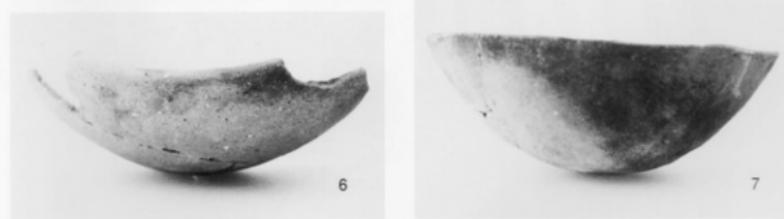
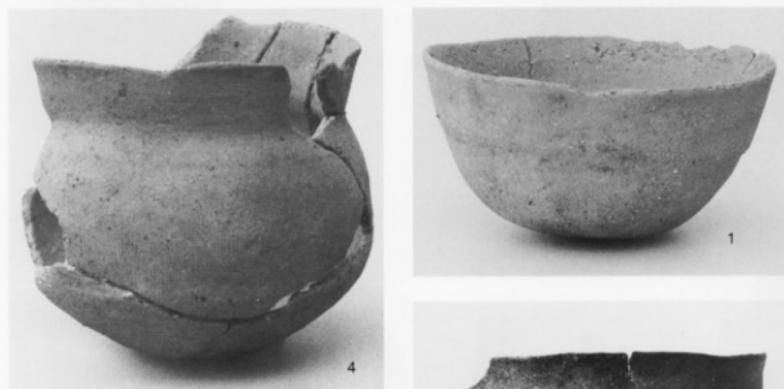
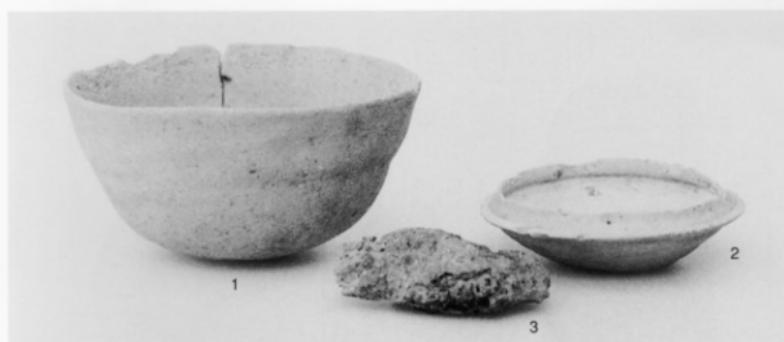
出土遺物 勾玉・有孔円板・臼玉・紡錘車・フイゴ羽口・鉄滓



A



B



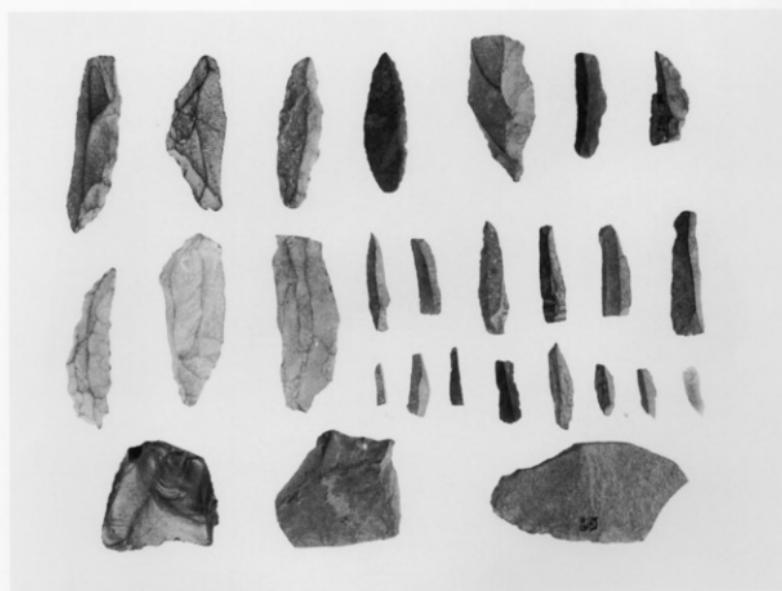
更良岡山遺跡

昭和44年出土 旧石器

チヨツビングトール・各種石器



A



B

更良岡山遺跡

昭和44年出土

土偶・冠形石・冠形土偶

A



B



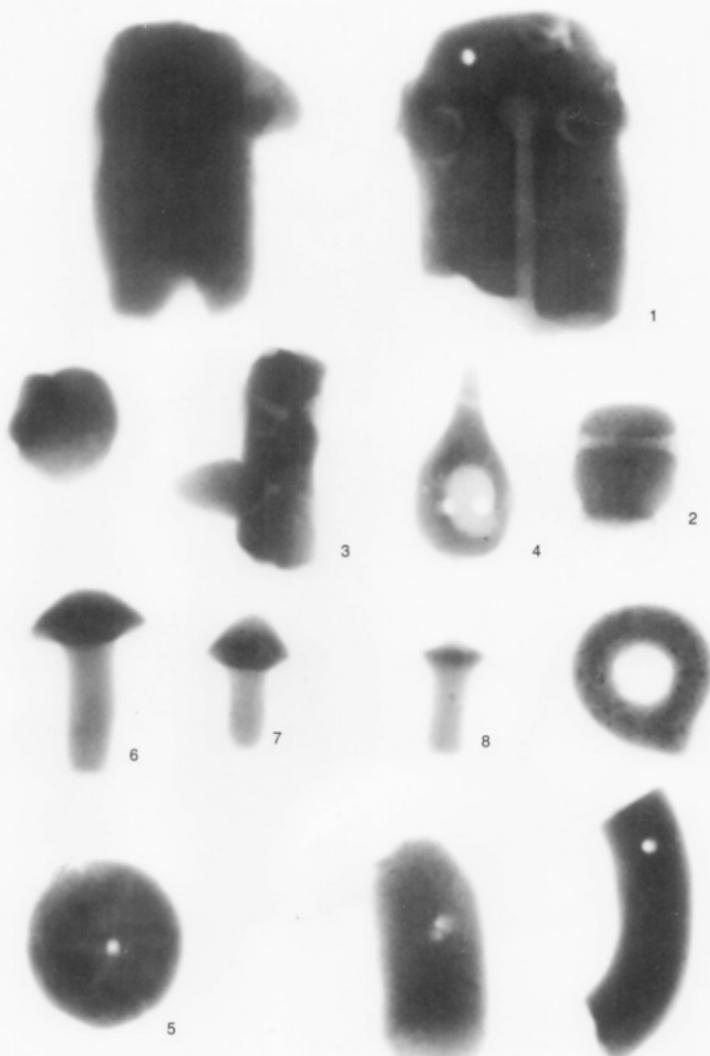
更良岡山遺跡 昭和44年出土 他地域の土器・石皿と敲石



A



B



土偶およびミニチュア祭具レントゲン写真（巻頭図版6-A・図版34-A）

更良岡山遺跡 昭和44年出土

鉄滓・譲良寺跡と正法寺跡から出土した軒丸瓦・軒平瓦

鉄滓・譲良寺跡と正法寺跡から出土した軒丸瓦・軒平瓦



A



B

報告書抄録

フリガナ	サラオカヤマイセキハックツチョウサガイヨウホウクショ
書名	更良岡山遺跡発掘調査概要報告書
シリーズ名	
編著者名	野島 稔
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号 TEL 072-877-2121
発行日	2000(平成12年)3月15日

所取遺跡	所在地	コード 市町村	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
更良岡山 遺跡	四條畷市 岡山	272299	北緯 34° 44' 46" 東経 135° 38' 43"	平成2年3月19日 ～6月22日 平成5年6月1日 ～7月8日 平成5年10月16日 ～11月17日 平成9年1月14日 ～3月17日 平成9年9月30日 ～平成10年2月28日 平成10年11月12日 ～平成12年3月10日	5687m ²	讀良川 改修工事

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
更良岡山遺跡	集落	縄文時代 古墳時代 奈良時代	落ち込み 上塙 墓 井 戸 溝	彫刻石棒 土器・骨 メノウ 瓦	彫刻石棒は北陸の文化を取り入れており、他地域との交易を示した。

讃良川改修工事に伴う発掘調査
更良岡山遺跡発掘調査概要報告書

平成12年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町1-1

印刷 株式会社廣済堂

Prayers to Clay Figurines
